

A Guide to  
The Keihan Electric Railway

25  
703

京阪電氣鐵道線路案内



はしがき

京阪電鐵の線路は徹頭徹尾名所と舊跡とに埋もれて居る、一千有餘年來の帝都たる京  
 都、豊太閤の偉業に依つて歴史上燦然たる光輝を放つた大阪との間を聯結せる沿道  
 は總て豊富なる歴史に依つて彩られてゐるのだ、第一交野の原の如き一千年以前の御符  
 場から、樟葉の宮、船戸御所、渚の院と云つたやうな、天皇皇族の宮殿の舊趾や、こ  
 れに伴ふ稻紳公卿の舊邸、陵墓などは總て此線路に限られたやうに存在して居る、と  
 又一方では歴史上有名な菅公、楠公、豊公等が地を換へ時を變じて、此の附近に緣故  
 を設け記録を遺して居る、殊に男山八幡宮、伏見稻荷神社、蹉跎天満宮をはじめ縁起  
 に富める神社や、由縁深き巨剱が殆んど敷へ切れぬ位位所へ、種々の興味深き口碑  
 傳説が附隨して居る、それ等の總ての事蹟舊記を盡く此の小冊子に収録しやうといふ

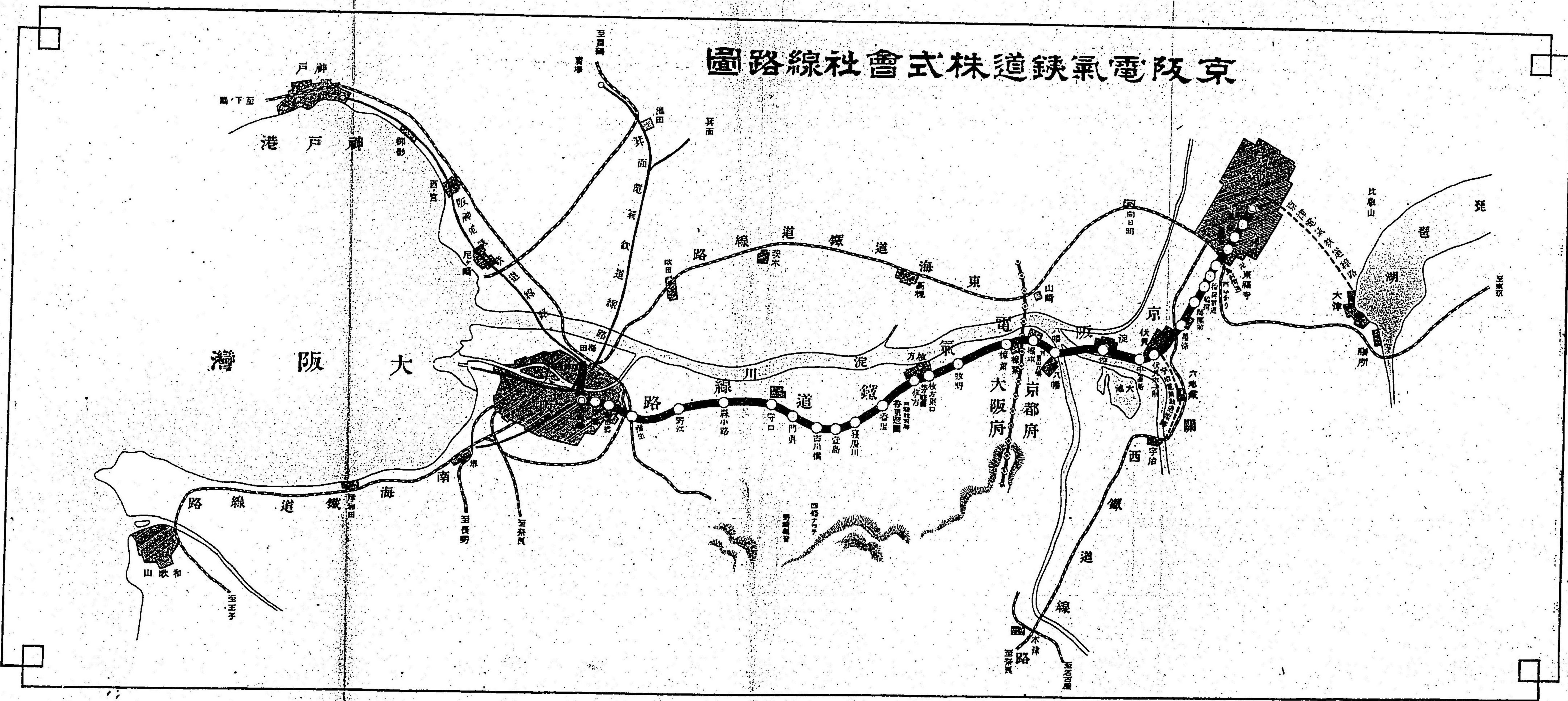
明治  
 43. 3. 26  
 内交

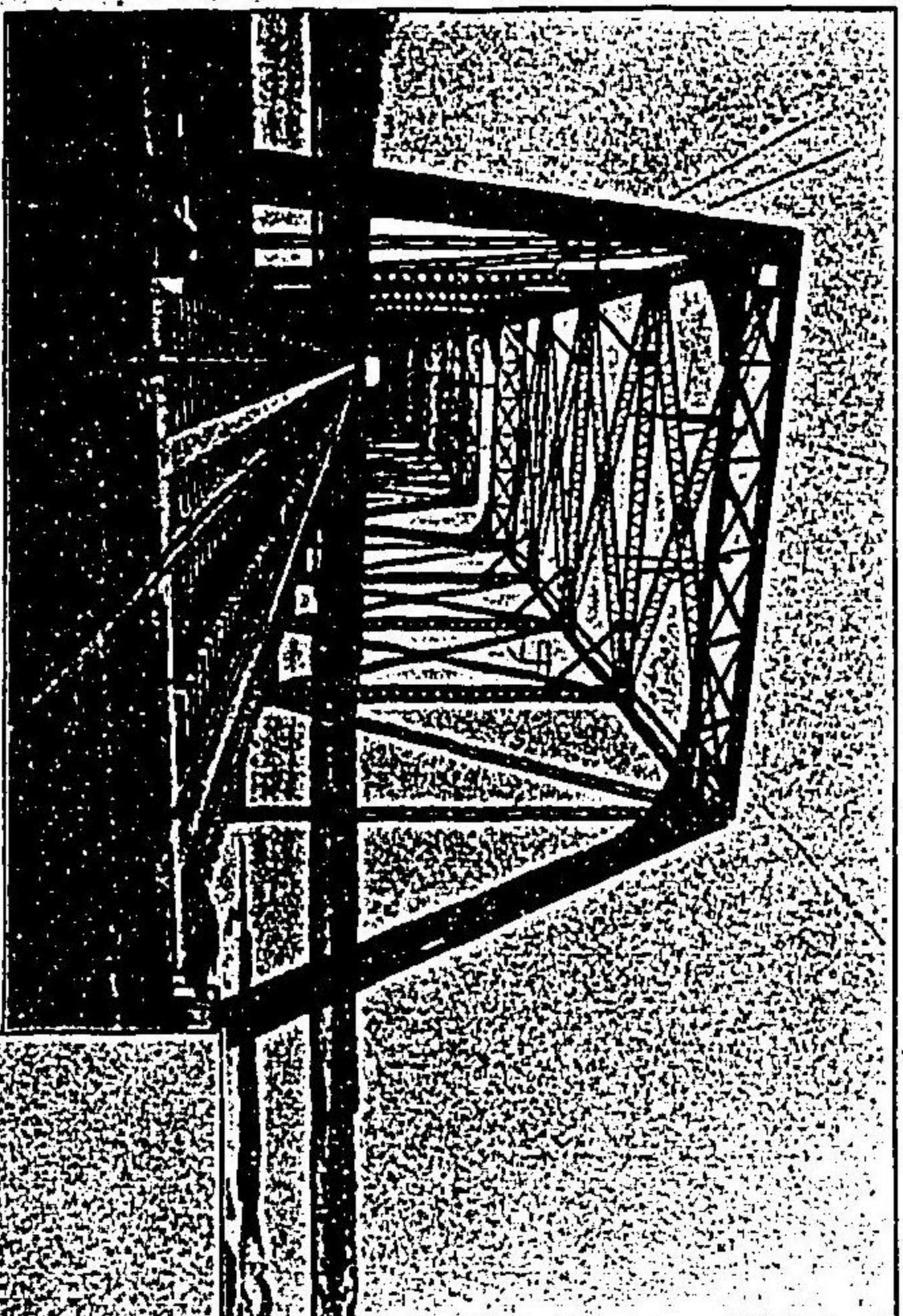
二  
ことは到底不可能の事である、では他日改めて完全な案内記を刊行することとし  
て、取敢へず電鐵線路の開通記念の爲め、爰に此の小冊子を刊行した次第である。

明治四十三年京阪電気鐵道株式會社線路開通前一ヶ月

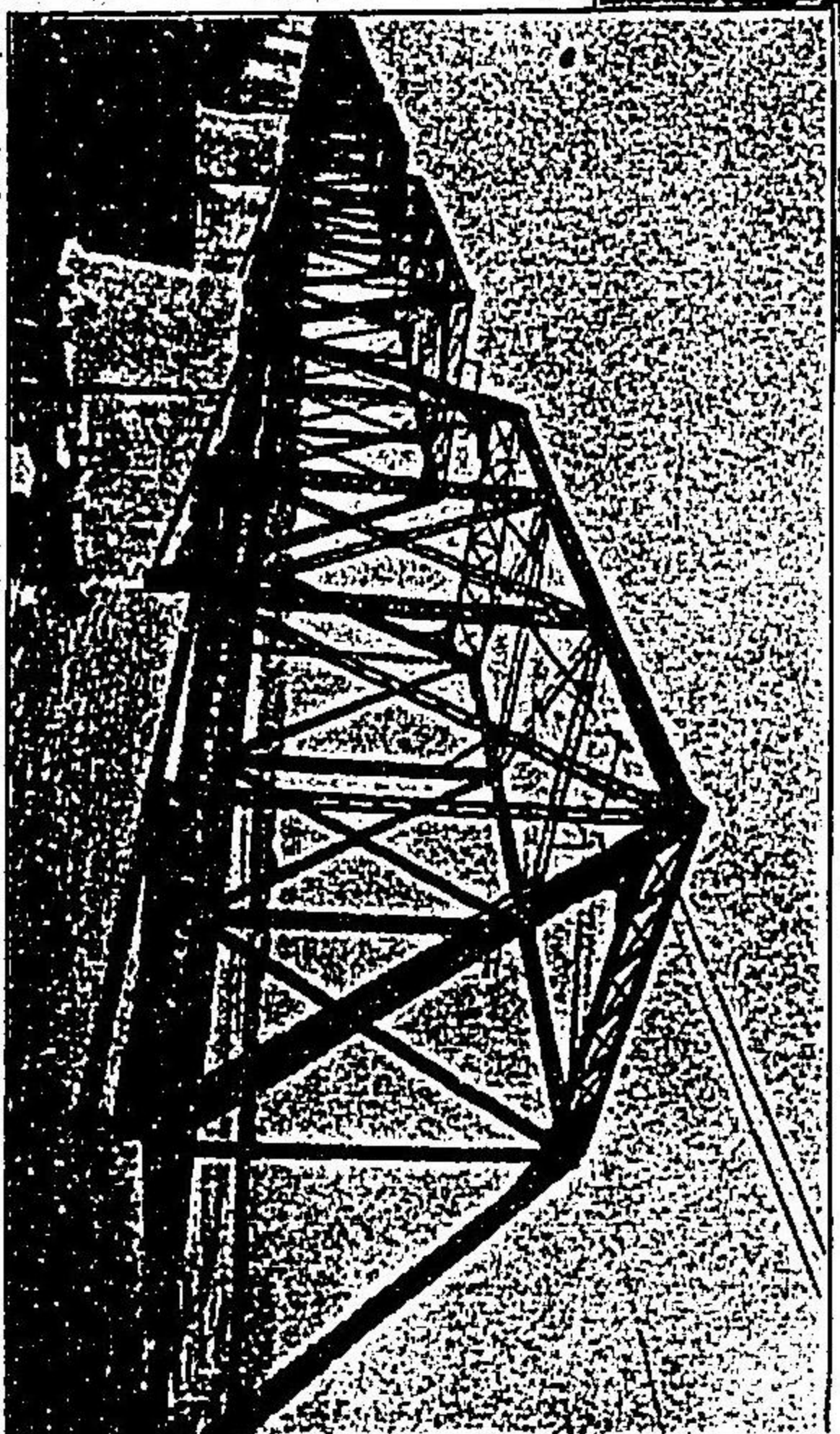
編 者 識

# 京阪電氣鐵道株式會社路線圖

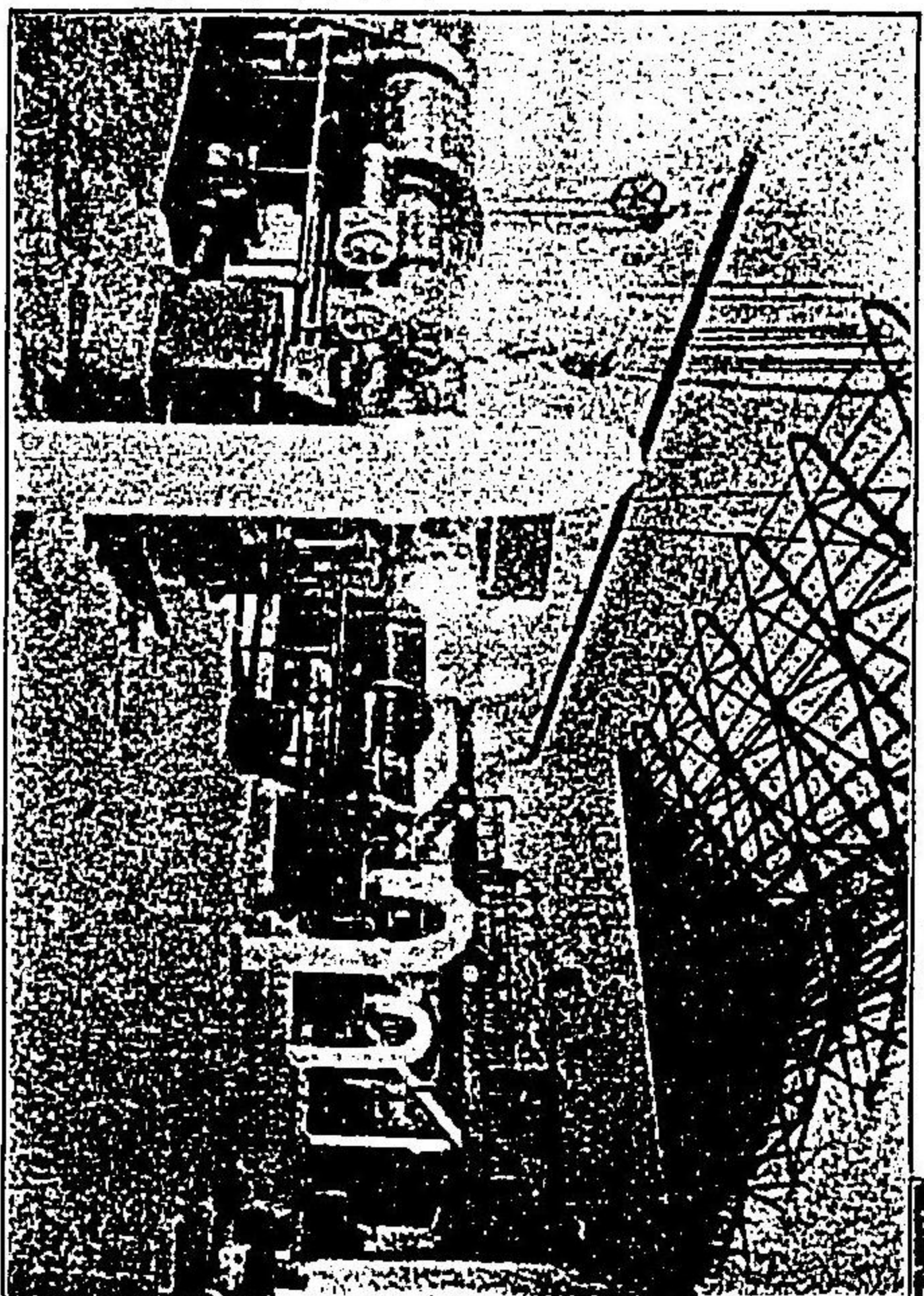




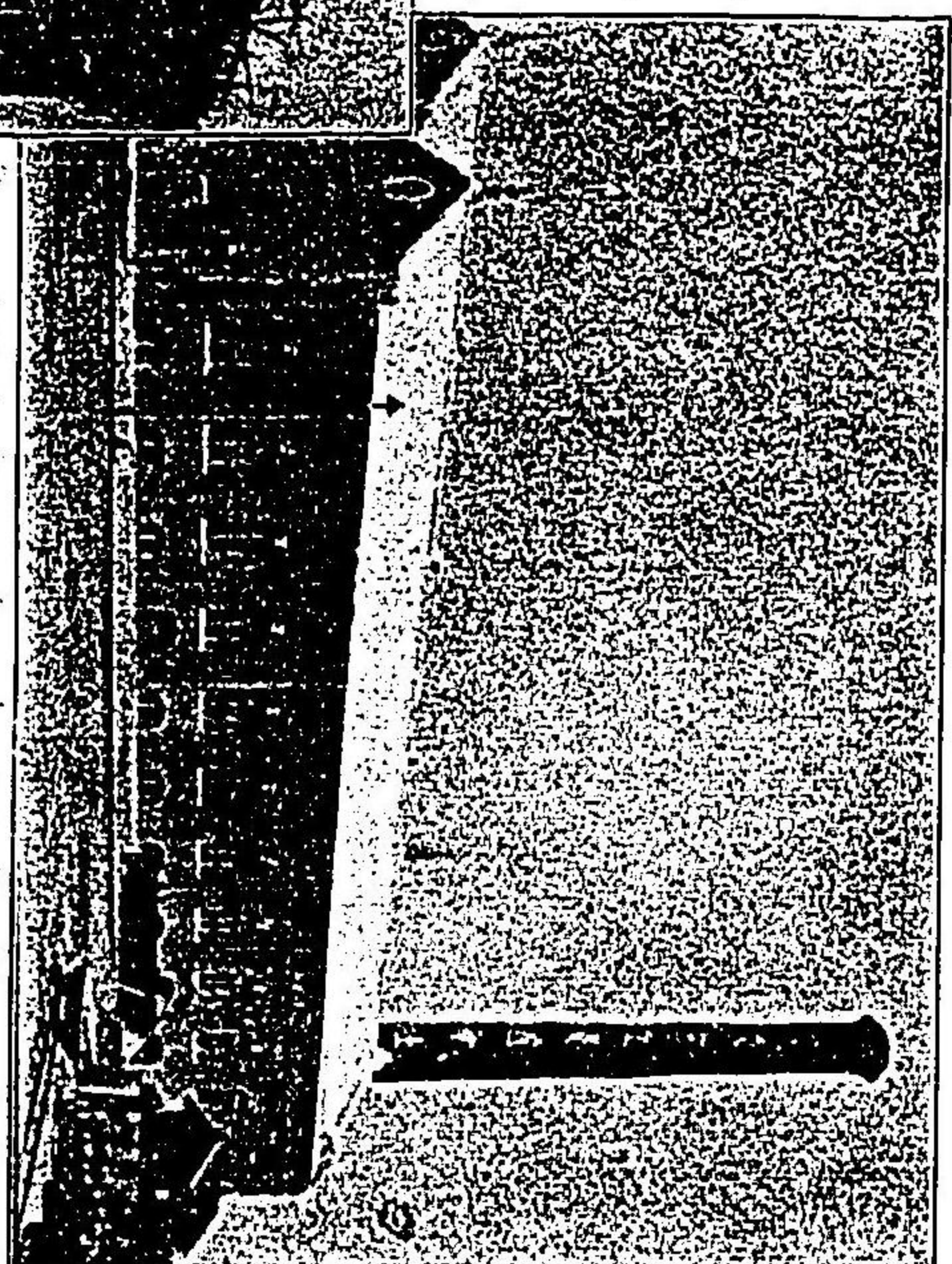
宇治川鐵橋



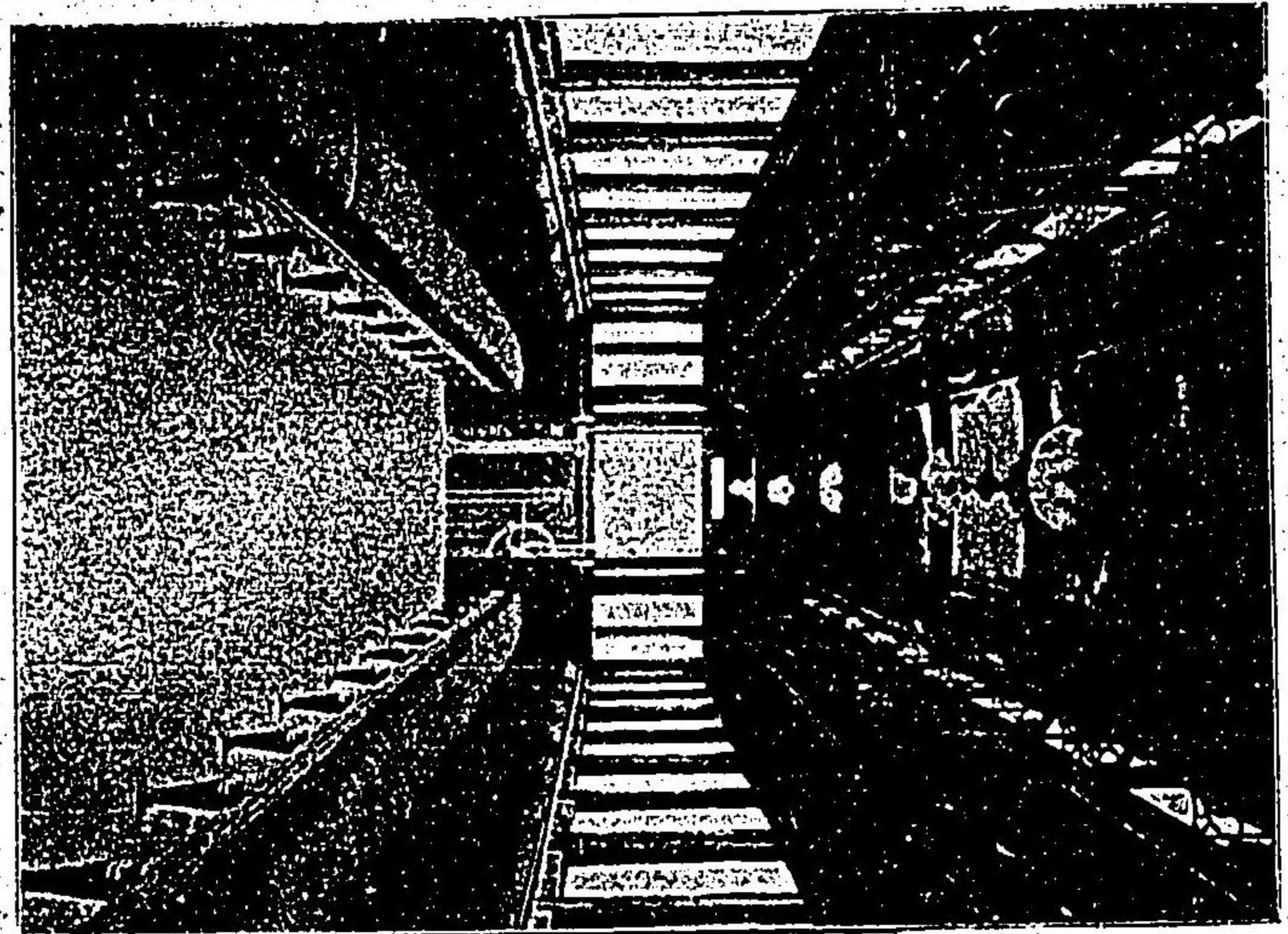
木津川鐵橋



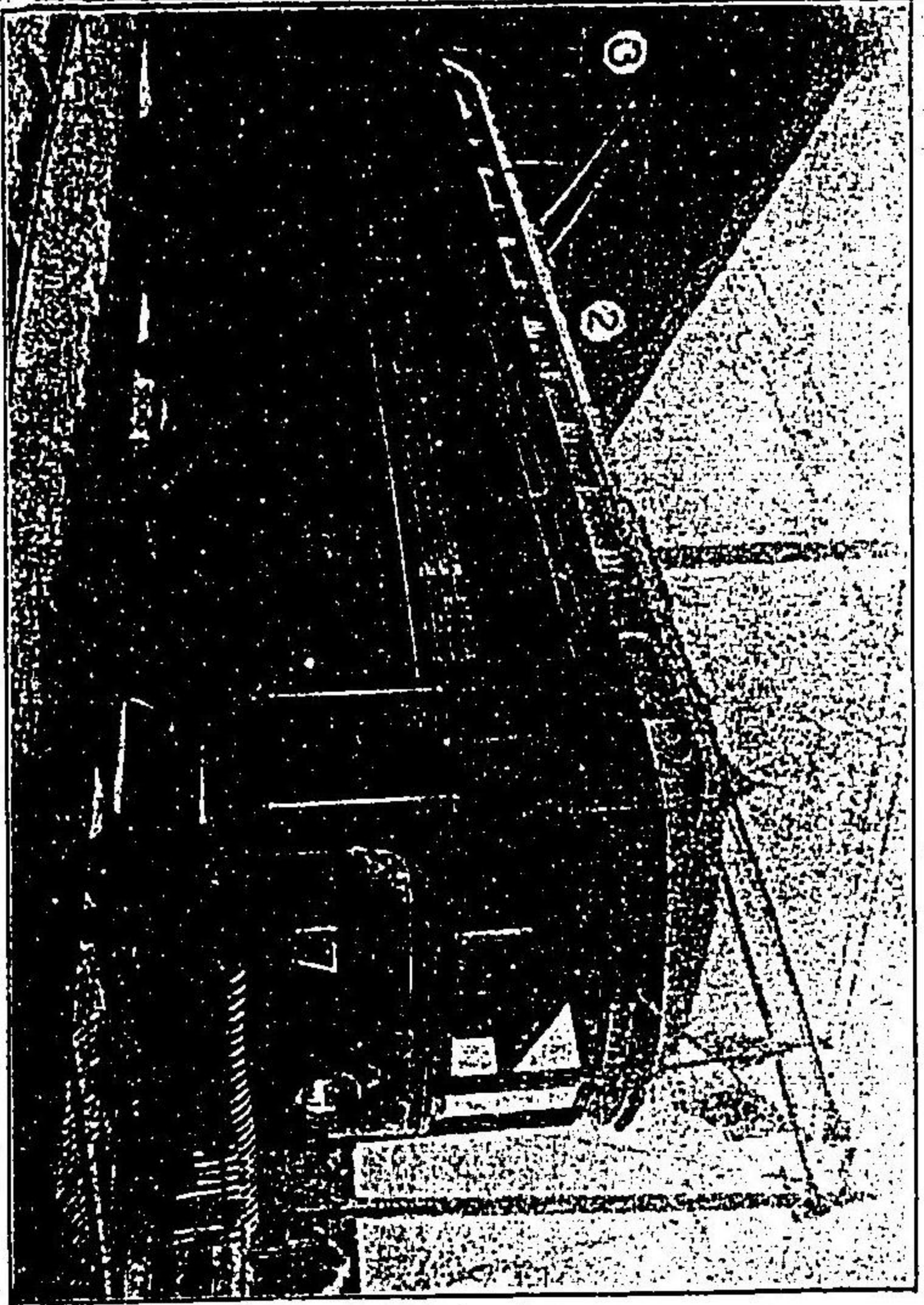
室機汽所電發馬毛



所電發馬毛



電 車 內 景



電 車

# 京阪電鐵線路案内目錄

## ◎大阪市線路附近

天滿橋……澱江の納涼船……天滿宮……將菜島……  
京橋……大阪城……網島……大長寺……櫻の宮……  
造幣局……泉布觀……森の宮……豐津稻荷……  
真田山……鷗野……母恩寺……鷗塚……長柄橋趾……  
……鷗塚……榎並の舊塞……高瀬の淀

## ◎守口及佐太附近

守口町……江口の里……君の堂……飯盛山城趾……  
……四條殿神社……小楠公墓……楠公夫人碑……和  
田賢秀墓……四條殿古戰場……野崎親吉……龍尾  
寺……權現瀨……國中神社……忍の岡……清瀨……  
……佐太神社……菅相寺……來迎寺……永井伊賀守  
陣屋趾

## ◎枚方及樟葉附近

枚方町……光善寺……蓮如上人遺跡……陸趾山……

## ◎八幡及淀附近

……陸趾天滿宮……香里遊園地……杉子絶間の趾……  
……熊塚山……枚方遊園地……櫻新地……くらわん  
か船……鍵屋……天の川……百濟王神社……清院  
趾……洛岡……和田寺……山崎院舊趾……交野行  
宮趾……交野原……樟葉宮趾……片野神社……山  
田池

八幡町……雄徳山……男山八幡宮……太子阪……  
長清塚……頓宮殿……放生川……細橋……石清水  
神社……神應寺……楠公の楠……杉山不動尊……  
引目の瀨……大石塔……淀屋辰五郎墓……松華堂  
の墓……小野頼風の墓……女郎花塚……善法律寺  
……正法寺……八角院……車塚……大西坊……橋  
本……西遊寺……洞ヶ峠……圓福寺……足立寺趾  
……山崎……天王山……寶積寺……妙喜庵……



長岡天満宮……粟生光明寺……櫻井の里……淀町  
……淀城趾……興軒神社……美豆の桃林……浮田の  
森……淀川

◎宇治及木幡附近

宇治町……宇治の茶摘……宇治川……宇治橋……  
桐原日符宮趾……朝日山……興聖寺……斷碑……  
朝日焼……浮島十三塔……喜撰獄……平等院……  
鳳凰堂……扇の芝……浄土院……縣神社……木幡  
里……巨幡陵……宇治陵……黄栗山……隠元禪師  
墓……巨椋池

◎伏見及深草附近

伏見町……伏見殿趾……伏見山……伏見城趾……  
桃山梅溪……龍雲寺……桃山天満宮……桓武天皇  
陵……御香宮……伏見義長碑……觀月橋……三夜  
の莊……指月庵……船戸御所趾……京橋……中書  
島……寺田屋……大黒寺……墨染樓……那須與一

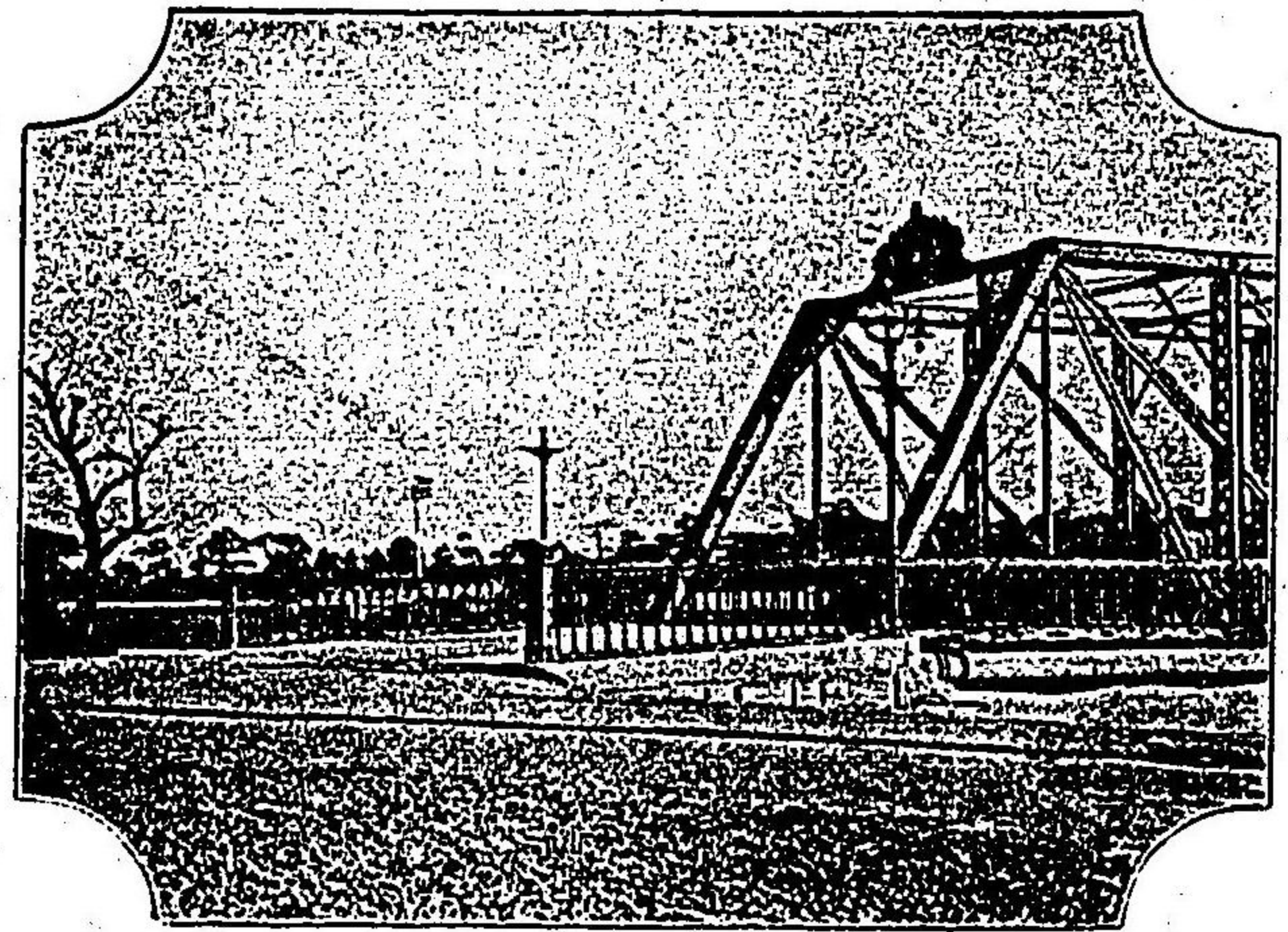
の墓……久米仙人の舊趾……撞木町……藤森神社  
……伏見街道……稻荷神社……深草郷……鴨の床  
……深草十二陵……瑞光寺……寶塔寺……深草陵  
……少將小町塚

◎京都市線路附近

東福寺……藤原俊成墓……光嚴司墓……泉涌寺……  
……法性寺……夢の浮橋……今熊野権現……劔神社  
新熊野神社……大佛殿……豐國神社……耳塚……  
養源院……三十三間堂……帝室博物館……佛光寺  
……紅梅殿神社……御影堂……長講堂……市比賣  
神社……因幡樂師……玉津島神社……五條天神社  
……五條大橋

大阪市線路附近

天満橋 本社電鐵線路の起點にして天神橋の  
上流に架す、難波、天神の二橋と共に大阪三大  
橋の名あり、長さ百十六間餘、幅六間、全部鐵  
材より成る、此橋元は普通の木造なりしが、明  
治十八年の大洪水に際し、天神橋と共に流失せ  
るより時の府知事建野郷三氏幾多の困難と衆議  
とを排して一大工事を起し、三年の日月を費し  
て竣成せるものあり、工費十三萬六千七十圓、天  
神橋も同時の設計にして長さ百三十一間餘、幅  
六間、工費十五萬三百十八圓、今は共に澱江の  
二大異觀たり。



天 満 橋

**澁江の納涼船** 大阪の名物として遠近に知られたり、毎年夏期八月より九月の末に至るまで夜間納涼船を浮べて難波橋より天神橋の上流に集まるもの敷ふべがらす、雅びたる行燈、雪洞の影を水に映して櫓を操る風情見るさへ涼し氣なり、青き簾を垂れて阿嬌が囁す三味線太鼓の音賑やかに流れを溯る屋形船あれば、一椀の茶を啜り基を圍みながら流れに任せて棹す小舟あり、煙火は絶えず打揚げられて双龍玉を争ひ群蜂風に散るの奇觀を呈し、大阪名物の淨瑠璃、仁輪加、新内、物まね等の餘興船はろの間を櫓まはり、客の需めに應じて一節の藝を賣るも可笑しく、ビール、正宗、菓子、果物よりうごん蕎麥、せんざい、鱈汁の末に至るまで總て調はざる物なければ、下戸も上戸も船槽き戻す煩ひもあし、真に之れ水の都の不夜城として大阪市民の夏の歡樂を代表せるものと謂ふべし。

**天満宮** 天満橋停留所より北三町餘天満大工町に在り、祭神は菅原道真たるは云ふまでもなし、享保九年の火災に本殿を烏有に歸し、その後再建せしものは天保八年大鹽平八郎の騒亂に焼失し、十年を経て漸く再建せるが明治三十四年更らに大修繕を加

入たるは現在の社殿なり、去四十二年七月の北區大火の際附近の民家は率ね焼拂はれしも、本社のみ危く延焼を免がれしは神靈の威徳いと畏し、毎年七月二十五日夏季祭典を行ひ、堂島川より松島御旅所に船渡御の式あり、供奉の船は列を正して篝火を焚き鉦鼓相合して河伯を驚かす様壯觀云ふばかりなし。

鼓。聲。如。沸。暮。橋。風。  
光。焰。燒。天。篝。火。紅。  
兩。岸。喧。嘈。向。河。拜。  
神。興。已。在。彩。舟。中。

**將基島** 昔は網島に接して蘆荻生茂りたる小島あり、その形將基の駒に似たればとて將基島と稱へ、月の夕、霧の旦などには芦吹く風咄唔の聲と和し、風光又優美かりしが今は纒かにうの名を天満橋下の一突堤に留むるに過ぎず、空しく好事家の魚釣場所とかり了んぬ。

**京橋** 網島の西南に架したる古雅ある木橋あり、京都伏見の要路に當るをもつて昔は旅人の往來繁かりしも今は左る事あし、橋上より東方遙かに、生駒、金剛の連山を望み、殊に大阪城の白堊、高閣、斷崖を歴して尙當年の雄姿を留むるを見るべし。

大阪城 大阪城は千古の英雄豊臣秀吉に依つて歴史上一段の光輝を添へたり、天正十年秀吉山崎の合戦に逆臣明智光秀を亡ぼし、その翌十一年三十餘國の人夫を發して大修理を加へて居城とす、後秀吉柴田勝家を滅して天下略平定し、十四年聚樂の邸成り、十八年諸將を會して征韓の議を決したるは實に城内山里の茶室あり、翌文祿元年師を出して肥前の名護屋に在り、二年八月秀頼城内に生るとの報あり、偶々明國和を請ひ、名護屋の陣營を去つて大阪城に歸り、四年三月伏見城に移り、慶長三年薨去す、秀吉薨去の後秀頼大阪城に在りて内大臣を拜し從一位に叙せられ更に右大臣に遷る、時に徳川家康征夷大將軍をうの子秀忠に譲りて江戸に退隱し、秀忠二條城に在りて内大臣に任じ正二位に叙せらる、實に慶長十年なり、是より豊徳二家の官位交々累進して權威漸く懸隔し來れり、十九年八月秀頼京都大佛殿を修し鐘供養を執行せんとするに際し、家康事を構へて争端を發く、鐘銘棟札の記は是あり、豊家の遺臣片桐且元はこれが爲め大阪城を退去し十月遂に兵を交ゆるに至れり、秀頼壘を深うして城に據る、戦ひ利あらずして遂に濠渠を埋め石垣を毀つといふ最も不利益ある條件の下に和

議を結びたり、世に云ふ大阪冬の陣あり、元和元年四月老翁ある家康再び事を構へて秀頼に抗し、來つて大阪城を攻む、木村重成等力戦して死し、城兵遂に防ぐ能はず、秀頼の近臣六角與左衛門火を本丸大臺所に放ち、秀頼及び生母淀君は侍臣三十餘名と猛火に包まれて自殺す、是れ大阪夏の陣あり、天正十一年秀吉城を築いてより三十二年、一炬にして此の名城を失ひたるは惜むべし、豊臣氏亡びて後徳川氏は此處に城代を置き、元和六年正月關西の諸侯に修築の工役を課し、家永又寛永三年造營の工を起し、前後九年を経て廢殘の跡稍々舊に復するを得たりと、以つて舊城の壯觀を想ふべきかり、その後萬治三年、寛文五年の再度の雷火に本丸を破壊され、天守臺を燒失し、更に天明三年の雷震に大手門を灰燼せるが、天保八年大鹽の亂ありて以來、城修築の議起り、同十四年市の富豪鴻池善右衛門等百五十餘人に金百五十五萬五千五百兩を課して大工事を起し、役十一年安政五年に至りて天守臺を除く外殆んど寛永の觀に復したり、後慶應元年幕府長州征伐の議起るに及び將軍家茂大兵を率ゐて江戸を發して大阪城に入り、翌二年城内に薨去し、同三年十月徳川慶喜政權を奉還して王政古に復り

天皇萬機親裁を宣告し給ふや、慶喜二條城を退きて大阪城に入り、討薩表を上らんとて再び京師に上らんとし途中薩長の兵と衝突して大に敗れ、慶喜夜に乗じて逃る、慶喜退走の後城中火を失してまた灰燼に歸し、今は纔かにその一部の建造物と荒廢せる外廓とを遺すのみ、又當年の雄姿を見るべからず、明治五年大阪鎮臺を設け、今は第四師團司令部に充てられ、附近に歩兵第七旅團、歩兵第八聯隊、歩兵第三十七聯隊、騎兵第四聯隊、野戰砲兵第四聯隊等あり。

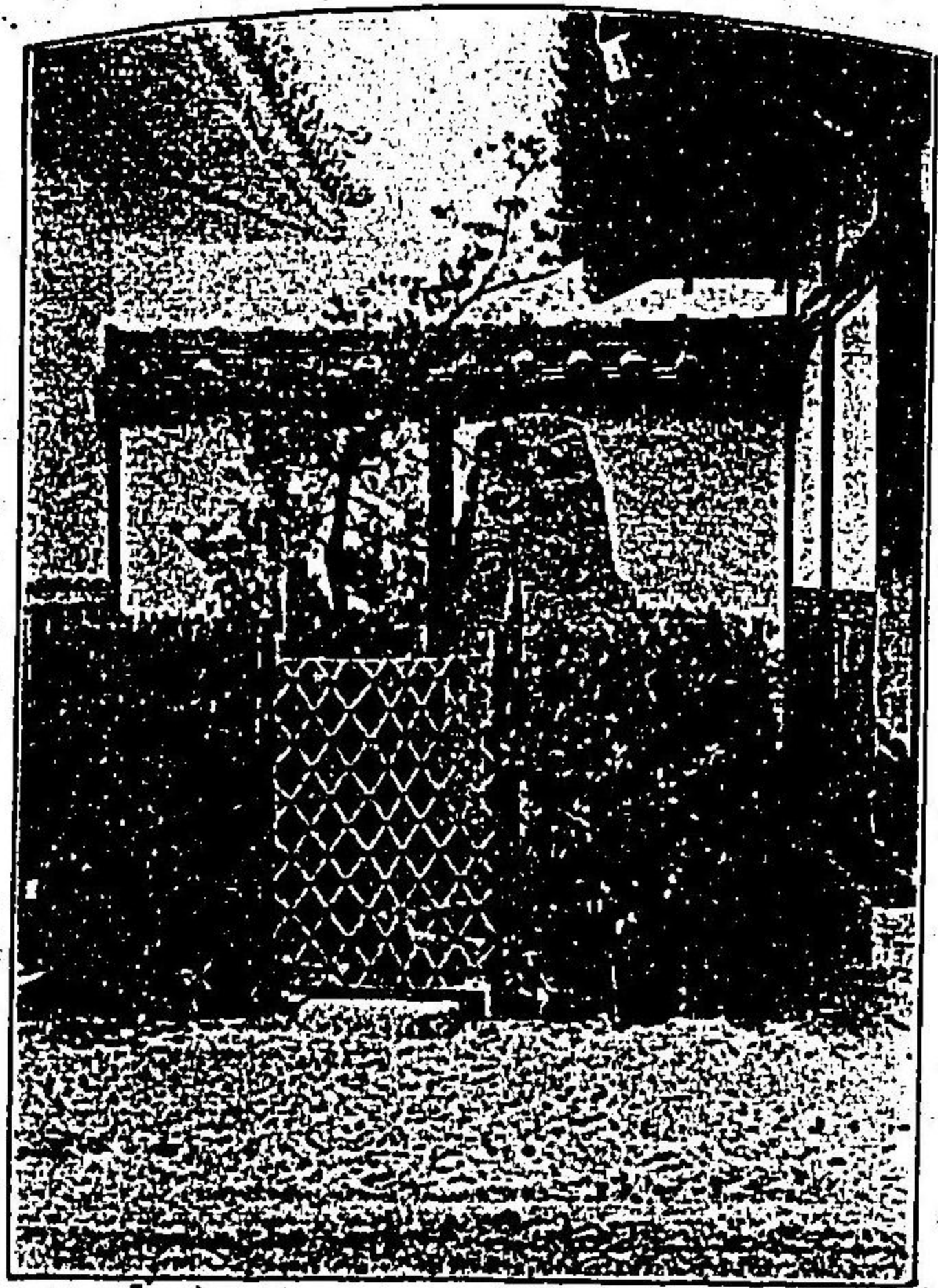
網島 みじか夜や光明遍照御城からの句をもつて知られたる網島は、京橋の東北、京橋停留所の設あり、寛文二年の頃まで三島郡吹田、北區野田と共に網干場あり、西北は清流に臨みて市街の塵烟を避け、京阪を上下する船の櫓聲を聞くの他また喧囂を見ず、近く造幣局と相對し遠くは信貴、葛城、金剛の諸山より六甲、武庫、摩耶の群峰を双眸の裡に收め、花晨月夕四時の景色に宜し、近來別業を此處に營む者多く料亭には鮎宇樓の聲價を擅にせり。

大長寺 日本の文學を解する者にして近松門左衛門の名を知らざるはあく、巢林



子の作を讀みしものは「心中天の網島」に小春、治兵衛の名を記憶せん、實にや南無あみ島の大長寺といへば、その本尊の阿彌陀如来よりも鯉塚の石碑よりも、小春治兵衛の情事によつて語はるゝ面白けれ、されど近年富豪藤田某寺域を買収して別業を營み、寺は多くの由緒を黄金の光に抛ちて網島停車場の傍に移されたり、大長寺は元鮎宇樓の東に在りて浄土宗京都黒谷の本寺に屬し、慶長年間鯉江備中守の創立せるものあり、今の境内は餘り廣からざれど清楚、自然石の一碑あり、名づけて鯉塚と云ふ、傳説に依れば寛文八年此の里に一漁夫あり、淀川に網して一大鯉魚を

獲たり、ろの金鱗に巴紋ありて燦爛たり、里人之れを奇とし水邊に養ひて衆人に觀覽せしむ、後幾干もかくして鯉死して之れを寺に葬る、ろの夜寺僧夢に一武人の身に巴紋の中冑を被りて枕頭に立ち、  
我は過ぎにし元和の戦ひに武功を樹てゝ戦死せるものあり、過去の業因によりて斯く魚族に生れしも今和尚の引導を受けて此處に葬られ、供養の徳によりて成佛すと告ぐ、僧夢覺めて法名を龍登鯉山と號し、碑を建てゝろの冥福を弔ひたりと、又境内に比翼塚ありこれぞ近松翁の戯曲に詠はれたる紀の國や小春、紙屋治兵衛の情死の跡を弔へるものにして、小春は大阪曾根崎新地の遊女、治兵衛は堺筋の商人あるが、麻



小春治兵衛墓

の如き情緒は互ひの身に纏綿して浮世の羈絆を絶つに由なく、寛保五年十月十四日の夜、二人は密かに喋し合せて此處に拔出で、夜の回向の群衆に紛れて夜もすがら法座に連かり、やがて人散じて境内寂寞、五更の鐘松の梢を渡る頃かねて用意の短刀にて倅ましくも最期を遂げたり、遺書あり、住職太く二人の死を憐れみ。

みか人も南無あみ島のよき手向け

かみやほとけのねんに引かれて

の一首を手向けて厚く葬りたり、一代の文豪によつて歌はれたる悲劇の舊跡は今や絶わかんとして、僅かに此の一基の塚を止むるに過ぎざるを『泣かしやんせく』、ろの涙が蜷川に流れたら、小春が汲んで飲みやろうぞ』の名句を遺したる蜷川さへ、あはれ四十二年の北區大火の難に遭ふて、今は埋立られたるも遺憾あり。

櫻の宮 天照皇太神を祭り、元中野村に屬せしが今は大阪市に編入せられて中野町と云ふ、淀川の清流に瀕して、社頭頗る淨晒、境内櫻樹多くして陽春四月の候枝頭盡く淡紅の花を粧へば、ろの麗艶實に云ふべからず、地形又優秀にして、東方遙かに生

駒、飯盛の翠黛を望み、南は大阪城の白堊樹木參差の間に聳け、西北は即ち激江の清潭を挟みて造幣局、泉布觀に對して眺望甚だ佳あり。

花に風輕く來て吹け酒の泡

嵐

雪

造幣局 激江の右岸、櫻の宮と相對して形勝の地を占む、造幣局は我國最舊の洋式金工場にして明治四年に創設されたるものあり、内に精製したる貨幣地金を溶解する所、地金を引伸ばして切斷する所、文字及び紋章を打込む所など、各課分擔して貨幣鑄造の職に當り、秩序頗る整然たり、庭内數株の櫻あり、毎年花季三日を限り特に公衆の通覽を許可す。

泉布觀 元造幣局に屬し、應接所に充てられしが明治五年 今上陛下御西巡の際、此處を行在所に定め給ひて、泉布觀の稱を賜りぬ、後屢々行幸あり、今尙玉座を存して何人の出入をも禁ず、二十四年宮内省の所管に移り、近時美術協會より拜借の儀を願出で、爾來美術展覽會等の催あり、庭内萩多く、花時粉紅の花を着けて最も雅致あり森の宮 玉造の街端、城東の杉山に對して一古祠在り、森の宮と云ふ、人皇三十三

代推古天皇の六年四月、鶴二羽を難波の森に養はしめ給ひし歴史を存する處あり、昔は鶴の森とも云へり、又崇峻天皇の二年聖德太子初めて四天王寺を玉造の岸に建立し給ひきと傳ふる所によれば、或は當時の海波は此邊までも打寄せたりけんと思はる、境内には本殿、幣殿、拜殿等ありて春秋の候、老幼相擁して杖を曳くもの多く宛然城東小公園の觀あり。

豐津稻荷 森の宮の南方二町餘俗に玉造の稻荷と稱す、倉稻魂命、稚日女命、軻遇突智命、月讀命、下照姫命の五座を鎮め、遠く崇神天皇の御宇に創建されしも、爾來三たび火に遇ひて三たび改築されたり。

眞田山 玉造の南方に一丘あり、地は元大阪城の出丸ありしを、慶長元和の役眞田幸村の陣地を占めてより眞田山の稱あり、又加賀宰相の陣屋を此處に設けたりしに由り一に宰相山とも呼ぶ、丘山に姫山神社、三柱神社あり、秋は月下草露を踏んで唧々たる蟲の音を聞くによろしく、冬は雪見の名所として世に知られたり。

鷓野 大阪城の東方數町、平野川の清流蒼龍の走るが如く廣き原野に緩流するを見

るべし、大阪陣の古戰場として光景甚だ落莫、野徑十歩我に鵠立つ趣ころ轉た當年追懐の情を深からしむべし。

母恩寺 洋上江町の西北隅に在る比丘尼寺あり、法皇山と號し惠心僧都の作丈三尺

の立像阿彌陀佛を安置す、仁安三年三月後白河上皇御母待賢門院御菩提のため建立し給ひ、御母后報恩の意に出づるをもつて斯く名づけ給ふ、昔は大伽藍にして十二坊を有し、數ヶ所の寺領莊園あり、世々皇女を住職と仰ぎ來りしが、正平中兵燹に罹りて舊觀を失ひ、今は僅かに一字を止むるに過ぎず、境内蓮池あり、白葩紅瓣水を抽で、曉破帛の音と共に咲く、その清趣翹すべきあり。

鶴塚 塚は洋上江町の東方五六丁、大楠樹千年の枝を擡げたる下に在り、傳へ云ふ、昔源三位頼政鶴を射殺し、之を洛中洛外に廻はして後船にのせて淀川に流しよに此の地の渚に止まりしを、土人地中に埋めて一基の塚を建てたるありと。

長柄橋趾 古來名橋多しと雖も津の國長柄の橋は詩人の情懷に入りたるものは稀あり、その架設の年代の如きも多くの古書に徴するも詳かからざれど、その趾の噴々

として千年の後尚雅人の腦裏を去らず、後世好事家の云ひ傳へけん長柄の人柱と共に今尚人口に膾炙せり、口碑に云ふ、昔此の邊に男あり、多辯のため役人どもに罪せられ長柄の橋柱に命を召されて河伯の餌となりぬ、その女稍々長じて河内國山田村の長者の許に嫁す、その母戒めて曰く、汝が父は咎めかくして多言のために罰せられ、長柄の人柱に命を召されぬ、汝長者の家に行くとも必らず口を開くと勿れと、女長者の許に嫁して母の教を守り、口を開かざること數月、人皆嘔ありと嘲ける、夫これをいぶせく思ひ去らんとて遠く野に送るに、偶々雉子の鳴聲を聞いて矢を放して獲る者あり、女これを見て悲しみ。

物いはし父は長柄の人はしら

雉子も鳴かすは射られましものを

と口すさみて號泣せり、夫憐れに思ひて再び我家に連れ歸り、偕老同穴の契りを完ふしたりと。

○

紀 貫 之

われのみり長柄の橋は渡りける  
共にふりぬる身とやありぬる

平 兼 盛

朽ちもせぬ長柄の橋のはし柱

久しき事の見わすもある哉

藤 原 家 隆

むかしたに昔朽ちける津の國の

長柄の橋の跡をしる思ふ

鶯 塚 豊崎村南長柄の西方田疇の間に古墳あり、面積僅かに八坪許、一樹の椈の淋し氣に聳ゆるを見る、里人之れを鶯塚と呼べり、昔は墳上に老梅の屈曲せるあり、六瓣の花を開く、元旦には黄鳥必らず來りて春を告げしより此の稱ありと、然れども今は老梅空しく根を絶ち鶯塚の標石も倒れて又春鶯轉を聞くに由なし、又一説あり、孝徳天皇の長柄豊崎宮におはし時、鶯式部と呼ばれし宮女あり、大化四年三月歸ら

ぬ旅路に上りたるを、天皇あはれに思召し、此處に美人の玉骨を埋めさせ給ひたりと云ふ。

櫻並の舊塞 今福の北方、元櫻並の莊に舊塞あり、今の大字野江の邊あるべし、天文年間三好長慶攻めて之れを陥る事あり、南山巡狩録には正平二十四年楠正儀北朝へ降りしかば、一族敵味方に分れたり、足利義滿は正儀を助けんため軍勢を差向け、四月正儀は櫻並十七箇所に陣を取るとあり、十七箇所とは今の守口あり。

高瀬の淀 澱江の水守口町の東南より岐れて三郷村大字高瀬を繞りて流るゝを高瀬川と云ふ、高瀬の淀とは此處あり、今の大字高瀬は世木、大枝、馬場を合併せる古の高瀬の里にして、古來多くの歌人が吟詠に上りし名所の一あり、世木に高瀬神社あり、延喜式内の舊社にして今は單に入幡と呼び倣せり。

津 守 國 冬

こも枕高瀬の淀のうかひふね  
ねかくに幾夜かよりさすらん



○  
こも枕高瀬の淀にふる雨の  
数よりしけく飛ふ螢かゝ

### 守口及佐太附近

守口町 守口町は大阪市元標を東北に距る事二里、守口停留所の設けあり、淀河の水勢江口より轉じて弓狀を爲す處あれば、屢々洪水の害を被りしが、淀川改修工事の竣成を告ぐるに至り、今は殆んど廢川を抱いて悠々眠りに就くが如し、守口御坊は菟高く町の中央に聳ね、明治元年 聖上大阪行幸の際鳳輦此地を過り、行在所を難宗寺に、内侍所を盛泉寺に置かせられ、三種の神器出入の爲め新に門を築いて扉重門と名づけたり、此の門今尙盛泉寺大門の傍に在り、町の西端に日扇上人終焉の地あり、古來名物として知られたる守口漬は殆んど廢絶せり

江口里 淀川の水流中島、新庄両村組合大字江口に來り、岐れて神崎川を出だす、此

の岸頭ころ古の江口の里あるべし、江口とは難波江口の略稱にして往時淀川の河口難波江の口にあたり、當時西海より來れる船舶は皆此處に入津し、京都に上る旅客は此の地にて川船に乗替へしかば自然繁華ある港とあり江口の遊女の名を得るに至りしかり、然るに星霜を経る事茲に幾百年、桑田碧海の變遷と共に今は當年の殷賑を見るべからず、艶態嬌姿のあらん限りを盡し、江口の遊里も空しく一寒村となりて、時に悲風の破櫓を鳴らすを聞くのみ

君の堂 同く江口に在り、日蓮宗にして寶林山寂光寺又普賢院と稱し、遊女<sup>た</sup>妙の像を安置せるより江口の君堂と云ふ、妙は有名なる遊女にして諸藝に通じ又和歌の道に長けたり、西行法師の令名を聞き、戯れに。

世の中をいとふまてころ難からめ

かりの宿りを惜む君かゝ

の一首を送りてうの才藝を試みしに、妙は直ちに、墨磨り流しつ、

世をいとふ人とし聞けは假の宿に

心とむかと思ふはかり

と返歌を認めたるより、法師も道に舌を捲きて歎じたりと云ふ。

飯盛山城址

電車の大阪市街を離るゝと共に、右窓に一峰群山を歴して姿勢凡から

ず、其形状恰も一椀の飯を盛りたるが如きを仰ぐべし、これが楠氏一族の精忠勅命を奉じて賊軍を討たむとて馬を馳突せる有名なる古戦場あり、萱島停留所より約三十町、城趾はろの頂上に在り、建武元年北條高時の族にして南都の僧たりし僧正憲法はじめて城を築きて叛旗を翻へしゝが、忽ち楠正成に陥られ、後正平四年高師直の正行と四條暲に戦ふに當り、ろの一陣は此處に屯し、同二十三年三月十五日楠正儀、和田正武の八尾、千劔、赤阪の諸城に據り、義兵を擧げし時、此處にも又一方の旗幟を樹て恩地左近太郎守將とあり、細川頼之の將佐々木道譽、同高秀、同崇永、山内崇譽、土岐善忠等の大軍を受けて竟に屈せざりき、後畠山氏の臣此處に居り、永祿年中三好修理大夫長慶の執政とあるや松永彈正少弼久秀をして京師の政務を掌らしめ、長慶自ら此に住し、元龜三年に至りて遊佐信教、畠山昭高を輔けて此を守りしが尋いで奪ひ、翌四



四條暲神社

年織田氏に攻められて陥り、遂に廢墟とあれり、廣域約三十六町、地勢凹凸、石壁斷續して今尚存し、殘礎荆棘の裡に横はり、折戦又土中に埋まれり、古來三本松と呼びし老樹は既に枯死したれど、龍幹を天風に嘯いて轉た當年の歴史を忍ぶに足るものあり。

四條暲神社 飯盛山下甲可村大字南野に鎮

座せる別格官幣大社にして贈從二位楠正行以下、楠次郎正時、左近將監正宗、和田賢秀等二十四人の靈を合祀す、山麓は即ち四條暲にして正行が千載の恨みを嘸んで一族郎黨ともに戦死せる所あり、萱島停留所より東二十町、社殿の構造閑雅にして境内廣くして、多

くの櫻、楓を移植し、春は花、秋は紅葉の風景を添ゆ、南に征清紀念標あり、『忠勇報國遐邇具瞻』の文字は金色燦然として遠く見るを得、地勢高くして氣澄み風清く、一たび眸を放てば近く攝河泉の菜花黄甍を織るが如く穠々たる稻穂金色の波を觀るが如し、殊に浪華の萬戸煤煙淡く之れを蔽ひ、恰も羅布に包めるが如く、遠く、大阪灣の碧波を越へて播州の翠巒依稀として連あり、淡島の青黛夢の如く繋るも見る、この景亦筆紙の盡す所にあらず。

小楠公墓 楠正行の墓は本社を距る西五町の所に在り、碑石の高さ三丈五尺、表面贈三位楠朝臣之墓と刻す、故内務卿大久保利通公の題する所あり、



小楠公墓

傍らに大楠樹あり、蒼翠天を蔽ふ、之れ正行戦死せる所、楠樹の下に一碑あり、南無權現と鐫す、往古より正行墳墓ありと傳へられ、別に文化四年に建てし一碑を見る、先づ四條暖神社に養して低回願望去る能はざりし者、今亦此處に此の忠臣の遺跡を吊ふ、誰か多少の感あからんや。

一。雙。手。何。人。欲。挽。回。	小。楠。公。	能。奉。天。恩。父。命。來。	岡。本。黃。石。
一。家。血。肉。殲。王。事。	四。條。暖。懷。古。	天。壤。之。間。衆。行。推。	小。野。湖。山。
維。忠。維。孝。似。公。誰。	親。引。孤。軍。衝。賊。壘。	要。選。遺。訓。保。皇。基。	
感。深。廟。壁。題。名。所。	獨。喜。中。興。豪。傑。士。	早。揮。椽。筆。勸。豐。碑。	

楠公夫人碑

傍に楠氏夫人の碑あり、明治三十五年二月時の華族女學校學監下田歌

子等の建つる所あり、夫人姓は南江氏、兄を備前守正忠と稱し、湊川の役正成と共に戦死す、夫人は阿久おひさの方と云ひ正行戦死の後雜髪して尼とあり、その領内甘南郷に草庵を結び、一族の冥福を祈る、時人之れを南妃庵と號す、正平十九年七月十七日没、法名は玉山菴圃尼、庵趾今尚存在せりと観心寺所藏の記録に見ゆ、碑前に紅白の山茶花を植へたり。

○ 齋藤 竹 堂

三たひまで家をうつしふる事に

たくへやしけん子を思ふ身は

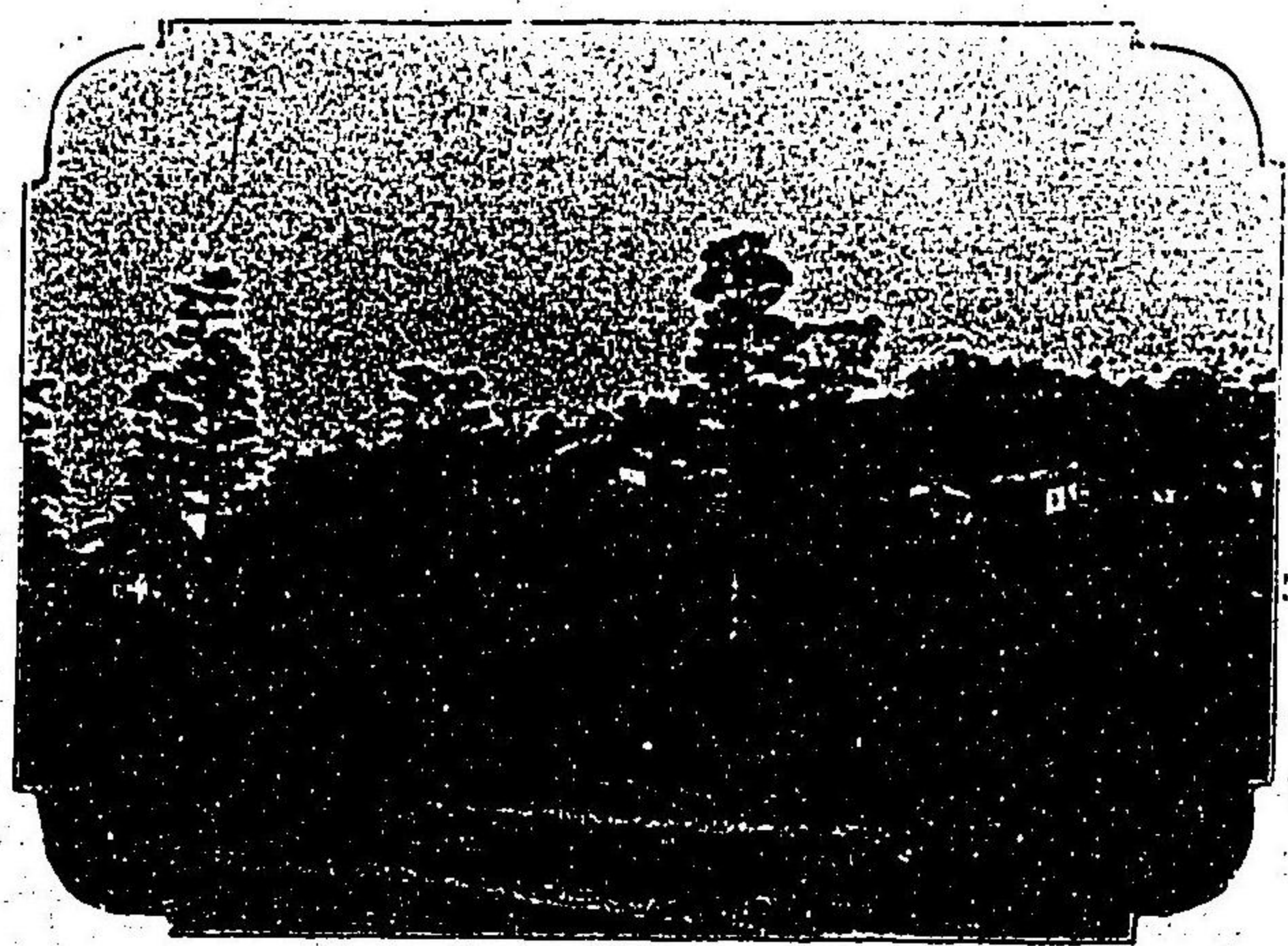
#### 和田賢秀墓

同甲可村字塚脇に在り、四條畷神社に至る道路を左方に折れて行くこと三町許、賢秀は和田正朝の弟にして正行の従弟あり、初め正興と稱す、正平中正行に従ひ細川顯氏と住吉に戦ひ、數十人を及し又山名兼義を斬り頗る馳名あり、四條畷の役、賢秀善く薙刀を振ひ敵を倒すこと算かし、正行既に死す、賢秀尚敵兵に混じて師直を狙撃せんとし、湯淺某の爲めに斬らる。

#### 四條畷古戰場

四條畷神社より南十餘町の地は即ち正平四年正月五日楠正行、弟正時等逆臣高師直と兵を交へたる古跡あり、正行吉野の皇居に参内し最後の御暇賜はり、軍を發するや 天皇中納言藤原隆資をして之を援けしむ、師直河内に入り兵六萬を分ちて生駒山の南飯盛山、及び外山、四條畷等に陣す、隆資兵三千を率ゐ陽に飯盛山に向ふと稱して敵軍を誘はんとす、正行の兵三千四條畷より進む、飯盛山の敵これを望み兵を分ちて遮り撃つ、正行先鋒をもつて之を破り、後軍亦四條畷の敵と戦ひ殺傷相半す、飯盛山、生駒山の敵兵前後より來り援ふ、時に後軍既に敗るを見て退く、正行顧みず手兵三百をもつて前進し、更に大に師直の兵を破る、兵を亡ふこと百餘、馬皆敗矢を被つて進む能はず、衆即ち馬を下つて壘に據り坐食す、食畢つて歩いて進み、接戦數刻遂に師直の陣に突撃す、敵遂に支ふる能はず師直の臣上山高元僞つて師直と稱し陣を冒して戦死す、正行大に喜び首を空中に擲ち手に承くること三度、既にしてその師直にあらざることを知り、首を地中に投じて切齒す、此の日卯うさぎより申まをに至る、戦凡る三十餘合、殺傷算かく吾兵死亡略盡く、正行爰に於て餘兵五十餘人と楯を

負ひ伴り走り以て師直を誘致せんとす、敵これを覺り支兵三百をして追はしむ、正行返り戦ひ五十餘級を斬り遂に進んで師直の軍に迫る、正行、正時箭を被ること蟬の如し、兵皆重創用ゆべからず、正行乃ち呼んで曰く、事遂に畢る、賊の獲ふる所とある莫れと、正時と交々刺して斃る、年二十三、宗族紀六郎左衛門以下從兵盡く戦死す、  
野崎觀音 四條驛神社の南方十二町、四條村大字野崎に在り、福聚山慈眼寺と稱し、曹洞宗山城國綴喜郡地藏院の末寺あり、草創の年代明ならざれども印度波羅奈國大悲の聖蹟を摸したるものと傳へ、寺前の小池今も尚波羅奈澤と呼べるより觀れば、その古刹たるは疑ふべからず、本尊は三尺八寸の觀世音にし僧行基刻みし靈像と傳へり、の名極めて著し中世永く廢絶に歸せしを一條天皇の御宇難波江口の遊女宿病平庵を祈りて和州泊瀬の觀音に詣でしに靈夢に導かれて更に當山に來り、參籠七晝夜にして病惱全く癒わしかば、その功德に感じて再興を企て、數年にして堂宇坊舎を建立し、遊君は中興開基とありて像は本尊と共に安置せり、爾來靈驗の名四方に高く、遠近より來り賽するもの漸く多く、伏見天皇の永仁二年僧入道寺職とありて法運二たび衰頽せ



野崎觀音

んとするを悲み、優婆塞秦氏と共に力を戮せて破を修め頽を補ひしが、永祿八年三好松永の兵燹に罹りて焦土とあり、元和年中僧青嵩此處に留錫して三たび興せしもの即ち現今の伽藍あり、飯盛山脈西に馳せて更に一峰を起す所、石磴高く胸に迫りて翠峰を繞らし、眞に靈境の感あらしむ、毎年春秋二季に分ちて無緣經を修し遠近の參詣者堂内に群集す、昔は大阪より此の寺に詣ずる者、野崎まゐりと稱し、一は舟にて寝屋川を溯り一は陸路を取り堤上を辿る、水陸互ひに罵詈訥弄の言を放ち、舟なるは水を掛けんとし、陸あるは石を投じ半日の戯れの間往復するを例とせり、淨

瑠理お染久松の情事を聯想せば、又一種的情景ありと云ふべし、此の地亦眺望の勝に富み、山下には東高野街道南北に通じて寢屋川の一水白蛇の如く田園の間を走り、その盡くる所大阪城の碧瓦白壁巍然として松翠の間に聳へ、市街の煤煙淡く棚引きて二十萬の薔を包み、海を隔てて播淡の山容描くが如し、殊に陽春四月の候に至れば菜花滿地を埋めて遠く數里に亘り、五形花紅氈を展べてるの間に恭布す、まことに春光一日の清遊に適すと云ふべし。

**龍尾寺** 甲可村東北の小丘茶臼山の頂に在り、隣邑野崎慈眼寺の末、名匠春日の作十一面觀世音菩薩を安置す、行基僧正の開基ありと傳へ、初めは禪宗ありしが中世廢絶し寛永年間再興し、俗に茶臼山觀音と稱し賽者亦妙からず、數十級の磴を拾ふて本堂に達すれば、前に澱江の藍帶おんたいを控へて遠く淡海の碧膏を望むを得べく、風光明媚の地あり。

**權現瀧** 茶臼山の奥に方り、數町を隔てて、水聲樹葉を動かすものは權現瀧あり、水源を生駒の山間より發し、淙々たる溪流相合して權現川とあり、落下して瀑布を懸

く、高さ五十尺、幅二十四尺、飛沫は四時の雪を吐き、散じて霧とあり、冷氣四邊を凝めて頗る偉觀あり、古は川の畔ほとりに權現堂ありしより此の名あり、夏季探涼の一勝區たるを失はず。

**國中神社** 甲可村大字中野の産土神にして東方の大字清瀧に鎮座せり、菅原道眞を祭る、社域三千二百九十餘坪を有し、境内に三神社、兩宮社、八坂、猿田彦、吉備、天神、稻荷等七座の末社あり。

**忍の岡** 甲可村大字岡山の中央に聳ゆる一孤丘を云ふ、丘上に登れば四隣豁然として開け更に眼界を遮るものなし、元和の役徳川秀忠の陣營を構へたる所にして、今は一幹の喬松あり、翠蓋地を覆ふて天風に嘯く、里人これを長久の松又は忍の松と稱す、丘上に津鉾神社あり、應神天皇、速王之男命、藤原鎌足を合祀す。

○

法 印 覺 寛

待つ人にあと語らば時鳥

一人しのひて岡に啼くらん

清瀧 四條村大字清瀧にあり、大字逢阪の龍王池の水溢れて西に流れ、清瀧山の  
國子石と稱する所より來れる溪流を合せ山の西麓宇瀧ヶ谷に懸りて百鍊の布を晒らす  
ものを云ふ、直下四十餘尺、巾十八尺、下流は清瀧川とあり、寢屋川村の河北に至り  
て寢屋川に注ぐ、瀑布の斷崖楓樹あり、秋霜一たび降れば忽ち一團の紅雲を留めて雅  
客の杖を曳く者多く、溪流又奇岩怪石に富み、水勢の疾きこと矢の如し、

佐太神社 寢屋川停留所より約十六町、庭窪村大字佐太の北方、京街道に沿ふて一大  
華表の堤上に立てるを見るべし、此の地は昔菅原道眞の領地かりしかば、菅公左遷の時  
都の風説此の地方にまで喧しかりしを以つて沙汰と名づけ、且つ諸民の徳を慕ひて  
別れを惜しみ、菅公自ら像を彫刻して殘しを齋き祭りて社殿を造營し佐太神社と呼  
べり、華表を潜れば一路坦として二百間、直に中門に達す翠松左右に幹を正して不斷の  
樂を奏す、これ馬場先あり、中門の左坡上に愛宕、稻荷の二社を祀る、本社正殿の結  
構壯大あらざれども高雅、丹碧相映じて燦然たり、創立の年代詳かあらざれども慶安  
の頃大に荒廢せしを、時の領主永井尙政、賢明にして深く菅公の徳を慕ひ、寛永年中



梅助社神太佐

新に社殿を營み、爾來清淨の神域とあり、數  
幹の老松扶疎として颯々の韻を聽く、社殿一  
株の老梅あり、後水尾天皇より尙政に賜ひし  
一枝を更に本社に寄附して境内の古木に接合  
せしものにて、やがて花を開き實を結ぶに至  
り、名けて勅梅と云ひ、老幹苔を緘ふて蟠曲  
し、年々春に先つて梢頭白玉の花を點す、う  
の韻致眞に愛すべし、後水尾天皇の御製あり。  
家の風世々につたへて神垣や

たへたるをつく梅も匂はん

社殿の後に神苑あり、山を築きて梅林をあし、  
池を穿ちて蓮を植む、橋を架して鯉魚を放ち、  
石を配して楓樹あり、うの風趣亦云ふべから

す。

**菅相寺** 佐太神社の後に在り、曹洞宗宇治興正寺の末社にして、承應元年時の淀城主永井信濃守尙政の創建にかゝり、僧万安を祖とし、佐太神社の奥の院と號せり、本尊觀世音は菅公左遷の時誓願ありて刻みしものと傳へ、寺號又これに基くといふ、以前境内に連歌所ありしが今は絶へたり、堂前に永井尙庸の碑あり。

**來迎寺** 佐太神社と地を接して淨土宗佐太派の本山あり、後村上天皇の御宇開山實尊法明上人に入室して行化を受け、爰に後醍醐天皇より上人に賜ひし天筆如來を請ひて本尊とし、興國七年守口町に一字を建立せしものあり、一宗の本山として大



來迎寺と佐太天神全景

に融通念佛宗を弘め、後村上天皇亦深く歸依あらせられて故光殿の稱號を賜ひ勅願所とせられしが、應永以降或は兵亂、或は水火の災を被りて寺域を移轉せしこと前後三十六回、延寶六年二月第三十世慈光に至り此の地を下して今に及び、開基より法燈相承くること五百五十餘年、地領一千五百餘坪を有し、牆壁四方を繞り表裏二門を構へて本堂、方丈、客室等甍を列ね、實に一宗の本山たるの壯觀を備へたり、堂前一樹の老松あり、條枝四方に、蜿蜒してろの長きもの約十間に及び、翠雨常に滴瀝して雅致翔すべし。

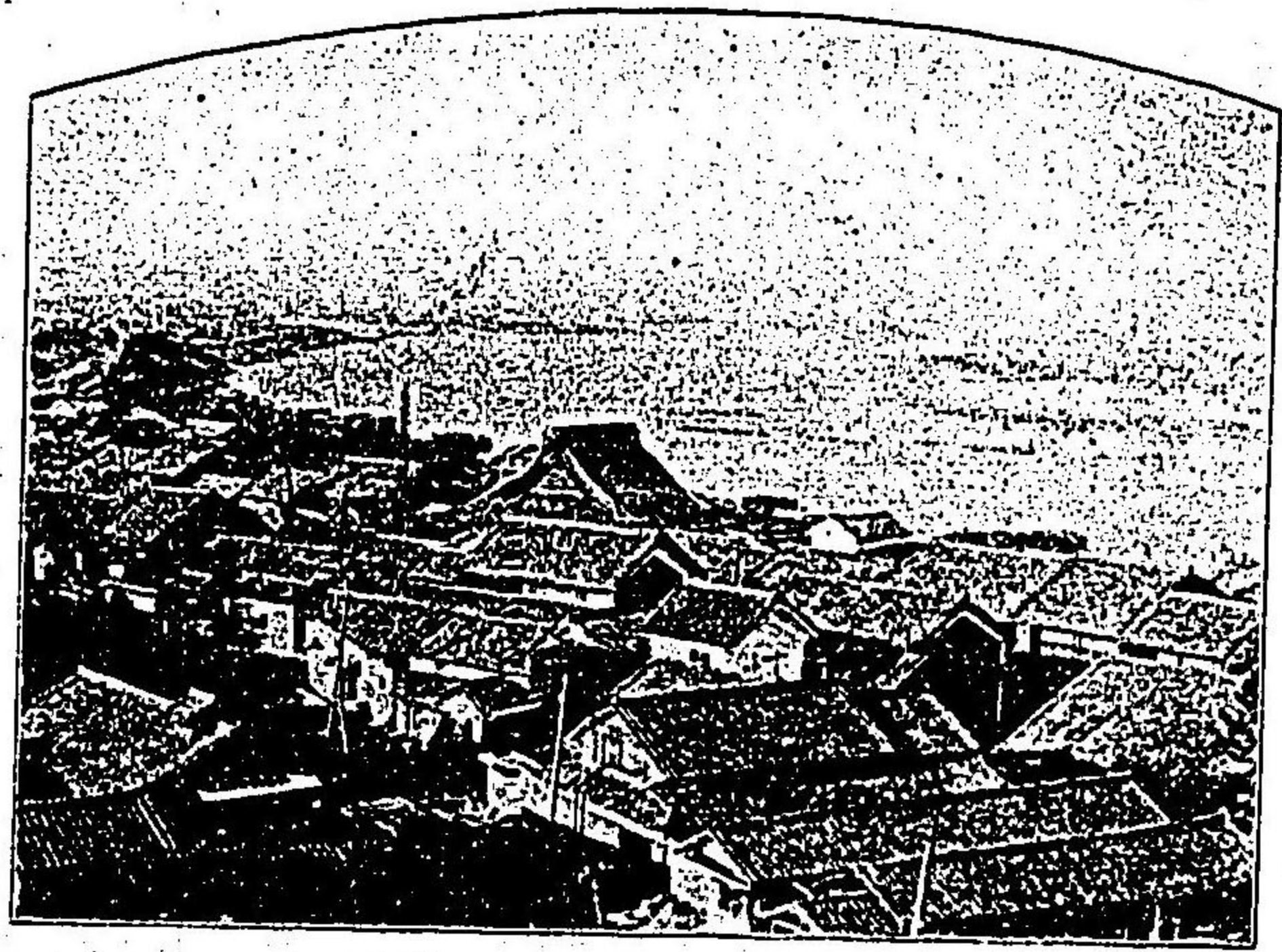
**永井伊賀守陣屋趾** 來迎寺の北、牆壁を隔て、永井伊賀守の陣屋を構へし舊趾あり、貞享二年永井尙當の築きて地方施治の本營たらしめし所あり、明治二年肥前守尙明の土地を奉還してより今は民有宅地とあれり、面積千二百餘坪を有するに過ぎず。

### 枚方及楠葉附近

**枚方町** 枚方町は北河内郡の東北に位し、東は枚野村大字禁野、磯島と天の川の中



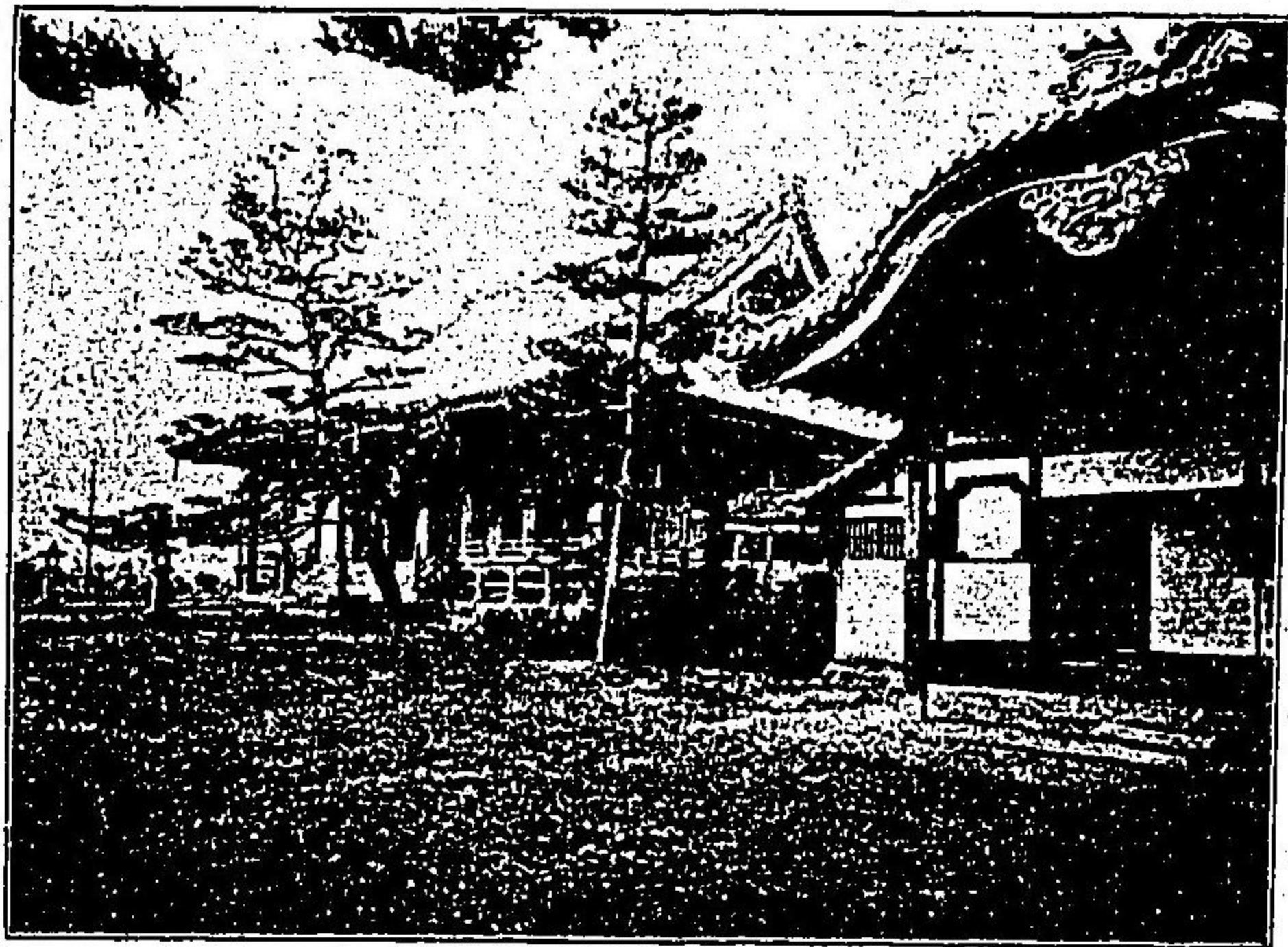
流をもつて界し、南は川越村大字山の上、蹠陀村大字走谷に接し、西は蹠陀村大字中振及び出口に連あり、北は淀河の長流帶の如く繞りて攝津國三島郡大冠村、三箇牧村と相對し、川越村より來れる丘陵南部に起伏し、市街を俯瞰して眺望頗る佳絶あり、町は三矢、泥町、伊加賀、枚方、岡、岡新町の六字に區別し人口約四千、那役所、町役場、警察署、區裁判所、郵便局、銀行會社出張所等あり、近くは又高等女學校設立の議あり、郡中第一の都邑たるに背かず、上古神武天皇の皇兄五瀬命の共に長髓彦を征せんとして難波より舟にて泊し給ひし白肩の津とは此處ありとの説あれど信じ難し、中世に至り上の



枚 方 町

莊と稱して既に澱江の要津たりしは疑ふべくもあらず、後京都に通ずる街道とあるに及び、三矢、岡、岡新町、泥町の四村を總稱して枚方驛と云ひ、大阪、伏見の間を往來する大小船舶の寄泊すると共に股賑を極め、且つ本州及び紀泉諸侯の東勤には皆道を枚方に取りしより、諸侯宿舍の本陣を置き、娼家軒を並べてくらわんか船の野音聲と共に向の名漸く知られ今尙當年の名残を止めつゝあり。

**光善寺** 枚方町の南方、香里停留所より約八町蹠陀村大字出口に在り、淵埋山と號し大谷派本願寺に屬す、文明七年本願寺第八世蓮如上人の創立にかゝる、初め上人越前を出で若丹の地を教化し、更に攝津、河内に巡錫せむとて此の地に來りしに、淀河の堤苜原の里に寒烟僅かに九戸あり、里人箕屋空念上人に請ふて精舎を草創せんとし、上人の志を納れて梓原の深淵を埋め方四町の地を得て一字を建立し留錫三年の後順如上人に譲りて開基とし淵埋山光善寺と號す、又梓原堂ともいふ、後天文三年回祿にかゝり尋いで今の堂宇を再建せり、永祿三年院家に勅補せられ本願寺の東西に分派するに及んで或は東に歸し、或は西に屬したるも元祿以後は全く東派に歸し、以來連綿



光善寺

三三  
として蓮如上人遺跡の道場たるを失はず、現今稍衰運に向ひしも尙二千餘坪の境域を有し本堂、方丈、客室、鐘樓、鼓樓等甍を列ねて宛然巨刹の觀あり、方丈の奥に林泉あり、石川丈山の設計に成り、池を穿ちて島を築く、水あり藪蔭を流れて簇々たる苔の根を浸し、蓮の花を漂はす、松あり亭々として翠緑の影を宿し、雅致云ふべからず、孤松の下苔蒸したる一塔を見る、蛇の塔といふ、蓮如上人說法看經の日、梓原深淵の龍神一美人に現じて聽聞し、その功德に感じて池を上人に獻げて昇天せり、塔はその遺したる龍鱗を埋めたりとの傳説あり。

蓮如上人の遺跡

光善寺より約二町南に在り

上人越前吉崎より移錫し、箕屋空念を度せんとして此の石に腰を掛けたりとて、世人これを上人腰掛石と稱し、今は柵を結ひて一碑を建つ。

蹉陀山

蹉陀山は香里遊園地と接続し此邊一

帶松茸の發生に適す、丘上に高さ三間周圍十餘間の兀たる一堆の地あり、菅相塚と云ふ、菅公筑紫に謫遷せらるゝに當り、途次此處に憩ひて京都を顧み西浪華の海を望みし跡ありと傳ふ、山腹に蹉陀の池あり、峽を蹉陀谷と稱し、初夏の候、青葉がくれに啼く杜鵑の聲を聞くによろしく、水は涔々の響を傳へて蹉陀川とかり寢屋川に注ぐ、舊蹉陀天満宮の存りし邊今は柑橋の



蹉陀天神鳥居前

栽培地とあり。

駒あへていさ見にゆかん蹉陀川に  
枝さしかわす大和あてしこ

俊

頼

我せこか老るかおしき蹉陀の池の

伊

勢

玉藻にもかおあけはやさん

**蹉陀天満宮** 香里停留所より三町、蹉陀村大字中振蹉陀林の半腹に在り、菅原道真を祀る、元蹉陀山の麓に在りて近郷二十五箇村の産土神として崇敬せられしが、一歳神前座席の争ひありしより別に地を相して今の所に遷祀し、大字出口の鎮守として郷社たり、神体は菅公自作の等身像あり、菅公藤原氏の讒訴に依り筑紫に左遷せらるる時、息女苅屋姫後を慕ふて此處まで來りしが公の既に發足せし後ありしかば、空しく西方の天を望み蹉陀して歎き悲しみたり、然るに公姫の心を慰めん料にとて手ら像を



蹉 陀 天 神

刻して此の地に止めしを、薨去の後これを祀り且つ此の地を蹉陀と名けたり、後慶長の役社殿は兵燹に罹りしも神像は僅かに恙なきを得、爾來世人の崇敬頗る厚く現今の社域は僅かに數百歩に過ぎざれど先に上地せし周圍の官林拂下を請ひ、廣淵ある神苑を築かんとこの設計あり、又社に隣して龍光寺の舊跡あり、寺は聖德太子の草創にして正和年間僧龍圓再興し、昔は七堂伽藍を具へ輪奐の美を極めしも今は廢滅せり。

**香里遊園地** 香里遊園地は蹉陀山に隣接せる一丘陵にして、香里停留所より上ること約一町、里人此の地を御所山と稱し、畠山氏の

舊跡あり、此地小丘起伏して眺望の景に富み、松林池を包みて藍靛の水を湛わ、一禽竹叢に啼いて境甚だ幽なる者あり、桃樹あり春は濃艶の花を粧ふて野趣を添へ、茶畑あり冬は清楚の花を薫らせて雅致を呈し、且つ地域頗る廣潤あるを以つて、本社は夙に此の地領を買収し、更に數千の若楓、稚櫻を移植し公衆一般の遊園地たらしむべく現に種々設計を施しつゝあり、若し夫れ春は花を搜りて溪間に囀つる鶯の聲を聴き、歳を求めて丘上行厨を開くもよろしく、夏は青葉若葉の蔭に清風を追ひ、蹉跎の溪を隔て、啼きよむほごきすに風懷を行るに適し、秋は林間に酒を温めて香菌を割くの風流あり、冬



菅相塚



香里遊園八幡神社

は満山白金の粧ひを凝らせて、いざさらば雪見に轉ぶ所までの雅人騷客を迎ふべし、その他四時の眺望絶佳を極め、前に水晶を展べたる如き激江の流れを隔て、丹城の連峰に相對し、近く大阪の人煙碧甍を初め枚方、八幡、吹田、高槻等を望み、遠くは宇治、伏見、京都の諸山をも指呼すべし、殊に一步を轉じて蹉跎山菅相塚の頂に登れば眼界更に開けて八州の山を見るべしとて、古來八州山の稱あり、又遊園地内の端に入幡神社あり、社殿年古りて古雅愛すべく、境神寂びていとかしこし、附近に湯ヶ谷の清水とて浄水を湧出する所あり。

衫子絶間の趾

四〇

友呂岐村大字平池の東南に在り、仁徳天皇十一年茨田の堤防屢々決潰するより天皇深く憂ひ給ふ、一夜夢に河伯の告ぐるあり、「曰く、我を祭るに武藏の人強頭、河内の人茨田の連珍子の二人を埋めて贄させば堤防決潰の憂ひかゝるべし」と。天皇即ち二人を召して旨を諭し給ふ、強頭先づ水に没して死す、衫子容易に水に投せず、二個の瓢を取りて水中に投じ、河伯に誓ふて云ふ、神若し眞に我を得むとあらば瓢を沈めよ、瓢沈まば我直ちに身を投せん、我豈徒らに死せんやと、時に一陣の風忽ち起りて河水を吹く、瓢は將に沈まんとして沈まず、颯々として遠く流れ去ぬ、役夫等大に喜び力を戮せて築き二個の堤防漸く成り衫子又恙かきを得たり、時人此處を呼んで強頭衫子絶間と云ふとは河内志の記す所あり、今の枚方より守口に至る淀河沿岸の長堤は古の茨田堤にして友呂岐村大字木屋より九箇莊村大字點野に至る間長さ九町餘は衫子絶間の跡あり。

鷹塚山

枚方町大字伊加賀に在り、川越村山の上より蜿蜒し來たれる山脈更に隆起

して此の孤峰を爲せるもの、高さ九十尺、周圍二百四十間あり、往昔惟喬親王落院に在りて放ち給ひし蒼鷹の萬年寺の喬松に止まり、巢を營みしが後死するに及びて此處に埋めたりと云ふ、宇菟蒲谷よりの登路あり、河攝の山川双眸の裡に入りて眺矚佳あり。

枚方遊園地

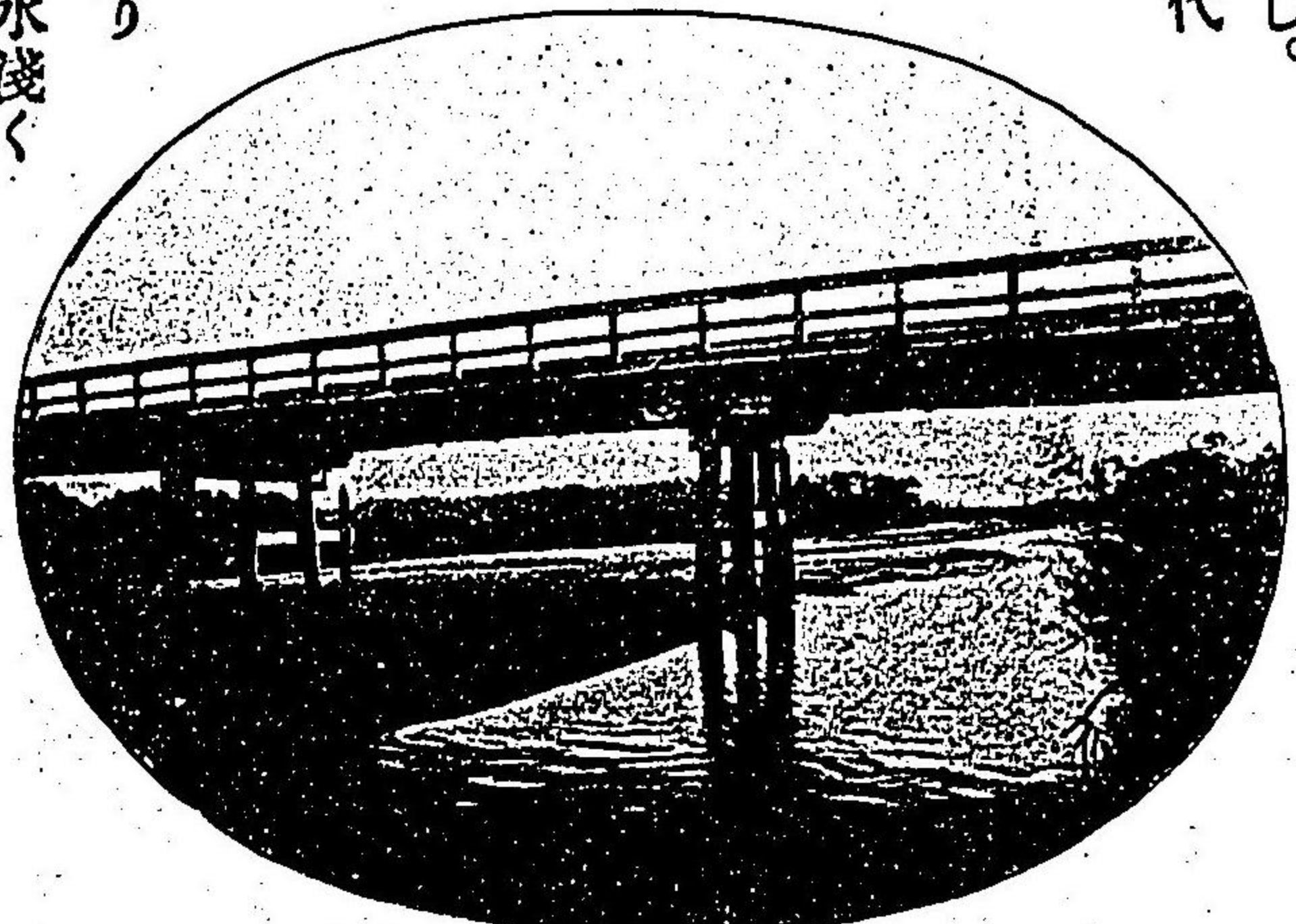
香里遊園地と共に新に設計せる遊樂園地たり、御殿山、鷹塚山を併せて地域甚だ廣く、蹺躑岩を包み、一水青筥に滑かあるあり、疎林葉落ちて一徑を埋むるの閑寂あり、松影榭枿として一痕の月を宿すの雅趣あり、ろの景情香里遊園地と異からざれど、規模の廣大にして、眼界豁然として前に開くるの點に於て前者に秀れたり、此の地又數千株の櫻、楓を培養し、近き將來に於て一大遊園地たるの設備を完からしめんとす。

櫻新地

船を船めるに碇はいらぬ、三味や太鼓で船とめると歌はれ、舊幕府時代は三十石船の出入と共に枚方遊女の名を博したる泥町遊廓は、明治四十二年三月枚方町

の南端堤防に沿へる新開地に移轉し新に櫻新地と稱して一廓を爲せり、紅樓の燈火影を落す所、絃歌嬌舌時に呬唔の聲に和す、多情の遊子又一夜の春興を購ふに足らんか。くらわんか船 枚方の名物としてくらわんか船の名は維新前までは津々浦々にまで知られし物あり、昔徳川家康大阪陣に敗れて此地に遁れ、舟にて淀川を越わたる時、家康船夫に向ひて斯る折柄あれば汝に取らすべき當座の恩賞あらざるを如何せむ、我他日天下を取るの曉何ありとも汝の望むに任せんと、船夫答ふらく、斯ばかりの勞に恩賞は御無用あり、唯公の天下とあらば我等の朋黨に粗野ある放言を許し給へと、斯て枚方のくらわんか船は天下御免の放言とはありたり、維新の後三十石船と共に久しくの跡を絶ちしが近年枚方町の有志等これが再興を計り、年々夏期の候を限り客の望みに應じて三十石船に擬したる屋形船を醸し、宿場女郎に扮したる藝妓を乗込ませて酒間を幹旋して大阪京橋まで漕行かしむ、別に需めあればくらわんか船を仕立て、牛蒡汁、汁粉、せんべい、餅等を鬻ぐ、風涼しく月明かある夜、薄暮枚方を出で、激

江を下る、納涼としては又別箇の風流と云ふべし。  
鍵屋 鍵屋は舊幕時代諸國大小名の參勤交代往還の本陣ありしよりこの名高し、「こゝを何處ぢやと船頭衆に問へばこゝは枚方鍵屋裏、鍵屋の裏には錨がいらぬ三味や太鼓で船とめる」とは當時淀河上下の船夫が櫓拍子に合せて歌ひたる俗語あり、水亭の燈影風に搖ぎて、淺酌低聲水に響く當時の情致を味ふべきあり。  
天の川 天の川は枚方町と牧野村禁野との間を流る、源は田原村大字山原の峰字池奥より發し磐船の峽を過ぎて交野、川越の兩村を貫流し牧野村禁野に入り、折れて枚方町岡新町に至りて水勢漸く急を加へて淀川に注ぐ、されど今は水淺く



川の天

して舟筏を通せず、清澄にして歴々砂礫を敷ふべし、江頭の風光頗る優美にして特に  
観月、納涼によろしく、天人の降りて水を浴びたりとて天の川の稱あり。

光 俊

これやこの空にはあらぬ天の川

かたのへ行けはわたる船橋

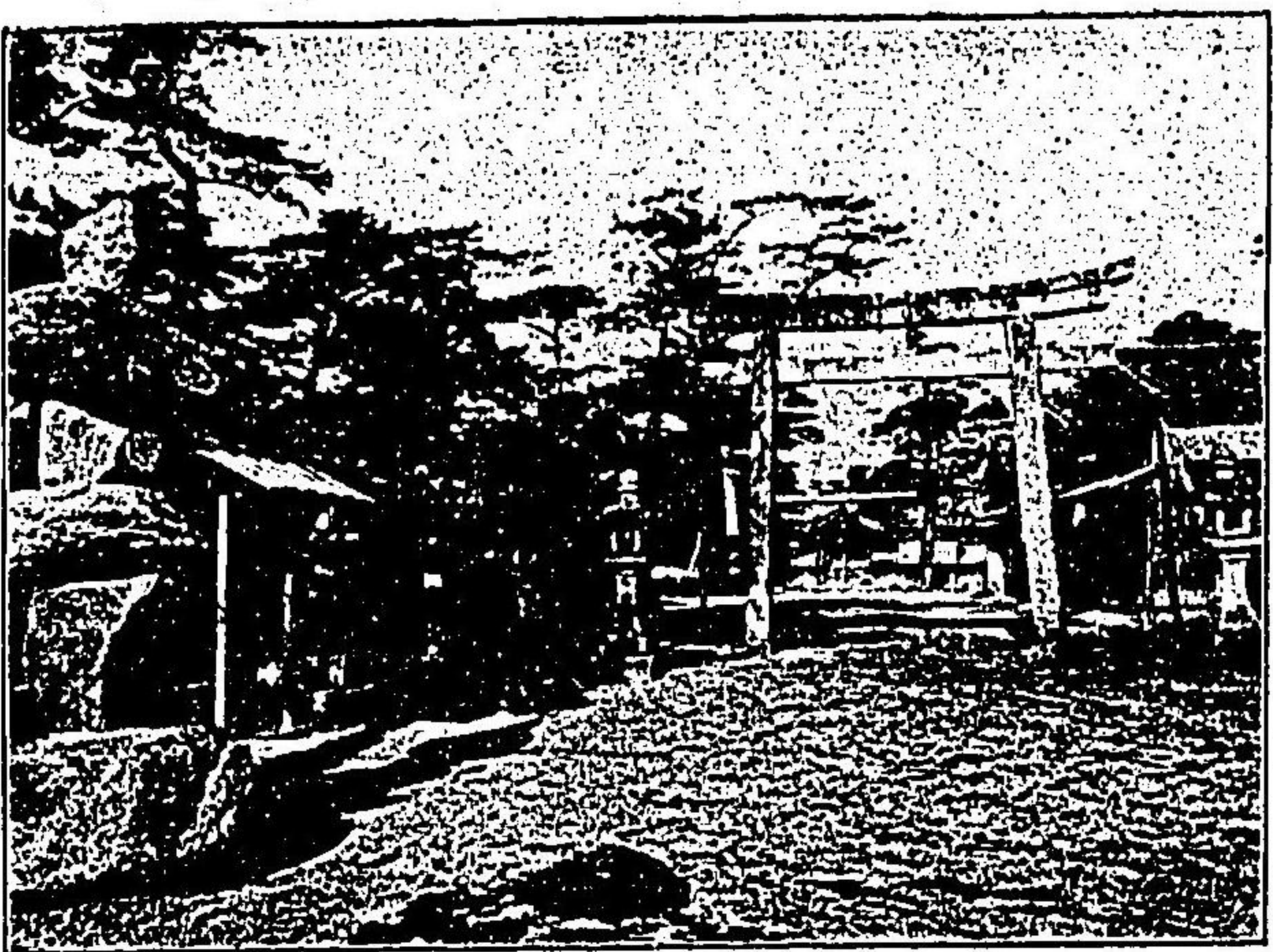
西 行

あくかれし天の川原と聞くからに

むかしの波の袖にかゝれる

一橋を架す、鵜橋といふ、天の星合の事ども想ひ出で心床し。

百済王神社 天の川を渡りて約四町、山田村大字中宮の丘陵に在り、百済國歸化の  
阿佐太子及びその子孫を合祀せる神社あり、阿佐太子は推古天皇の御宇來朝し、佛像  
并に經典三千六百卷を厩戸皇子に献す、皇子之れを嘉納し邸を交野郡に賜ひぬ、後聖  
武天皇博士王仁及び阿佐王の文教及び佛道に貢獻淺からざるを追想あらせられ、その



百 濟 王 神 社

子孫を殊遇し、殊に天平九年三月阿佐王の裔  
南典を従三位に叙し、その病没するに及び之  
れを憐れみて百済王祠廟并に百済佛刹を建て  
給ふ、是れ即ち本社あり、毎年十月十五日例  
祭あり、地域高燥にして長松亭々として聳ね、  
社殿南面して九座の末社を列ね、今も尙當時  
邸宅の礎石荆棘の裡松杉枝を交ゆるの所に存  
し、その遺裔又此の附近に傳ふと。

潜院趾 潜院の舊趾は牧野村大字落の岡下  
牧野停留所より五町の丘陵に在り、潜院は惟  
喬親王の宮居かりしが、親王太子宣下の御望  
絶わ小野に幽棲せらるゝに及び、改めて精舎  
とかし観音寺と稱し、親王遺愛の五本櫻、駒

して舟筏を通せず、清澄にして歴々砂礫を敷ふべし、江頭こうとうの風光頗る優美にして特に  
観月、納涼によろしく、天人の降りて水を浴びたりとて天の川の稱あり。

○ これやこの空にはあらぬ天の川

光

俊

○ かたのへ行けはわたる船橋

西

行

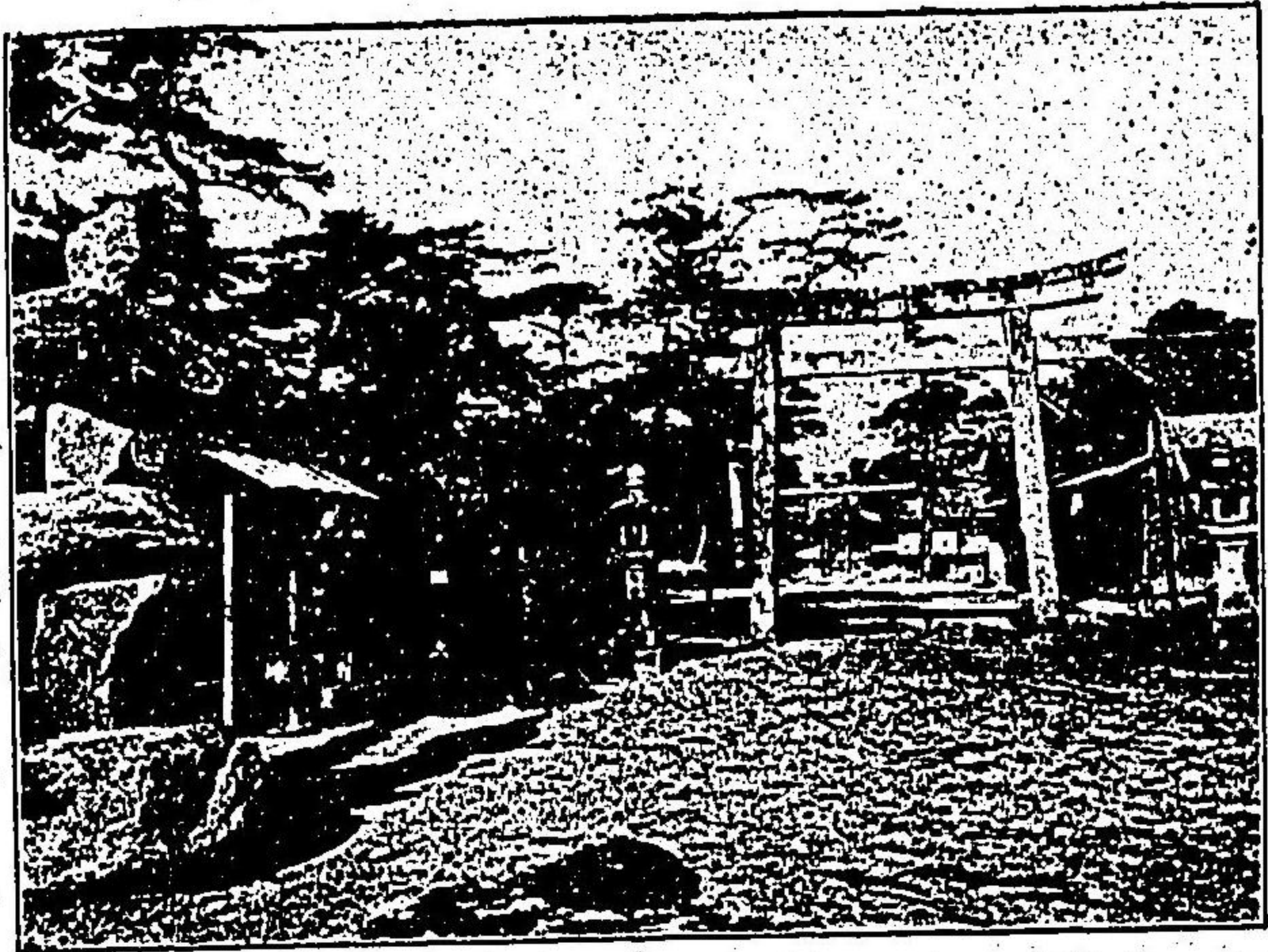
あくかれし天の川原と聞くからに

○ むかしの波の袖にかゝれる

一橋を架す、鶴橋つるばしといふ、天の星合あまほしあひの事ことも想ひ出で心床し。

### 百済王神社

天の川を渡りて約四町、山田村大字中宮の丘陵に在り、百済國歸化の  
阿佐太子及びその子孫を合祀せる神社あり、阿佐太子は推古天皇の御宇來朝し、佛像  
并に經典三千六百卷を厩戸皇子に献す、皇子之れを嘉納し邸を交野郡に賜ひぬ、後聖  
武天皇博士王仁及び阿佐王の文教及び佛道に貢献淺からざるを追想あらせられ、その



百 濟 王 神 社

子孫を殊遇し、殊に天平九年三月阿佐王の裔  
南典を従三位に叙し、その病没するに及び之  
れを憐れみて百済王祠廟并に百済佛刹を建て  
給ふ、是れ即ち本社あり、毎年十月十五日例  
祭あり、地域高燥にして長松亭々として聳む、  
社殿南面して九座の末社を列ね、今も尙當時  
邸宅の礎石荆棘の裡松杉枝を交ゆるの所に存  
し、その遠裔又此の附近に傳ふと。

清院趾 清院の舊趾は牧野村大字落の岡下  
牧野停留所より五町の丘陵に在り、清院は惟  
喬親王の官居ありしが、親王太子宣下の御望  
絶わ小野に幽棲せらるゝに及び、改めて精舎  
とかし観音寺と稱し、親王遺愛の五本櫻、駒



止松等は久しく御堂前に在りしが後枯死して名のみ残り、寺もまた廢絶せり、親王薨去の後、緝紳公卿の懐古の情を歌ひしもの多く、紀貫之も土佐の任を終へて京に歸らんとて此の地を過ぎ、土佐日記に懐舊の情を寄せて弔ひまゐらせたなり

○ 千代へたる松にはあれと古の、

紀貫之

○ 聲の寒さはかわらさりけり

法印定圓

○ 交野ある渚のさくらいく春か

絶わてといひし跡に咲くらん

渚岡

渚院の東方に隆起して高さ五丈、禁野、小倉に跨り、頂上は古惟喬親王の亭榭を設け給ひし所と傳へて平坦砥の如し、一に御殿山と稱し、松林の間に御殿山神社あり、岡の盡頭より渚の部落を瞰下し、近く澱江を隔て攝津の翠黛に對し、遠くは京都の東寺の塔を望むべく、近年數百株の櫻樹を移植して更に風致を添へたり。

○

源信明

うちつけに渚の岡の松風を

空にも波の立つかごとく聞く

和田寺

牧野村禁野きんやに在り、元醫王山佛陀寺と號し弘法大師の開創あり、本尊は聖德太子の作と稱する藥師如來にして、初め四天王寺にあり、文武天皇の皇后御懐胎の時祈りて御安産あらせられし靈佛ありしを、大師の此處に移しよものありといふ、後、惟喬親王此の處に遊獵し給ひし時、雪を此の寺に避け本尊の靈驗著しき山を聽きて堂宇を修營し給ひしが、中世衰頽して廢寺となり、楠氏の一族和田源秀舊蹟を尋ねて殿堂を再建し更に今の寺名に改めしに、維新の後再び廢寺となり、明治十三年現寺を再興せるものあれど、明治四十二年八月二十日禁野火藥庫爆發の爲め大破損を被りたり、俗に妊婦來りて祈願すれば、必らず安産すべしとて遠近より來り賽する者多し。

山崎院舊趾

枚方町大字三矢はりの舊趾ありと傳ふ、院は僧正行基の創建にして、當時の堂宇莊嚴を極めしも今は遺蹟と認むべきものなし、又天武天皇の元年秋七月將

軍吹負既に大和の地を定めて三道より山崎に至り、此處に兵を屯せしめたりと云ふ。  
交野行宮趾 延暦の昔、桓武天皇屢々交野に出獵し給ひし事正史に見ゆ、山田村の中宮は今の行在所の在りし處といふ、然れども今の舊趾と稱するもの二あり、一は村の西南百濟王神社の東に隣せる官林中の礎石累々として存せる所ありとし、他は里の中央、東南北の三方溝を繞らして東の口、南の口、北の口等の字を残す所ありと云ふ。この孰れが果して真あるや詳ならず。

交野原 桓武天皇初めて狩し給ひしより、庶民の私に鳥獸を獵するを禁じ、尋いで惟喬親王も屢狩獵を試み給ひし所にして、今の牧野村の各大字及び山田村の片鉾、甲斐田を總稱して交野の原、一に禁野と云ひ、又御狩野と稱して古歌多く、一千餘年の今に至るまでの名人口に膾炙し、今尚秋冬の候多くの鴻雁群り來り、獵區甚だ廣く、今の捕獲また尠からず。

御狩すと櫓の眞柴を踏みしたき

源 師 頼

交野の里に今日も暮らしつ

○

藤 原 親 隆

鶉啼く交野に立てる櫓もみち

散らぬはかりに秋風り吹く

○

藤 原 俊 成

御狩する交野の小野に日は暮れぬ

草の枕を誰にからまし

楠葉宮趾

楠葉村の東北交野天神社の後に在り、繼體天皇の大伴金村、丹波より迎へられて居給ひし宮趾にして疆域六千餘坪、老松叢として翠傘を張り、白砂濃かに碧水之れを環り地甚だ清淨にして境又閑あり、裡に一小丘あり、天皇即位の式を行はせ給ひし處と傳へ、今は楠葉祠廟を建て古雅掬すべし。

片野神社

牧野停留所より約三町牧野村大字阪に在り、本社は垂仁天皇の御宇野見宿禰の勸請にして欽明天皇の勅願に依り、初めて片野神社と稱す、祭神は建速須佐之



片野神社

山田池 山田村大字田口に在り、池はさして廣からねど自然の地形を占め、疎林畔

を繞らせて碧水を湛せ、恰も百鍊の鏡を展べたるが如し、昔は此邊より中宮一帯の地を鳥立の原と稱して狩獵地域たり、現今山田村にて此の池を利用し、年々多數の鴨、鶺鴒等の飼養に努め、その産額又た尠からず。

### 八幡及淀附近

八幡町 八幡停留所の所在地、昔は八幡庄又は八幡郷と稱へ、料手、常盤、山路、金振の四郷を合せて八幡四郷と呼び今に小字として残り、今の八幡町は橋本、園、城の内、菖蒲花、山本、高場、志水の七字より成り、東北は木津川を隔てて淀町に對し、西北は淀川を隔てて大山崎に對す、人口六千餘、戸數一千二百、旅館及び料亭として八幡宮一の鳥居前しほや最も名あり。

雄徳山 雄徳山は一名男山といふ、元河内國交野郡に屬し、貴顯の埋葬地たりしが後山城綴喜郡に屬したり、八幡宮鎮座以來八幡山とも稱へ又山容香爐に似たるをもつて香爐山の名あり、地勢淀川を狹みて山崎に面し、一は西國街道とて諸侯上洛の要路

たり、一は伏見を経て京都、大津に達する樞要の地たるを以つて古來屢々兵馬馳驅の  
巻とあり、殊に足利氏より豊臣氏時代までは、此邊は實に關西に於ける戦亂の中心  
點たるの觀を呈したりき、正平六年後村上天皇吉野の皇居を出で、雄徳山に幸し給ふ、  
源顯信七千餘騎を率ゐて従ひ奉る、楠正儀、和田正興等又是に在り、北軍三萬餘騎來  
つて雄徳山を攻む、その將上折重能、仁木義長等橋本の民家を焼き放生川より直ちに  
皇軍に迫り、細川顯氏、武田信武等は搦手より、細川頼春は放生川の民家に火を放ち、  
三方より攻め立たるも、南軍力戦して屈せず、北軍の兵日に加はりて雄徳山を圍む者  
遂に十萬騎と註せらる、高師直總大將たり、窺かに間者を送りて火を馬場殿ばばだんに放つ南  
軍殿司たんのしをして御神體を護國寺に移して死守す、戦開けてより五十餘日、雄徳山の糧食  
漸く竭きて又如何ともすべからず、爰に於て天皇窺かに吉野へ落ちさせ給ひ、籠居の  
兵又夜に紛れて扈從し奉る、北軍斯とは知らず、勢に乗じて押寄せたる時、雄徳山頭  
既に人影おし、北軍の意外に驚き、火を諸坊に放つて去る。

法印 頼 舜

男山峰より照らす月影は

くもらぬ人の心にと澄む

後 鳥 羽 院

八幡山あごはれろめしめのうち

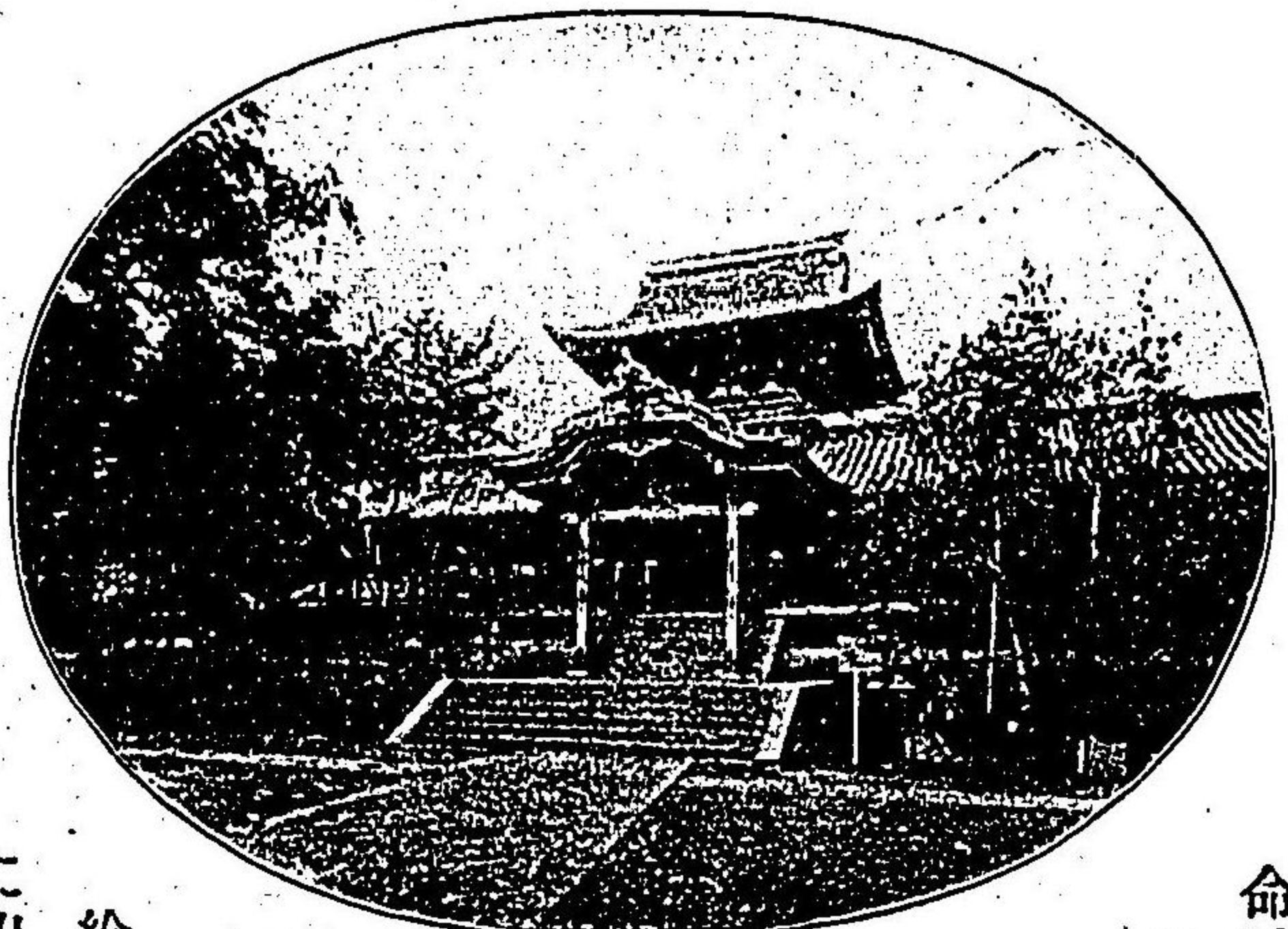
猶よろつ代と松風う吹く

後 京 極

八幡山西に嵐の秋吹けは

川波しろき淀のあけほの

男山八幡宮 大江匡房が『昔は萬乗の君、今は百王の祖あり、一天の下、其の德輝  
を戴き、四海の中、其の恩澤に霑ふ』と敬稱せる男山八幡宮は八幡停留所に接せる雄  
徳山に鎮座します、社頭までは阪路五町、境内老松古杉天を摩し、石階苔蒸して森  
殿の氣全山に満ち、さかから神代の境に在るの感あり、男山八幡宮は人皇十六代應神  
天皇にしてたらしなつひのあきこ帶中日子命十四代仲哀天皇第四子の王子に在します、御母は息長帶比賣



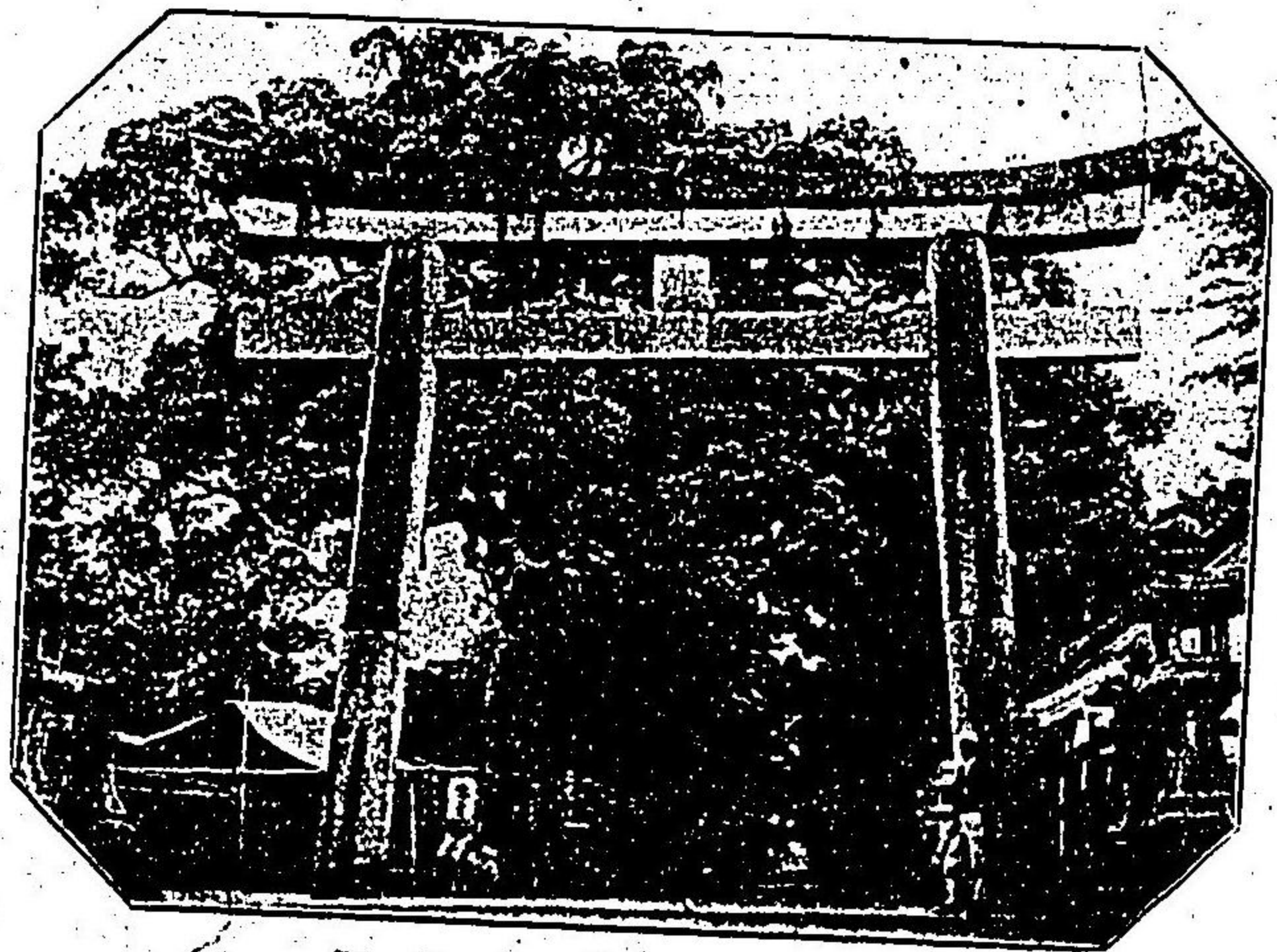
男山八幡廣前

命神功皇后に在しますことは皆人の知る所あり、應神天皇は神功皇后新羅を討給へる年の十二月、筑紫の畷田に御降誕し給へり、大神は元豐前國宇佐郡小倉山に鎮座ましましけるを、貞觀元年四月十五日より和州大安寺の沙門行教宇佐の宮に一夏九旬の間參籠し晝は大乗教を讀み夜は眞言を誦して法樂せしに、七月十五日御託宣ありて、我れ王城の近きに遷座して鳳闕を守護し、國家を安泰おらしめむと神勅あり、其の夜行教の三衣に阿彌陀の三尊出現し給へり、沙門都に上りて此の由奏聞しければ、朝廷大に悦ばせ給ひ、行教神興に従ひ八月二十五日山崎(今の離宮)に出まし給へり、その夜また神勅ありて雄徳山に鎮座

すべき山宣せ給へり、同年九月十五日勅使を下し空權允橋良基に詔し、宇佐の神宮に准へて始めて六宇寶殿、三字正殿、三字拜殿を建て八幡大菩薩と崇め給へり、中殿は應神天皇、西殿は比咩大神、東殿は神功皇后を祀きまつる、男山八幡宮は元石清水八幡宮と稱せしも、明治二年八月男山八幡宮と改稱せられたるあり、官幣大社にして古來次廟と稱して伊勢大廟に亞ぎ朝廷の御尊敬淺からず、天元二年三月圓融天皇始めて行幸御一泊ありし以來十八回の行幸あり、中には後醍醐天皇は七日間の御參籠あり、後龜山天皇も又一週間の御參籠あり、白川天皇は文治三年八月十四日行幸ありて放生會の神幸を行はせられたり、御祭禮は例年九月十五日に執行、日本三勅祭の一として莊嚴ある御式あり、鳳輦頓宮殿へ御神幸あり、我邦にては官祭にして渡御の古式を存するは本宮の外他に求むべからず、寶殿は崇徳天皇保延六年正月二十三日炎上あり、後建武五年兵燹に罹り足利尊氏、同直義と共に親しく炎上の跡を臨檢して造營を議し、漸く舊に復するを得たり、今の御本殿は寶永十二年十二月徳川家光公の造營にして、廻廊は二十四間四面あり、境内の廻りは築塀にて四方には廣大なる總門あり、輪奐の

美を極め特別保護建造物たり、御本宮の正面を馬場先と稱し維新前までは古儀式の走馬をかしたる事あり、兩側は苔蒸したる多くの石燈籠を以つて満さる、本社の後に後見殿と號する攝社式内社あり、築地の内外には若宮社、若宮殿社、住吉社、氣比社、貴船社、龍田社、一童社、廣田社、生田社、長田社、水分社、隨社、三女社等あり。

**太子阪** 太子阪は八幡宮の境内二の鳥居の傍に在りて男山に通ずる間道あり、昔は聖徳太子を此處に祭れるより此の稱ありとの傳説あれど疑はし、老楓幹を交へて生茂り、晚秋霜に飽きて紅燃わんとするの風致掬すべし。



居鳥の三幡八山男



坂子太

**景清塚** 一丘老樹の根を包む所景清塚といふ、源頼朝鎌倉に幕府を創め、男山八幡宮に詣で、源家の武運長久を祈るや、平家の殘黨七兵衛景清、密かに姿を扮して頼朝の跡を追ひ、うの下山を要して、襲撃せむとし、此の畔に忍びたりとは今も尙口碑に遺る所あり、又一説には影清塚は後三條天皇男山へ行幸の節、此處にて御稜の式あり、以來世人は石清水の流れに我が影を清め、心中の穢れを扱ふて參宮するを例とせるより、影清塚の名ありと。

**頼宮殿** 頼宮殿は八幡宮の行在所にして明治元年兵燹に罹り、古代の建物は悉く烏

有に歸し、今は假建あり、毎年九月十五日此の所に御神幸あり。

五八

**放生川** 願宮殿の東に在り、貞觀五年八月始めて放生會を行はせられし以來、この翌十六日毎年魚族を此の川に放養せるものあり、維新以前までは此の川筋一帯は捕魚禁斷の場所として、犯す者は嚴罰に處せられたるあり。

放生川 螢

清水寺 實業

玉と見む生るを放つ河邊には

もねてあかるゝ水の螢も

放生川の螢は八幡八景の一に數へられしかり。

**細橋**

八幡宮鎮座以前、石清水寺より寶塔院への通路に方り、中の谷に架けたる細木橋ありしも、宇佐より御遷座後石橋と成れり、舊記には横一丈堅五尺とあり、八幡宮東門の下に在り、注連を張り、傍に伊勢大廟の遙拜所あり、黄金樋の水此の地下を通じて石清水に流るといふ。

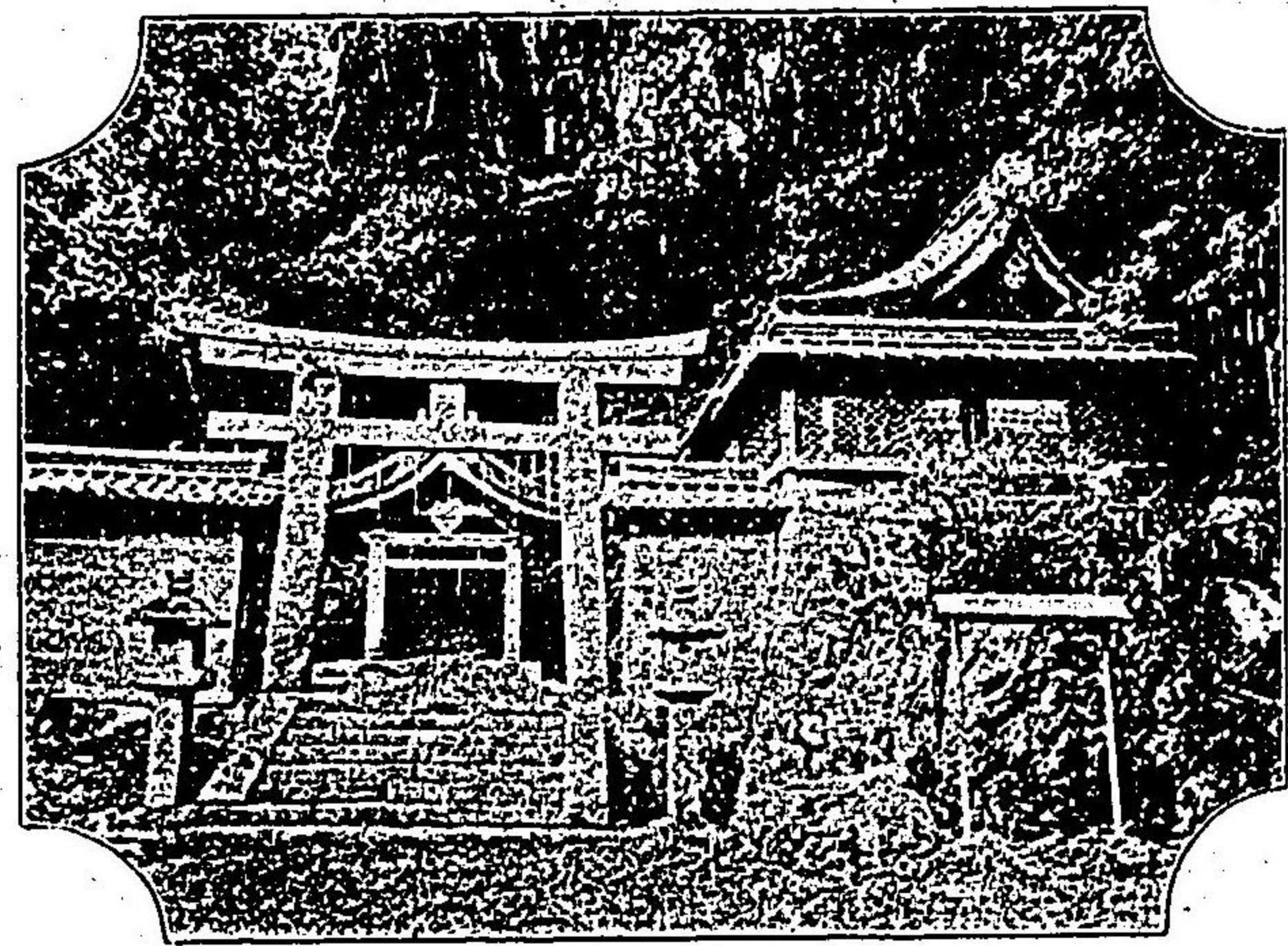
**石清水神社**

石清水神社の御祭神は天御中主神にして男山東半腹に鎮座し給へり、

即ち地主の神あり、又石の間より清水涌出るが故に石清水神社と稱す、靈水の事は石清水雜記に、水の涌出る所は東西四尺許、幅三尺五寸、牛の形の如き巖面に東西七八寸幅四五寸、深サ一寸許窪み、ろの中より清水滾々として涌き出づとあり、現在の泉殿及び石清水神社は元和四年九月台命に依り京都所司代板倉勝重が新に造營せる所あり、此の靈水は嚴冬には氷らず如何なる大旱にも涸れず、且つ作物の害虫驅除に効顯ありとて、近郷近在よりの需用者常に絶えず。

○ 貫 之

松もおひ又も苦むす石清水



石清水神社

五九

ゆくすね遠くつかへまつらん  
神垣のかけも長閑に石清水

六〇

すまん千年の末り久しき

石清水の外に<sup>ほ</sup>岡御井、筒井、藤井、山の井を合せて男山の五名水と稱す。

神應寺 神應寺は律宗にして男山の北、一溪を隔て、峰の半腹にあり、八幡停留所より僅かに一町餘、貞觀元年行教和尚勅裁を経て八幡宮を豊前の宇佐宮より勸請せし後、此の寺を建立し神應寺と號す、地内に開山行教の塋あり、元四宗兼學の道場ありしが足利氏の時禪宗に改む、寺中に安置せる開山行教大和尚の木像は維新前までは男山に在りしを神佛分離に際し當寺に遷したるものあり、又豊臣秀吉の木像あり、二代目弓箴美疆和尚が秀吉より寺祿を増し、寺格を進められたるより、その恩を謝する爲め秀吉薨去の後自ららの木像を刻して冥福を祈りたるありと、堂宇輪奐の美をかしと雖も、四隣閑寂又古刹たるを失はず、殊に境内の眺望絶佳にして、宛然<sup>まがら</sup>一大名匠の繪巻物を展べたるが如し、古谿和尚の杉山十二景の詩あり。



楠公の楠

男山八幡宮には有名なる楠樹

あり、此の木は楠判官正成祈願の爲め數株手植せしと云ふ、然れども多くは枯死して今僅かに二三本を存するのみ、神應寺境内に在るもの、老幹千年の枝を張つて尙當年の史を語るが如し

楠手公

杉山不動尊

杉山不動尊は神應寺の領地

に屬す、行教律師の安置にして、八幡宮御修覆の都度公儀より修繕を加へらるゝを例とす、空圓記に行教和尚、爲鎮惡鬼、奥谷安置不動明王とあり、四時參詣者絶へず、就中毎月三日、十六日、二十八日は京阪地方より來り賽する者多し。

六一



引目の瀧 杉山不動の傍にあり、規模甚だ小かれども境極めて幽、靈水直として落つる所、冷氣人に迫つて骨寒さを覺ゆ。

大石塔 男山八幡宮頓宮の西裏に接し、方一丈高さ三間餘の大石塔あり、元この所に二基の石塔ありしを、いつの頃よりかうの一を失ひたり、石塔は建立大師(行教和尚の尊號)及び行教の兄紀夏井の男にして行教の法弟たる安置和尚の碑あり、維新以前までは男山社僧が春秋二季に嚴かざる祭典を執行し來りたるも今はその事絶はたり。

淀屋辰五郎墓 淀屋辰五郎の墓は神應寺の境内にあり、墓石未だ苔を被ふに至らずと雖



杉山不動

も、熊笹簇々として生ひ、手向くる香華も稀に落葉風に鳴つてあはれ一代の豪奢を極めし風流兒の末路を叫くに似たり、碑面に潜龍齋吐哉个庵居士と刻せり、辰五郎姓は岡



大石塔

本、大阪の豪商あり、邸は今の淀屋橋の附近に在りしが、風流豪華を極めて當時諸大名の邸宅も之に及ぶものおかりしとぞ、即ち邸内前庭には澱江の水を引き四國九州より數寄を凝らせて取寄せたる多くの珍石、奇岩を組みて嶋々を象り、諸國名所の松を移し植にて翠色影深し、世人は淀屋の松屋敷と稱して眼を歎てたるものありとぞ、別に堂島の濱に沿ふて一町四方を取圍みたる商店あり、諸國諸大名の用金を扱ひ、材木は其本業ありしかり、辰五郎

の祖先三郎右衛門督で徳川氏の恩顧を蒙り、八幡三百石の地を賜ひ、大阪、堺に入港の干瀬運上取立の特典を與へられたり、父吉安の没後辰五郎の豪奢益々甚だしく、屢々國禁を犯して榮耀榮華の沙汰に耽り、將軍家より拜領の紋服を着けて遊里に出入し、流連荒亡狂態盡さざる所あり、爰に於て辰五郎の罪を問はれ、江戸に引かれて裁せらる、時の大老柳澤保明、辰五郎を憫れみてその罪を宥し、家産を官没して三都を追放す、當時の記録によれば官没せる淀屋の家屋天井は盡く金箔を貼り、硝子をもつて夏亭を造りたるを始め、十石以上の船十八艘、黄金の鶴一對、珊瑚の簾一卷、咸陽宮の棟瓦四個、千枚分銅



淀屋辰五郎之墓

一、金銀雀十六、黄金藥罐一、黄金茶碗三、大枝珊瑚十、伽羅の膳二十、書畫三千四百幅、未央宮棟瓦一、定家色紙三、黄金佛三十基、金銀製碁器一對、刀劔七百振、長刀三十七振、金百十二萬兩、白銀八千五百貫、地所金券數十萬兩、大阪の地所二千石をはじめ他の珍器奇什山の如しとあり、以つてその豪富を想ふべし、時に辰五郎年十七、後江戸に上りて寛を上野玄光院に乞ふ、幕府情を酌みて八幡領を復せしむ、辰五郎八幡に隠れて茶事風流に一世を終りたりといふ、その庵の趾今は明かからず。  
松華堂の墓 瀧本坊阿闍梨昭乘、松華堂と號し、又狸々翁と云ふ、八幡宮社士松田伊豫守の養子、一説にはさる高貴の落胤ありと稱しまた豊臣秀頼が侍女に生ませたる男子ありとの説あり、幼名を辰之助と呼ばれ長じて一乘院覺法親王に仕へ、中沼左京進元知と名乗り、後八幡平谷町に住し瀧水里坊と云ふ、才識非凡にして詩歌を能し、又俳諧の道に暗からず、特に繪畫は最も得意とする所、牧溪の風を慕ふて氣品高雅、その作品の今に傳ふる物尠からず、寛永十六年九月没す、墓は男山の麓、今は八幡町一民家の裏に在り。

寢覺して我曉をまつの戸に  
音せぬ風の色を聞くかか

とは翁が自筆の像に題したる歌あり。

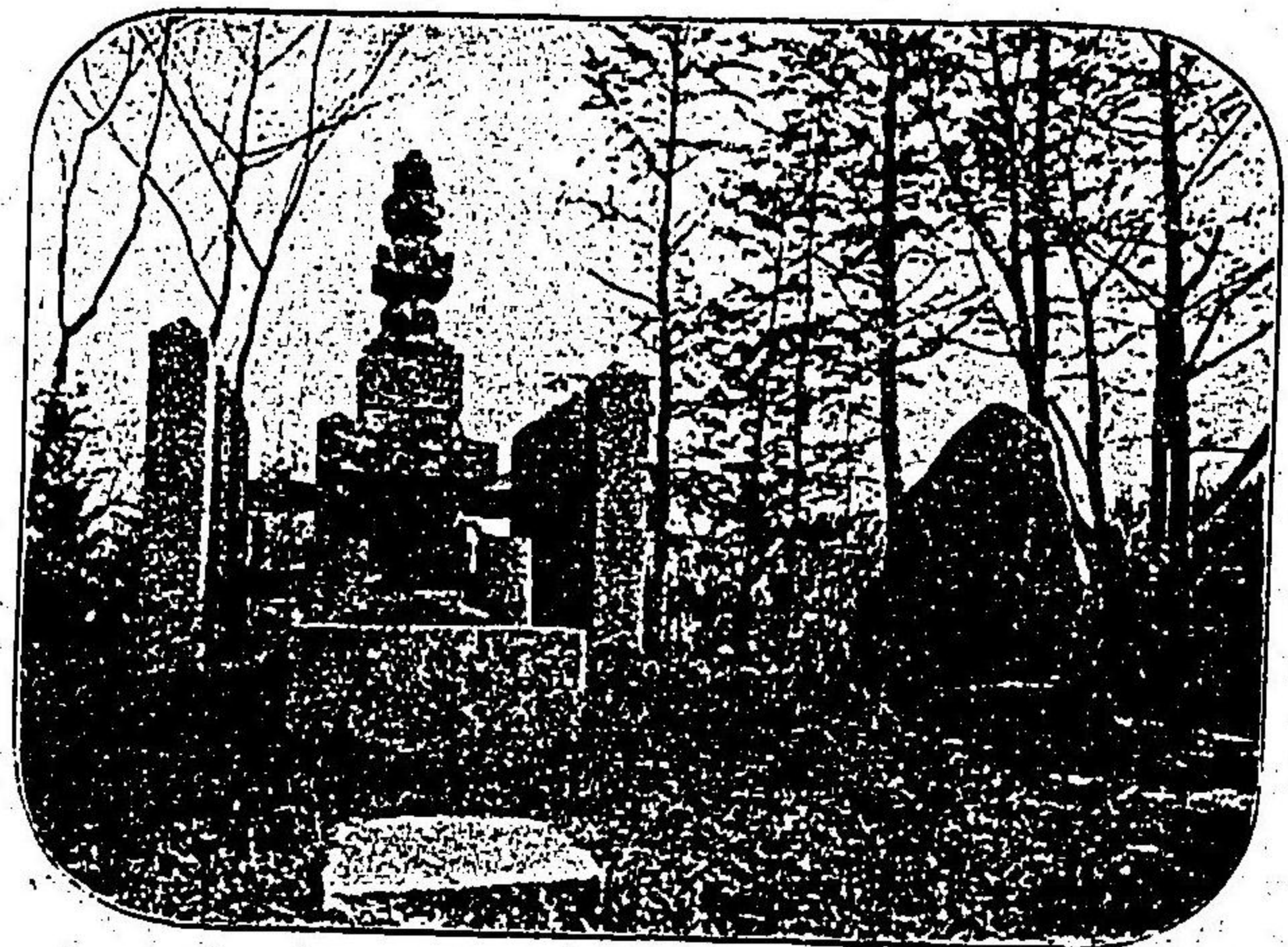
小野頼風の墓 八幡停留場より  
六町、いぶせき人家の後に一基の  
古りたる石碑の草に埋れて淋しく  
立てるを見るべし、傍に簇々たる  
葭生茂りたれど不思議にも皆片葉  
を存するのみ、これが昔より小野  
頼風の墓ありと傳へらる、頼風平  
城天皇の御時都より遁れて男山のほとりに住み、里の女とかりうめの契りを結びたる  
を疎て都にて深く言更したる女が斯と知りて嫉しくやありけむ、八幡川に身を投げて



小野頼風塚

死にたるを後にて頼風之れを憐れみ同じ所に  
身を投げて死したりとあり、此のあはれかる  
戀物語に里人は今も頼風の塚に手を觸れば忽  
ち厄病の祟あるべしと云ひ傳へ恐れて此の塚  
に近づく者あし。

女郎花塚 八幡町の南端、頼風の塚より十  
町餘を隔てたる所にあり、これが頼風が都に  
て言交したる女の墓ありと云ふ、女或時情人  
を慕ふて八幡に尋ね來り、里人に頼風の宅を  
問ひしに、頼風此程女房を求めたりと云ふ、  
女口惜しく思ひて小川の畔に山吹重ねの衣を  
脱ぎ捨て身を投げて死にけり、その衣朽ちて  
其處にしほらしくも女郎花生ひ出たり、頼風



女郎花塚

いと憐れに思ひて

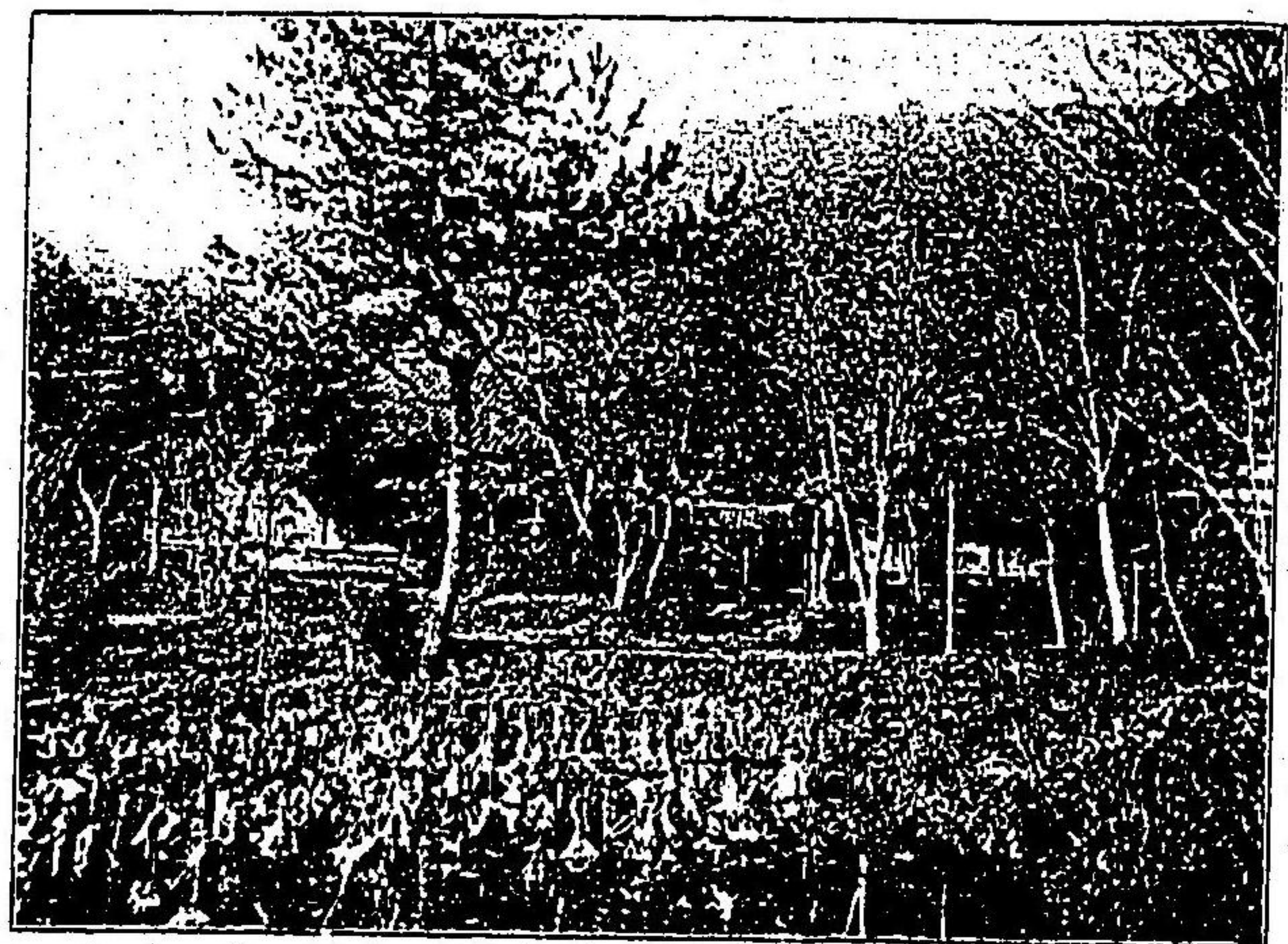
手折つゝ三世の佛に手向して

花にもうさをいさわすれ草

と詠じて、同じ所に身を投げたり、礪石の前には今も尚數莖の女郎花あり、秋雨蕭條たる夕尚この失戀の人を弔はむとや哀れに優しき花は咲くあり。

### 善法律寺

佛像の名作に富みたるに、老楓十數幹境内に茂り、世に紅葉寺と呼ばれ觀楓の幽境として名高き善法律寺は頼風塚を距る僅かに三町餘の南方に在り、後に山を負ひて竹籬を繞らせ、楓樹葉を茂らせて堂宇を蔽ひ、蓮池あり、茶畑あり、閑寂の趣眞に掬すべし、建長年中豊前國宇佐宮の喜多寺に準じ、男山八幡宮社務檢校職善法寺官清の創立に係り、東大寺の名僧實相上人を請じて開山とす、上人資性英邁にして徳化甚だ高く、殊に後深草天皇の御歸依淺からず、勅を奉じて停風乞雨の祈願を凝め効驗著しきを以つて敕威を蒙り、大悲觀音の尊像を賜ふ、是れ本堂草創以前の佛體ありと云ふ、その他本尊阿彌陀如來を始め千手觀音菩薩、寶冠阿彌陀如來、弘法大師



善法律寺

作聖天の立像等は實に得安からざる名作ありと傳へらる。

正法寺 徳迎山と號し、本尊阿彌陀如來は惠心の作あり、清和天皇十一代の後胤源忠國の本願に依り、建久二年の創立にかゝる、忠國の長子國元を大檀那とし、圓誓上人を開山始祖とす、後奈良天皇天文十六年勅願所に補せられ、徳迎山、勅願寺の勅額二面を賜ひ、徳川氏の世とかりて累代朱印五百の寄附あり寛永七年尾張大納言光義の國老志水甲斐守忠繼、現在の本堂、鎮守、方丈、庫裡、大門等を再建す、忠繼は忠國十三世の孫に當り、忠繼の祖父志水宗久の女お龜の方は徳川家康の

妾とあり、伏見桃山城に於て尾張大納言義直を産み、後落飾して相應院と號し、その菩提所に當られたり、當寺と徳川家とは實に斯の如き關係ありたるを以つて、維新以前は嚴かある格式を有したるあり、堂宇壯麗輪奐の美を極め、且つ後庭屋に迫りて岩石を配し、泉を穿ちて橋を架したり、若し夫れ滿庭の杜鵑花盡く咲出する時んば、泉水影紅に鮮苔爲めに燃わむとするの趣あり。

**八角院** 八角院は元男山に在りしが維新後志水の南端に移され、女郎花塚の附近にあり、享保年間順徳天皇の御願に依り堂形を八角に造營せしめ、八角堂と名づけて供養を修行し



寺 法 正



給ひしかり、尊體は一光千佛丈六阿彌陀佛あり、後豊臣秀頼再營し、その建物の古き事他に比類なし。

**車塚** 八角院境内の小丘を車塚と云ふ、此の地は高野街道に當り、東西両側に二個の小丘ありて、二基の古墳相對すること恰も車の兩輪の如しとて里人これを車塚と呼ぶに至れり、先年此の境内より鏡、刀劔、勾玉等の古器物を發掘せしと云ふ、然れどもこの由緒今に詳かからず。

**大西坊** 本宮北門の西側に在り、その方位に由つて大西坊の名あり、中興の開祖覺運は大石良雄の叔父にして、良雄主君淺野内匠頭の仇を報せん爲め山科に閑居するに先ち暫らく大西坊に投じ、覺運

亦密かに周旋する所ありしと云ふ。

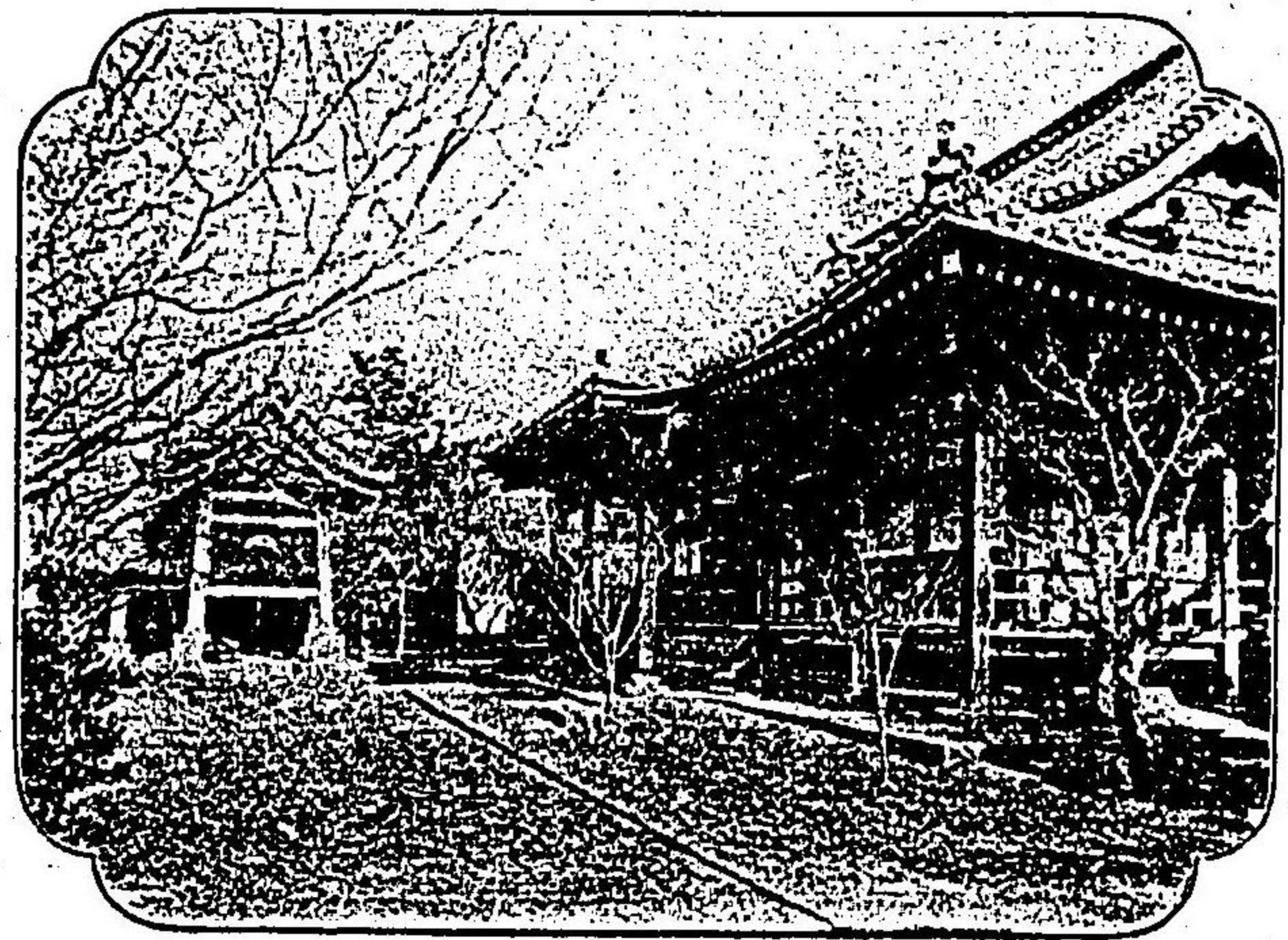
**橋本** 聖武天皇の御宇僧行基河陽離宮の前に一大長橋を架して河陽橋と名づけたり、河陽離宮とは今の大山崎離宮八幡鎮座の邊にして、橋本は即ちこの河陽橋の南詰に方り、昔は斷崖水深うして船舶の碇泊に適し、西海、南海より來る船舶は大方此處まで遡りて攝津難波の津と相並びて近畿の要津たりしあり、随つて土地殷盛を極め、特に江口、神崎と共に、遊女街として世に知られ、關白兼家が還曆の賀庭に河陽の妓を召して酒間を幹旋せしめたりとあるは實に此の橋本の妓女を聘したるあり、左馬頭義朝の妾義平の母もまた此橋本の遊君たりしは人の知る所あり、碧海桑田幾たびか變じて昔の橋本の繁榮名殘を止めず、今は甚だしく衰へたれども橋本の遊廓は尙僅かに一の一小部分を遺しつゝあり。

**西遊寺** 橋本停留場の傍にあり、普理山と號し阿彌陀如來を安置す、相州小田原の城主北條相摸守氏康の次子、幼にして出家佛門に入り、遂に増上寺中興の祖とある、元龜元年氏康の命に依り上洛の歸路宗祖大師八幡宮參籠の例に倣ひ、西國巡錫を止めて

當寺に住す、西遊寺の名ある所以あり、澱江の流れを俯瞰して山崎を望み、城丹の翠巒一陣に入る、風光明媚の地あり。

**洞ヶ峠** 筒井順慶が大兵を擁して、羽柴、明智兩軍の旗色を觀望したる有名なる洞ヶ峠は八幡町の南端、山城河内の國境に在り、高野街道に當り、觀應三年宇治合戦以來の古戰場あり、頂上に後醍醐天皇の行在所あり、每朝此所より八幡宮を御遙拜ありしと傳へらる、其の傍に伏拜の松ありしが近年枯損してその跡を止めず、春秋日麗かに氣澄むの候、半日の遠足に過ぎにし跡を弔ふも又愉快からずや。

**圓福寺** 八幡停留場より二十七町洞ヶ峠の

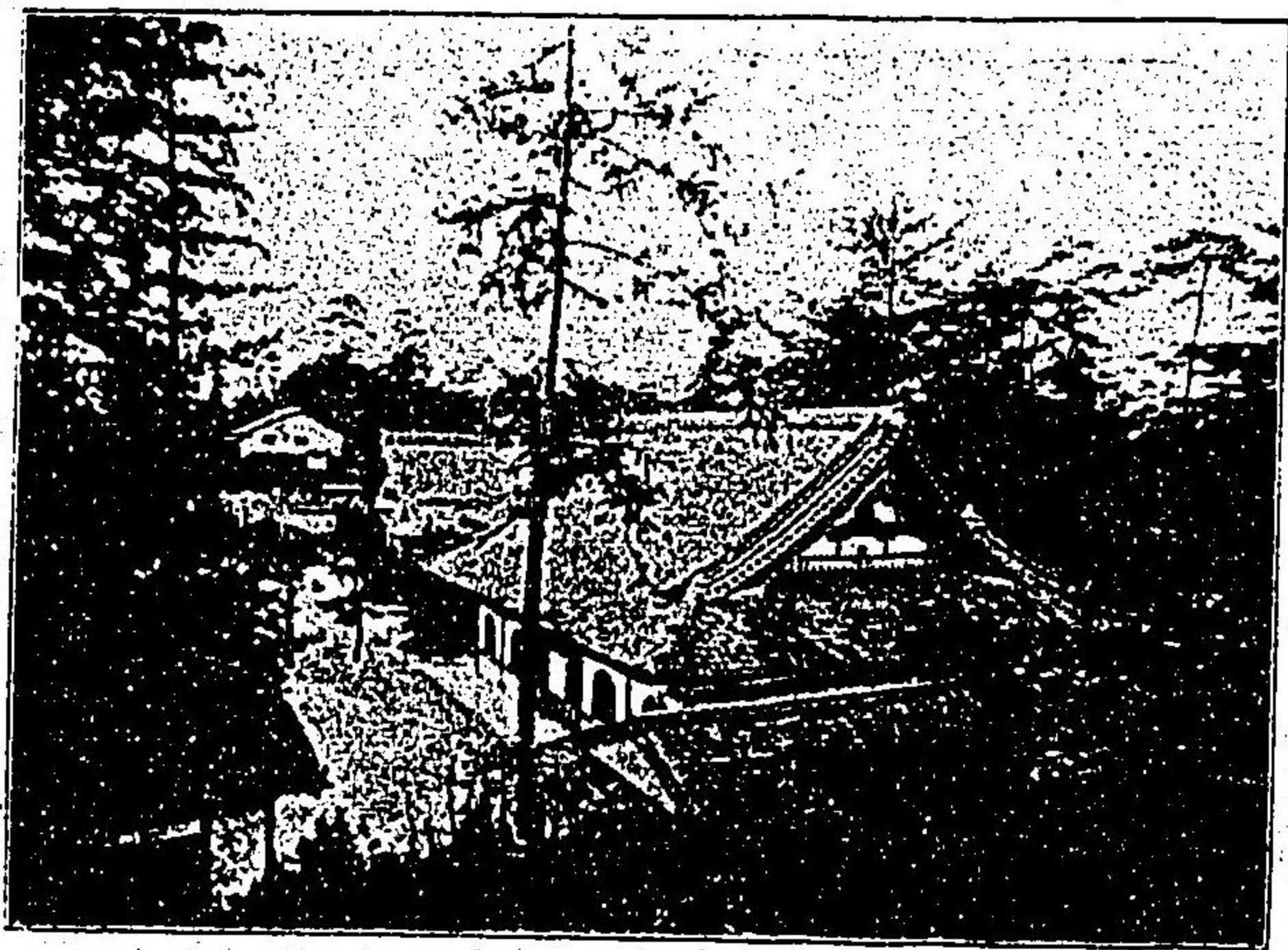


西遊寺

西北に在りて、禪學修業所たり、文化四年妙心海門大和尚、田中僧正家傳の達磨の像を得て祀る、此像初め大和國片岡山達磨寺に在りしが寛正元年片岡大和守光次、畠山政長と戦ひ敗れて山城國八幡に隠れしが當時此像を携へて一堂に安んせしを此處に移しよものにて聖徳太子の作と傳へられ日本三達磨の一あり、これより寺門漸く繁昌し近年參詣者非常に多し、去四十一年數萬の有志金を得て堂宇、建物の修繕を加へ、境内幽邃靜寂、白雲禪房を繞らせ、清泚天機を鳴らし、實に好個の道場地たり。

足立寺趾

足立寺は稱徳天皇弓削道鏡に帝



(壹其) 寺 福 園



(貳其) 寺 福 園

位を譲り給はんとて、和氣清磨を勅使として宇佐八幡に遣し給ふ、神慮之れを許し給はず、清磨上落してその旨を復奏せるに、道鏡怒りて清磨の足の筋骨を截ち宇津保舟に乗せて流せり、此の舟宇佐の濱島に着きし時、猪來りて清磨を助け神殿に候すれば、忽ち五色の小蛇顯はれ清磨の脛を舐むると見る間に筋骨元の如く平癒せり、清磨歸洛の後此所に一字を建て足立寺と稱し永く居住せりと云ふ、今は其の傍に清磨神社あり、今存する墓地こり即ち此の足立寺の趾あり。

山崎 羽柴秀吉と明智光秀と會戦せし所として歴史上有名なる古蹟あり、山城國乙訓

郡に在り、橋本停留所より川を距ること十餘町、今は大山崎村と稱し攝津との國境に位す、地勢巖の口の如く淀川及び西國街道の下を通ず、男山らの東に峙ち天王山の西に在り、實に京師南方の要害たるを失はず、天正十年六月十二日、秀吉中國に在り、右大臣信長逆臣明智の爲めに本能寺に於て討たれ給ひぬと聞き、急ぎ馳せて尼ヶ崎に來る、即ち使を光秀の許に遣はし、『秀吉右大臣御父子討たれ給ひぬと聞き、今の御趣意を承らん爲めに馳せ上りて候、京都の内を騒がせ奉らんこと畏れ多し、山崎あたりまで打出でたまへかし、秀吉も後れず馳せ向ふべし』と告ぐ、光秀異議なく諾し、諸將士を率ひ夜半雨を冒して發し、桂川を渡りて山崎に向ふ、秀吉既に進んで天神馬場(高槻)に在り、明くれば十三日秀吉曉に軍を進めて山崎の南に到り、北の方天王山に陣せんとす、時に既に敵の旗幟早くも山麓に動くを見る、秀吉急に堀尾吉晴に命じて略取せしむ、吉晴僅かに十五六騎と弓銃手二十人ばかりを隨へ敵の背後を撃つ、敵の弓銃手後に在りて用を爲さず、吉晴勢に乗じて益々迫る、既にして部下皆來り、堀秀政の兵亦來り會し、奮闘激戰遂に敵を攘ふて山上に陣す、時に光秀の軍山崎の東

に在り、今の將齋藤利三洞ヶ峠にあり、使を光秀に遣はし、筒井順慶の向背も最と疑はしければ一先づ阪本に開きて後日の策を運らさんことを謀る、光秀肯かす、秀吉の第二陣中川清秀第三陣池田信輝等左右より敵を挾撃し勝算既に歴々たり、洞ヶ峠に陣所を構へて徐ろに兩軍の勝敗を觀望せる筒井順慶爰に於て又山を下りて不意に光秀の背後を衝く、光秀の軍遂に大に潰へ、秀吉勝に乗じて迫る、光秀纔かに身をもつて遁がれ勝龍寺に達すれば、秀吉の軍早くも來りて十重二十重に圍む、城兵追々遁れて留まる者百餘人、光秀策盡きて十餘騎と共に一方の血路を開いて阪本に走らんとし、往きて小栗栖に低りし時、一土民の爲め竹槍をもつて殺され、天誅踵を回らさず逆臣全く滅ぶ。

天王山 淀川を挟みて男山と相對し鬱然として屹立するは天王山あり、山頂の眺望秀麗にして京都の市街は云ふも更あり、伏見より鳥羽街道等は歴々指呼の間に在り、山崎の役兩將の見る所を一にし、勝敗の決此の一山の得失にありとし、互ひに之れが占領に力を致したる亦所以ありと云ふべし、山上今も城砦の趾あり、元弘建武の頃赤

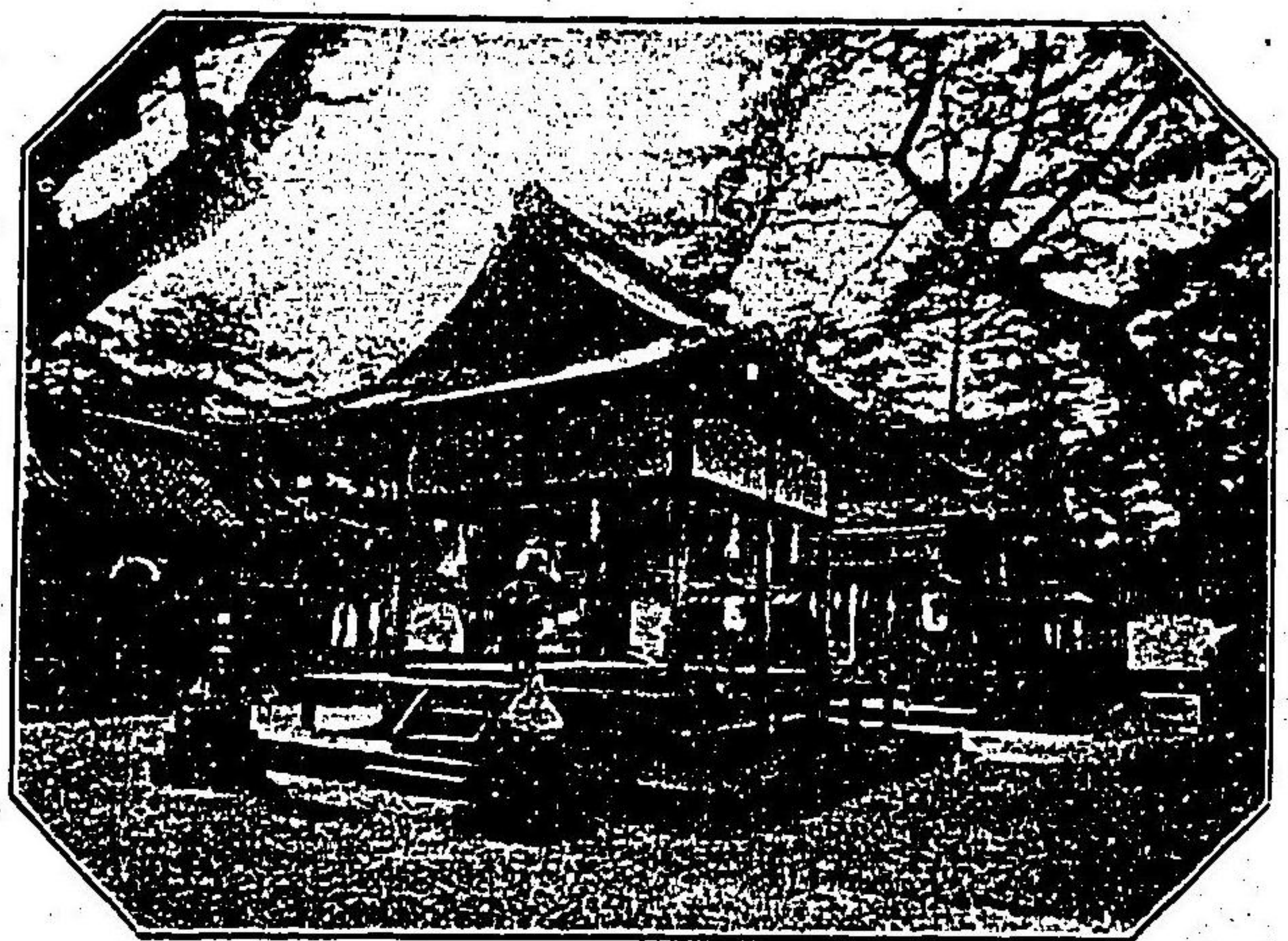


松一族の義兵を擧げし所にして、文明年間山名、赤松等の城を築きし趾あり、又近くは明治維新の際真木和泉守等勤王の士、會桑の兵と戦ひ、衆寡敵せずして自殺せり、山上鳥居の傍に真木保臣等十七名殉難の碑あり。

**寶積寺** 世に寶寺と稱し天王山の半腹に在り、真言宗補陀落山と號す、聖武天皇の本願に依り行基菩薩の開基にかゝり、昔は子院十二宇を有したるも今は衰頽せり、有名ある打出小槌は俗に龍神の化現して聖武天皇に獻せしものありといふ。

**妙喜庵** 天王山の麓に在り、初め山崎宗鑑の草庵ありしがいつの頃よりか東福寺に屬し、禪宗とあり十一面觀世音を安んず、佛殿の傍に千利休の茶室あり、庭内一株の老松あり亭々として聳ゆ、世にこれを袖摺松と云ふ、天正年中秀吉寶積寺（天王山の山腹に在る寶寺）を本陣とし、徒然のあまり時々當庵に臨み、利休をして茶を點せしめたる所あり。

**長岡天満宮** 乙訓郡乙訓村字開田に在り昔は眞言宗の精舎ありしが、菅公幼年の頃長岡に閑居せる在原業平を訪ひ、屢々伴ふて此の精舎に遊び、詩歌管絃の催しかどあ

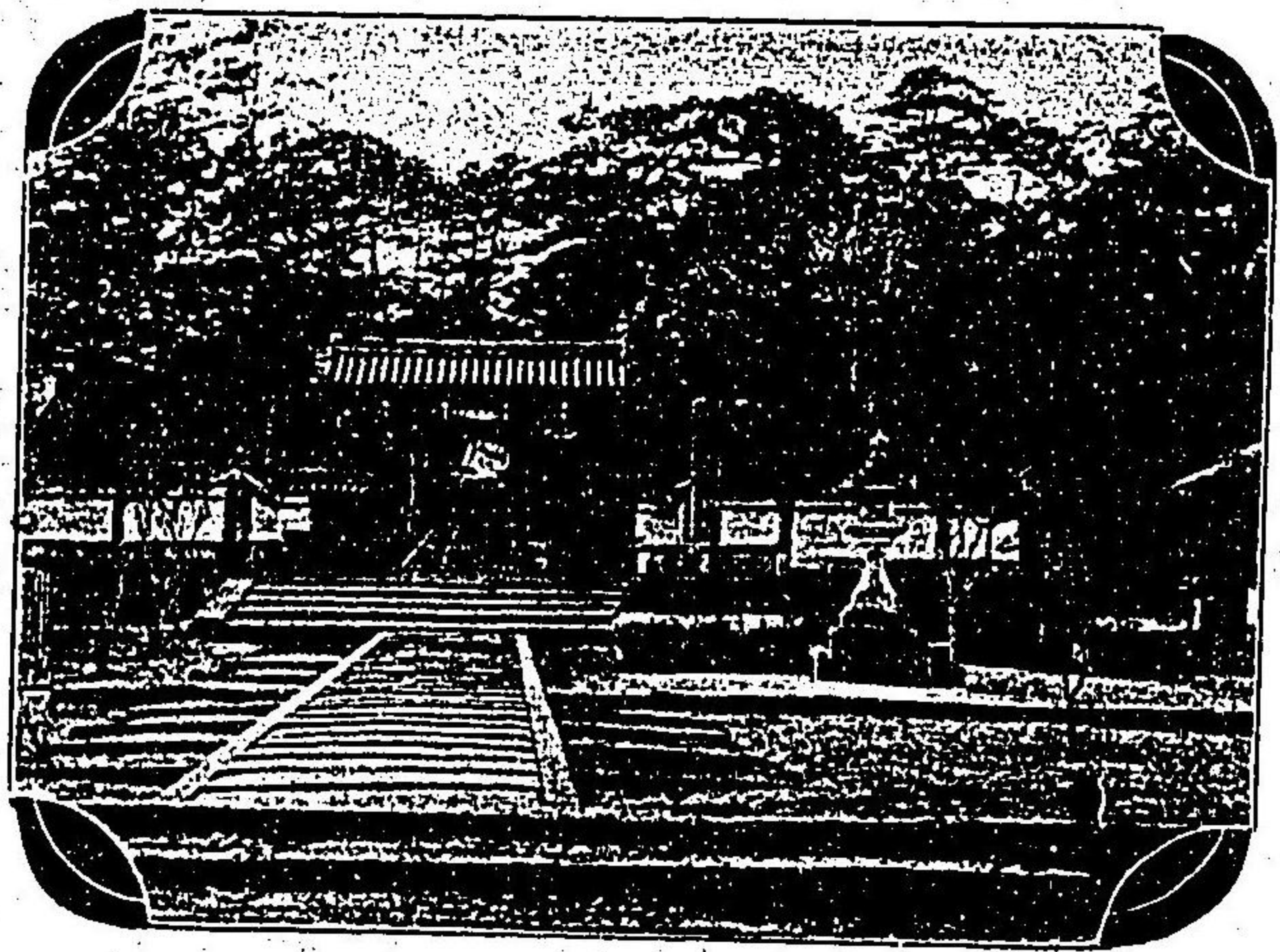


り、昌泰四年菅公筑紫に謫せらるゝ時、寺僧別れを惜みて淀より鵜殿の邊まで送りしかば公は自ら小照を寫して之れに授けしが、薨去の後此處に祠を營みてその眞影を安置したりと、建築古雅、境内梅樹多く春風一たび吹けば滿枝の瓊花白き事雪の如く、薰香馥郁と衣袂爲めに濕ふ天感あり、社前に池塘あり、池畔に躑躅、杜鵑花滿を栽培し、夏時鮮艶然へむとす、また楓樹あり、宮晩秋の候探楓の雅客來り賽する者多し。

**粟生光明寺** 淀町より川を渡りて數町、乙訓郡乙訓村字粟生に在り、淨土宗西山派の總本山あり、建久四年熊谷蓮生法師初めて此地に佛殿を營み、惠心僧都の作阿彌陀如來を安置しるの

師法然上人を請じて入佛供養式を行へり、地域西山の麓に位し幽雅靜寂にして俗塵を絶ち、全山松檜蔚然として翠色滴るが如し、近年櫻楓等を培養し更に一層の風致を添ゆ、境内熊谷櫻、龍燈松等あり。

**櫻井の里** 青葉茂れる櫻井の、里のあたりの夕まぐれと、兒童走卒も歌ふある櫻井の里は攝津三島郡本村字櫻井に在り、淀停留所より淀川を隔て約二十餘町、延元元年五月楠正成、足利尊氏の西上を防止せんとし、死を決して兵庫湊川に赴く、途次うの子正行を招きて勤王の大義を遺訓し、鎧の上に散る涙を拂いて父子訣別せる所あり、正行時に年僅か



光明寺

に十一、孤影悄然として千早の居城に歸る、石牆の裏に丈餘の碑を樹て楠公訣兒處と刻す、傍に古松あり、枝枯れ幹朽ちて僅かにうの俤を存するのみ、來りて當年を追懷すれば誰か感慨無量からざるを得ん。

楠公別子圖 頼山陽  
海旬陰風草木醒、史編特筆姓名馨、  
一腔熱血存餘瀝、分與兒曹灑賊庭。

同 篠崎小竹  
西海戰塵迫、楠公軍務勞、雲愁櫻井驛、霜凜菊花刀、  
遺訓傳獅子、佳兒眞鳳毛、一家忠孝盡、萬世姓名高。

**淀町** 久世郡の西北隅、淀川の南岸に在り、元龜年中岩成主税助ここに城を築き、織田氏と戦へるとあり、後豊臣秀吉寵姫淺井氏を此處に移して住せしめたるより世人呼んで淀姫と云ふ、地勢京師への通路を占むるより、西國諸侯の入京を監視せむが爲め、秀吉自ら伏見桃山城に在りて、淺井氏を此處に置き、内心直轄區域とあせるもの



淀城趾

八二  
あるべしといふ、後徳川氏の世に至り伏見城を移してここに造營し、松平定綱を封じ、更に享保年間に至り、稻葉正知をして代らしめ、以來子孫相襲ふて明治維新の廢藩に至る、稻葉家の祖先を祀れる稻葉神社は舊城内に在り、此の附近一帶の地豊沃にして蔬菜果樹の栽培に適し、毎朝市を開いて果實蔬菜の取引を行ひ、近くは伏見京都より大阪天満の市場に輸出す、特に梨桃杏等は甘味多くして需用甚だ豊かあり、此地一葦水を隔て山崎天王山に對し、粟生の光明寺を初め楠氏父子袂別の遺跡として有名なる櫻井の里等を探ぐるに最も便あり。

淀城趾 淀町の西部淀停留所の傍に在り、殘

壘碧羅封じ、空壕甚生茂りて澗水を漲らし、光景甚だ蕭條たり、永正年間細川氏の屬城として實に京師の要害たりし也、元龜三年織田氏の將細川藤孝來り攻めて之れを陥れ、後豊臣氏に依つて修築され淀姫をして居らしめ、更に徳川氏の世となりて、松平越中守を経て稻葉丹後守を封せしこと既記の如し、慶應四年正月伏見鳥羽の役幕府の軍利あらず、遂に淀橋を隔て防戦し、京軍淀城を攻め川を隔て砲撃しうの一部を焼失せしめたり。

與杼神社 舊城内に與杼神社在り、一に淀媛神社と稱し、玉依姫を祭る、社殿輪奐の美あしと雖も、雅致甚だ掬すべきものあり毎年



與杼神社

十月二十三日祭典を執行し、近府縣よりの参詣者多し。

美豆の桃林 淀町を距る數町久世郡美豆村に數町の桃林あり、花時妖艶の春を粧へば和風輕く紅葩を吹きて野趣眞に掬すべきものあり。

浮田の森 大荒木杜と共なる跡今に明かあらざれど、古來歌聖の吟詠妙からず。

かくしつゝさてやみかん大あらきの

人 九

○ 浮田の森のしめからかくに

爲 家

あふことのあさも浮田の森にすむ

よふこ鳥ころ我身ありけり

淀川 淀川は源を近江の琵琶湖に發し、近江に在つては瀬田川と呼び、南西に流れて山城に入り、宇治を過ぎて宇治川とあり、伏見町に至りて河幅漸く大に、別に京都市を貫通せる加茂川と、嵐山の麓を流れたる桂川との兩下流も下鳥羽に至りて一と

あり、更に淀に至りて前の宇治川と合し、始めて淀川と呼び、更に流れて橋本に至り、別に南方より來る木津川をも併せて河は益々大となり、輕帆風を孕ませて白鷗波に漂ふの光景を呈しつゝ河内と攝津の兩國を境して今は川瀨船の上下甚だ繁く、河流は枚方、蹊陀、九箇庄等の地方を過ぎ、江口に至りて神崎川の一流を分ち、豊崎に至りてまた中津川の一派を分ち、大阪市内に入りてまた安治川、尻無川、木津川の三派に分れ、五川恰も櫛の齒を引くが如く大阪灣の海に注ぐあり。

舟おとす淀の川瀬の朝霧に

爲 家

○ たねく見ゆる岸のち人

公 衝

かりくらし交野のま柴打敷きて

淀の川瀬の月を見るかあ

## 宇治及木幡附近

八六

宇治町 久世郡の東北に在る一市街にして、伏見を距ること東方僅かに一里半、應神天皇崩御の後皇太子稚郎子、皇位を御兄宮に譲り給ひて難波の宮におはせしが、兄宮即位を諸ひ給はざるより、この地に隠遁し給ふ時、此の邊荊棘深うして道に迷はされしを、偶々兎來りて太子を導き奉りしより兎道と呼ばれたり、後菟道又は于邇、賴路あごとも書れ、中古以後宇治に改めたり、昔は地域頗る廣く、京都の東南宇治川の兩岸に跨り、今の宇治町宇治村より田原、小倉、木幡等を合せて菟道と稱し、淀川の東岸を菟道彼方の郷と稱へ稚郎子の宮居し給ひしより、桐原日桁宮と申したり、又皇極天皇行宮を營ませ給ひて宇治郡と稱し、その後繪神公卿の別業地とされり、此の地南都より京師に入り、又關東に通ずる要路に方り、事ある毎に戰鬪の巷とありぬ、治承の役、元暦の戰、延元の役等孰れも古戰場として、有名あり、佐々木、梶原の兩將宇治川の流れを亂して先陣を争ひたる颯爽たる英姿を忍ばしむると共に、山紫水明、群

螢を配して深雪、駒澤の情話を止むあり、朝顔日記は即ち此の情事を彩りたるあり、若し夫れ桐原、朝日の諸峰新緑滴らむ時、爰に一遊せば、萬斛の涼氣直ちに詩腸を動かすに足らん、旅亭には萬碧樓、萬年樓、朝日山温泉等最も名あり、特に萬碧樓は賴山陽の命名せるものにて、濛々たる宇治川の流れに臨み、朝顔日記の作者は駒澤が此處(菊屋といふ)に宿り、川を隔て萬年樓(萬屋)に投宿せる深雪を配して才子佳人が相思の情を描きたる、心憎き結構といふべし。

大江 匡房

川霧の都のたつみ深ければ

○ うことも見ぬ宇治の山里

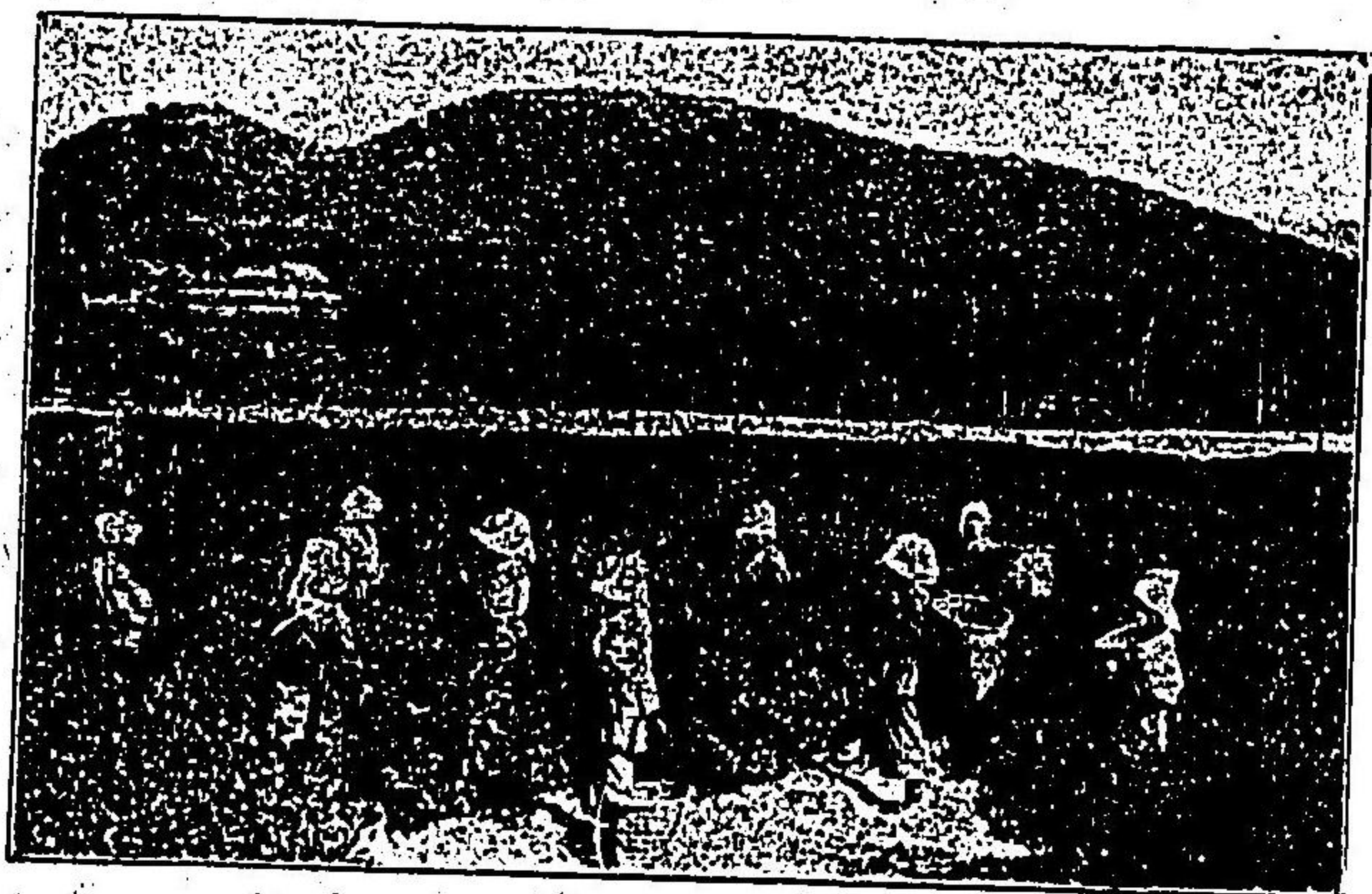
源三位 頼政

○ 宇治路ゆく末ころ見ぬ山城の

こはたの里を霞こめつゝ

戸數八百餘、人口約三千五百、全國第一の製茶所として名あり。

八七



宇治茶摘

宇治の茶摘 宇治は茶所縁所として宇治の茶の名聲は日本の津々浦々にまで響き渡れり、昔明恵上人茶の木を此の地に移植せしに、地味に適してその香味天下に冠絶せり、足利義政、豊臣秀吉等は深く茶事の趣を愛し特に宇治の銘茶を愛用せられしかば、益々繁昌して今は實に年々の産額二百五十萬圓を算するに至ると、されば此の附近一帯の地は苟くも茶を培養せざるを、新芽緑を點するの頃、諸方より入込む茶摘女の優に鄙びたる茶摘歌を聞く、誠に宇治は茶の名所たるを失はざるあり。

あれに見ゆるは茶摘ちやあいか

あかね禪に菅の笠

寝たやねむたや寝た夜はよかる

摘んで寝た夜は尚よかる

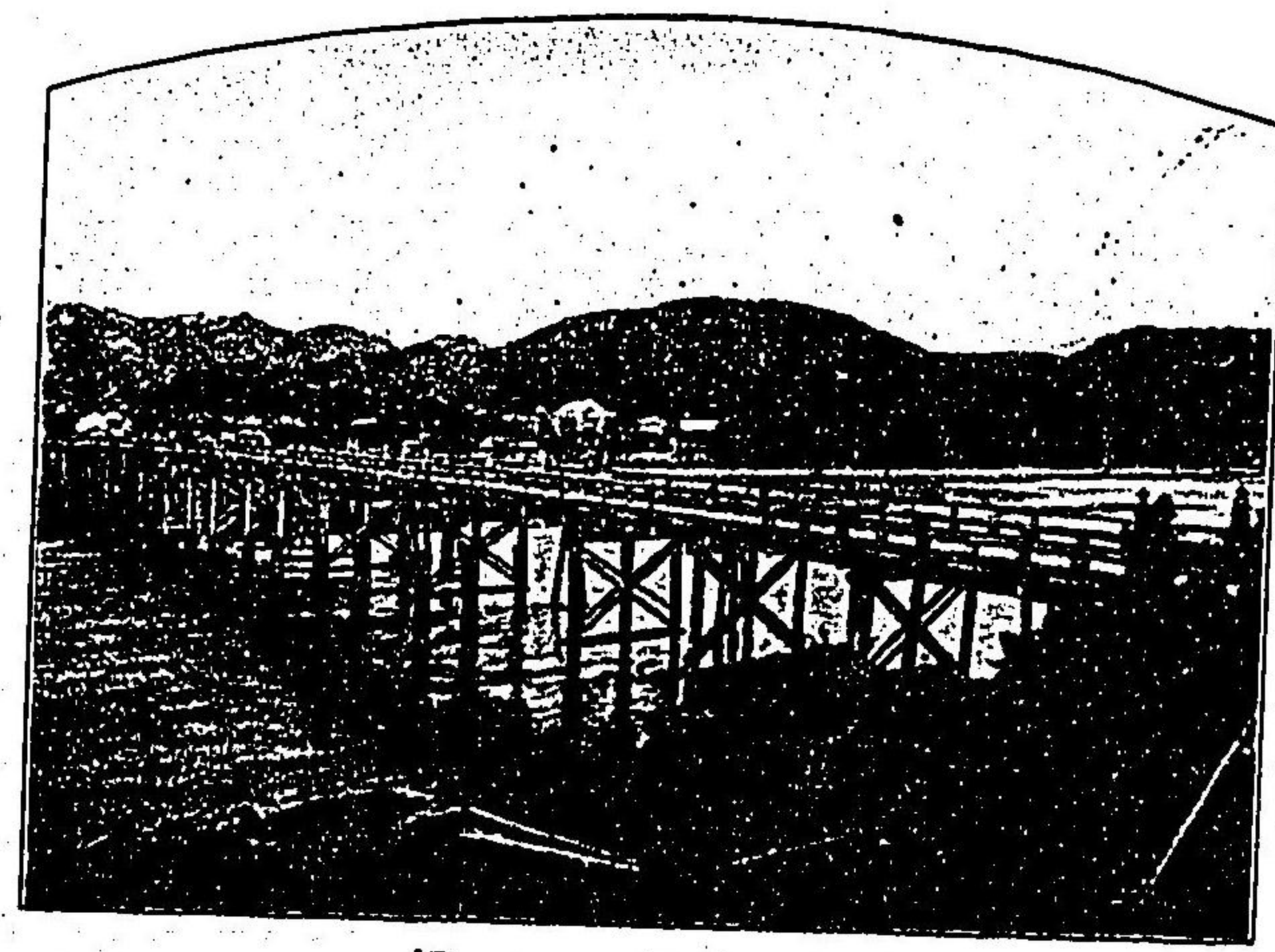
和風一過、茶摘唄の一節に想ひを情人に寄す、その風流見るべからずや。

宇治川 近江國琵琶湖に發し、水勢勢田に潰れて西と南に岐れ、宇治郡笠取村に至りて西北に流れ宇治町を貫く、宇治より上流五里許、水脈山巖に束縛され、激湍飛瀑をなす、此の間頗る奇勝に富む、就中有名なるを跳鹿灘、浙米瀬とす、跳鹿灘は宇治橋の上流約一里、水騒りて僅かに丈餘、奇巖將に對岸に跳らむとし、その狀恰も奔鹿の踰ゆるに似たりとして此名あり、浙米瀬は更に下流にあり、奇石水を支へて怒號激越し、飛沫千頭水爲めに白く、恰も米を浙したるが如し、宇治に至りて山容漸く開け、水勢又漸く緩く、紫巖碧水に映じてその景情云ふべからず、治承の昔、源平流れを挾んで相陣し、佐々木、梶原の先陣を争ふて好個の歴史を飾りたる所あり、昔は宇治の網代として氷魚を漁りて御供に奉りたりといふ。

物部の八十氏川のあしろきに

いさよふ涙の行衛知らすも

宇治橋 昔は菟道の埤頭ありしが孝徳天皇  
 大化二年、南都元興寺の僧道登、道昭勅を奉  
 じ始めて橋を架す、長さ八十三間、その後兵乱  
 又は洪水の爲め屢々墜落して屢々架せられ、  
 弘安七年西大寺の興聖上人工を興し、天正六  
 年織田信長改造せるが羽柴秀吉工事奉行を命  
 せられ和州三輪山の松、檜材を用ひたりと、  
 秀吉關白とあり茶事の風流を嗜み、橋守通圓  
 をして橋上より清冽の水を汲ましめたる故事  
 に依り今も橋の中央に水汲場を設く、橋の欄干  
 には唐銅の擬寶珠二十二基を用ひ古雅頗る愛  
 すべし、源三位頼政の軍宇治橋の板を撤して、  
 平氏の軍を防ぎたるよりうの名高し。



宇治橋

九〇

○ 俊 成  
 千里ふる宇治の橋守こと問はん  
 ○ いくよすむへき水の流れる  
 家 隆

宇治橋や夜半の川風更にけり  
 下ゆく水の音はかりして

橋の袂に通圓茶屋あり、うの祖を大敬庵通圓政久と云ふ、貴紳公家の菟道巡遊の砌此處  
 に立寄りて若者を味ひたる古例多し、茶室の額は尊朝親王の御筆、鐵の茶釜は治承年  
 代の遺物、一休禪師作通圓の像、利久作豊公の釣瓶、一休の一服一錢の書等は同家秘  
 藏の物あり。

桐原日桁宮趾 宇治川の北岸、宇治橋の上流宇治神社鎮座の所あり、里人之れを離  
 宮八幡と呼ぶ、應神天皇の朝に造營し、桐原日桁宮と申したり、天皇崩御の後、皇太  
 子稚郎子位を御兄宮大鷲鷲尊に譲り給ひ此宮に住はせ給ふ、御兄宮位を踐み給はず、

九一

互ひに相譲りて帝位を空うすること三年、皇子御兄宮の御心奪ふべからざるを知り自  
衄して薨じ給ふ、兄宮仁徳天皇深く歎かせ給ひ、皇子を祭りて宇治若宮と稱す、今の  
宇治神社あり、神殿の傍にある御手洗を桐原水と唱へ、境内櫻樹多く、陽春四月の候  
枝頭盡く花を綴る、景致甚だ濃かあり。

朝日山 宇治の東方に聳ゆるを以つて此の名あり、山上よりは宇治川の清流を脚下  
に俯瞰し眺望甚だ佳あり、石佛観音、石造の五重塔、稚郎子の墓碑等あり、新緑洗ふ  
が如きの候對岸より此の山を仰げば、一味の清風自ら到らん。

紅葉ちる山は朝日の色あから

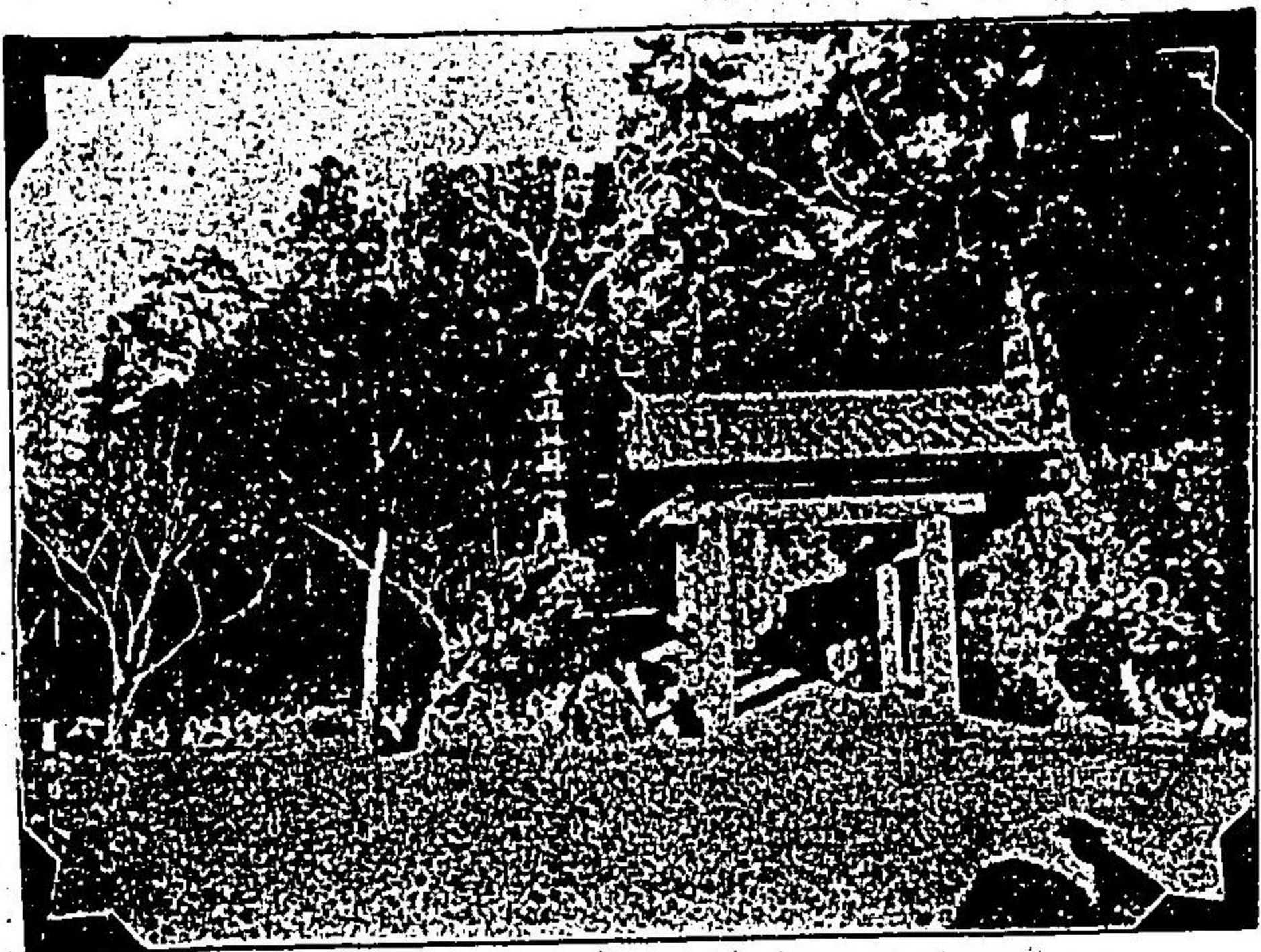
西園寺入道

しくれて下る宇治の川波

權大納言公實

麓をば宇治の川霧立こめて

雲井に見ゆる朝日山かゝ



興聖寺

興聖寺 朝日山の半腹に在り、佛徳山と號  
し、日本最初の曹洞宗靈場あり、天福元年弘  
誓院正覺禪尼、極樂寺の舊趾に伽藍を建立し、  
道元禪師を請じて開祖とす、四條天皇寺號の  
勅額を賜ふ、その後屢々兵火に罹りて荒廢せ  
るを慶安二年永井信濃守殿堂伽藍を造營した  
り、現今の堂宇は即ち是あり、宇治橋北岸に  
沿ふて石門あり、門内一町餘の阪を琴阪と云  
ふ、楓樹左右に枝を交へ、山吹うの間を點綴  
し、境内幽邃にして躑躅多し。  
斷碑 宇治橋北詰放生院の前に在り、放  
生院は律宗にして道昭和尙の開基、宇治橋と  
同時の草創あり、昔は境域廣く堂宇又莊麗を



りしが、今は荒廢して大方は田地と化したり、斷碑は大化二年宇治橋竣工の砌、朝廷有司に命じて碑銘を石に刻し、橋畔に建てしめたるを、いつの頃よりか土中に埋没しての所在を知らざりしが、寛政年中偶々橋寺の溝中より發掘し、今の所に建てたるあり、陸前多賀城址壺の碑、上野多胡の碑と共に日本最古の碑にして、千年以上を経過せるものあり。

**朝日燒** 宇治神社南方の小丘を茶碗山と云ふ、古來有名かりし朝日燒の古跡あり、平等院所藏の柴舟香爐は古代の朝日燒にして今は國寶に準せらる、正保年間小堀政一宇治の工人に命じて窯をうの古跡のあたりに築き、陶器を燒かしむ、うの膚淡紅若くは淡青にして頗る雅致あり、うの子政尹の代に至り朝日の二字を印し、香合、鉢等を造りしがうの後中絶せるを昇齋松林松之助ある者、丘麓宇治川の畔に蕭洒たる亭を構へ、茶碗、花瓶等を燒き出して宇治名産の一とされり、昇齋性朴直にして世事に疎く、自ら天下の變人をもつて居る、今や朝日燒の名と共に宇治の名物男として風流雅人の交り多し、東本願寺法主大谷光演師句あり。

初龍やこゝに名を得て天下一

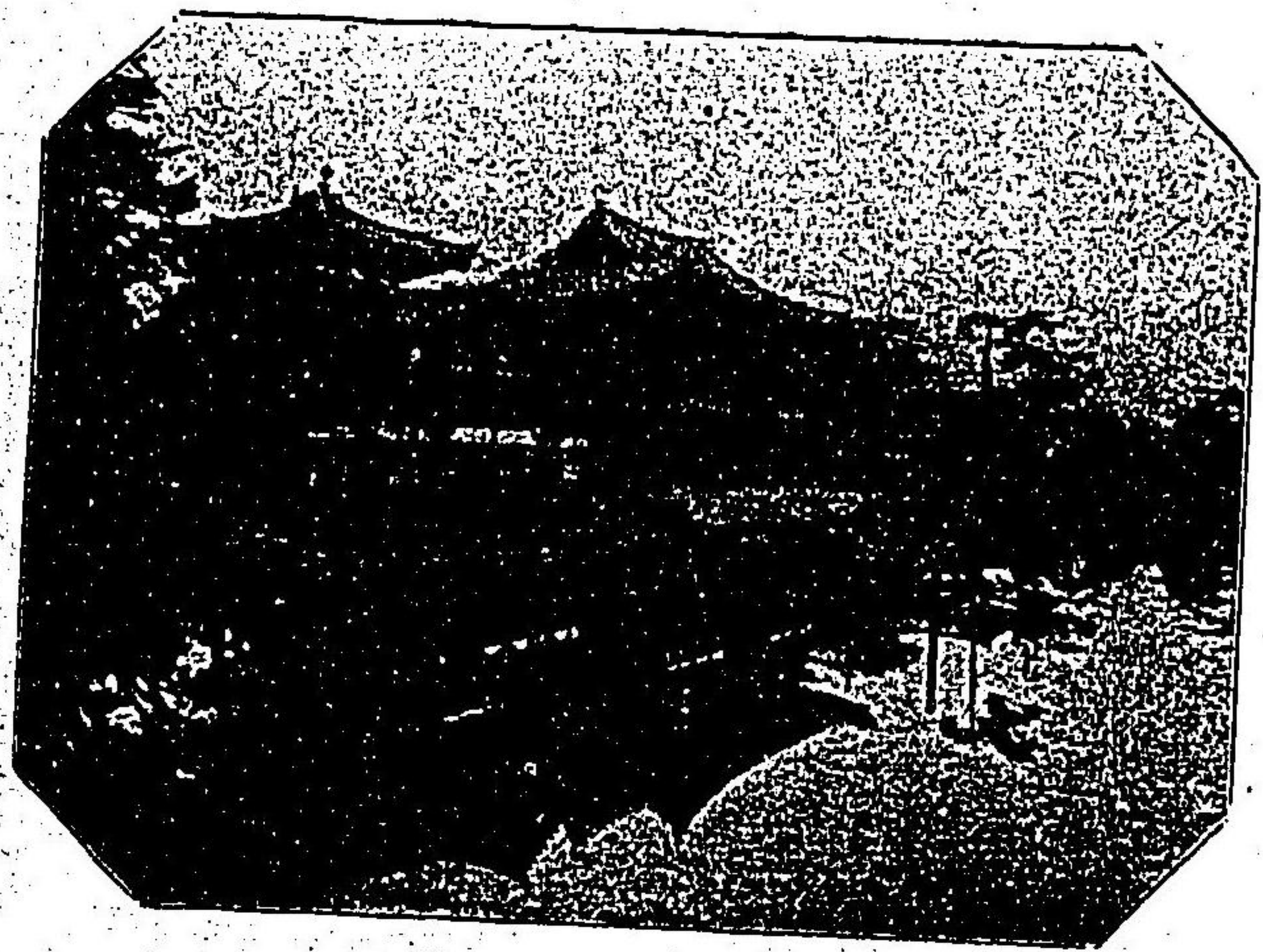
句

佛

**浮島十三塔** 浮島は一名塔ヶ島と云ひ、平等院前の川中に在る一小島あり、長さ四十九間、地勢高からざるも、如何なる洪水にてもかくるゝとあしとて浮島の名あり、南都西大寺の開基興聖菩薩宇治橋の廢壞せるを歎きて再興せんとす、水勢急激にして工事甚だ困難あり、興聖龍神の神護を得むとて島中に高さ五丈八尺十三重の石塔を建て、網代禁止の官符を受けて殺生を禁じ、網代を壞ちて之れを島中に埋め、漁人には新に晒布の業を授けたり、塔は寶曆六年洪水の爲め又破壞し、爾來久しく土中に埋没せしを明治四十年有志者等に依つて發掘され、約九千圓の建設費を投じて翌年十月今の所に建立せり、蘆荻簇々たる間古色蒼然たる十三塔の聳ゆるは、又宇治の勝地に一異彩を放つものと云ふべし。

**喜撰嶽** 宇治橋の東方五十町、池尾村の附近に在り、山上に喜撰法師の隠れ棲みきといふ洞窟あり、世に喜撰の洞と云ふ。

我庵は都のたつみ鹿ろ住む



鳳 凰 堂

世をうし山と人はいふあり  
一首人口に膾炙する所あり。

九六

**平等院** 宇治橋の南約二町、宇治川の清流の東に汪洋たり、始め左大臣源融の別業たりしが、後後陽成、宇多、朱雀の三上皇の離宮となり、更に左大臣源雅信の別墅とありしを、藤原道長請ふて別業とし、次いで宇治關白頼通に傳へ、頼通出家の後寂覺と號し、別業を寺とし平等院と名づけ、別に鳳凰堂を建立せり。

**鳳凰堂** 鳳凰堂は永承七年の造營にして、丈六阿彌陀如來の座像を安置し、四方の梁には五十二佛樂器を奏して紫雲に乗れる像を置

く、四壁の釋迦八相及び淨土九品の圖は安麻爲成の筆、色紙の觀音經九品門は堀川左大臣俊房の筆あり、結構壯麗にして丹碧燦爛、鳳凰の兩翼を張りたるに象りたるものにて、この世をば我世と思ふ望月の欠けたることのためしからねばと詠じたる藤原氏全盛時代の遺物として日本美術界の誇とする所あり、年を経ること實に八百六十餘年、今は特別保護建造物に編入せられ、猥りに内部の拜觀を許さず、堂前に阿字の池あり、藍靛の水、藻の花を漂はせて、廊影逆に映す、境内の鐘樓は治承三年の建設にかゝり、古色蒼然として今將に傾かんとす、鐘は日本三名鐘の一、無銘あれども頗る雅致あり。**鳳の芝** 平等院釣殿の傍に在り、治承三年源三位頼政戦ひ敗れて後、自殺せし所あり、傍に頼政の鐵掛松、駒繫松等あり、頼政の墓は宇治町の最勝院境内にあり、近世大河内信古修理を加へて石輪塔を建立せり。

**淨土院** 淨土宗にして本尊は阿彌陀如來あり、明應二年開基榮久上人、平等院の廢頽を憂ひ近衛家に請ふて修繕せり、門内に河原左大臣融遺愛の絲垂櫻あり、本堂には春日作阿彌陀佛、善導作腹帶阿彌陀佛、定朝作帝釋四天王、惠心僧都の觀世音立像及

九七

頼通の木像等あり、什寶には頼政自筆の朗詠、左大辨行隆筆の頼政畫像、古朝日燒柴舟香爐、高倉宮の胸當、頼政の革頭巾、甲冑、篲、竿、弓、鞍等を所藏し、ろゝろに當年の感を深からしむ。

縣神社 縣神社は平等院の東に隣り、木花咲耶媛このはなさくやひめを祭る、古は弓削道鏡を祭りたりと云ふ、名高き宇治の縣祭は年々六月五日に執行し、深夜燈火を滅して渡御あり、此の近郷近在は云ふまでも遠く京阪神地方よりの參詣者群集す。

木幡里 木幡は伏見桃山の東、堀内村の地續きにて今は木幡村と稱す、北は深草を限り南は宇治川に達せり、古歌に詠せられたる木幡の山は佛國寺の邊ありしと覺ゆ、宇治巨幡の陵墓とて昔は藤原氏の墓地たりしあり、此の里は宇治より京都に通ふ街道にあたり、旅人に馬を賃して渡世する者多く木幡の馬借とは古名物の一として人の知る所あり。

○

山城のこはたの里に馬はあれと

柿本人麿

かちよりり行く君を思へは

○

藤原爲家

かち人の間はぬ夜寒にまちかねて

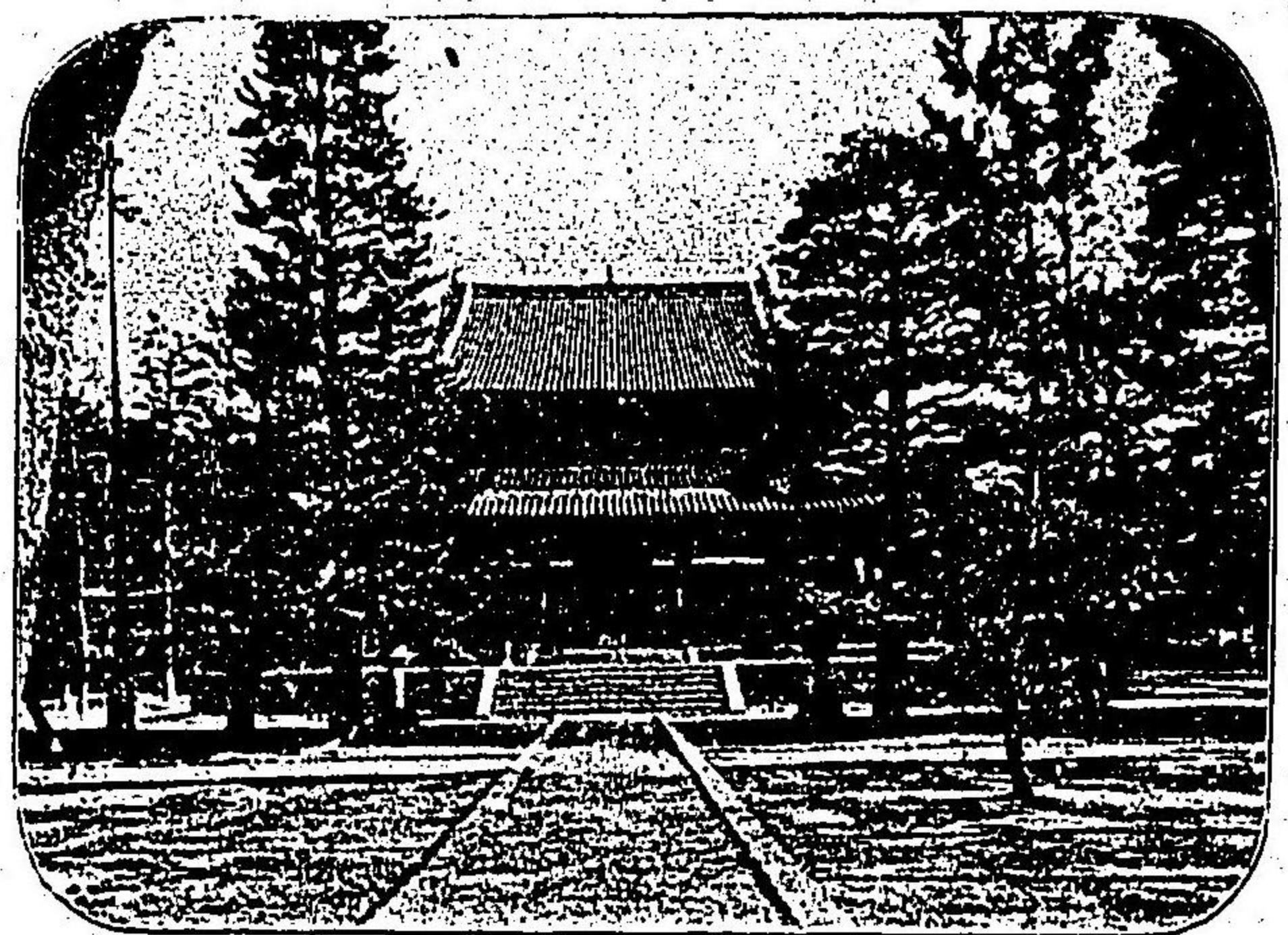
木幡の里はころも打つあり

木幡の關所は六地藏の北、城山の舊道に在り、昔は此處にて京師への出入を取調べたるものにて、關守の家は今尙りの跡を存す。

巨幡陵 六地藏村の西部字金塚に在り、塚の上に五輪石塔を置く、桓武天皇第四の皇子伊豫親王の御墓あり、親王管絃の道に秀で給ひ、父天皇の御寵愛淺からざりしが大同二年藤原宗成、親王に勸めて密かに不企を圖る、親王從ひ給はずして情を天皇に奏す、宗成捕はれて親王の首謀たる如く誣ゆ、天皇これを信じ給ひ遂に御母と共に河原寺の一室に幽閉せり、親王の冤を雪ぎ給はず自ら藥を仰いで薨す、巨幡の陵は星霜長々に此の皇室の悲劇を語る。

宇治陵 世に宇治陵と稱するもの四あり、一は醍醐天皇の中宮藤原穩子の墓にして

木幡村の南部大路の東茶園の内に在る五輪塔をいふ、穩子は基經の四女、延喜元年女御とあり、文献太子、朱雀天皇、村上天皇、康子内親王を生む、延長元年皇后の宣下あり、村上天皇即位の時尊んで太后と號し奉る、天曆八年崩御、二は後三條天皇の皇后藤原茂子の墓にして木幡村の東北字神山に在る一墓の古墳あり、茂子は滋の井女御と申し、中納言公成の女、頗る容色の聞に高く、白河天皇の御母に在します、康平五年崩御、三は藤原昭宣の墓、世に狐塚と稱し木幡村東北の一丘に在り、昭宣は堀川大臣藤原基經の事あり、陽成天皇御幼冲にして位を踐み給ひてより、基經萬機を攝政して太政大臣に任せらる、天皇長して失政あり、基經これを憂ひ遂に帝位を廢して光孝天皇を立つ、新天皇即ち基經の勳功を嘉みし、特に禮遇を賜ふて輦車宮中に入るを許し給ひ、基經の權威益々振ふ、四は昭宣の嫡子贈太政大臣正一位藤原時平の墓、木幡村の北方字三十番神の竹林に在り、墓上一巨石を置く、時平は父基經の餘光をもつて年少にして早く高位高官に上り、權大納言菅原道真と共に政を執り、遂に左大將左大臣に進む、延喜元年道真右大臣とあり頗る輿望あり、宇多天皇夙に藤原氏の專横を憎み、密か



に道真をして藤原氏の權勢を抑壓せしめんとの御志あり、時平聞いて平からず、遂に讒言を構へて道真を陥れ、道真筑紫に左遷さるゝに及び權勢又藤原氏に歸す、延喜七年三十九歳にて薨去し、正一位太政大臣を贈らる、三代實錄五十卷、延喜格十卷の選あり。

山 藥 黄

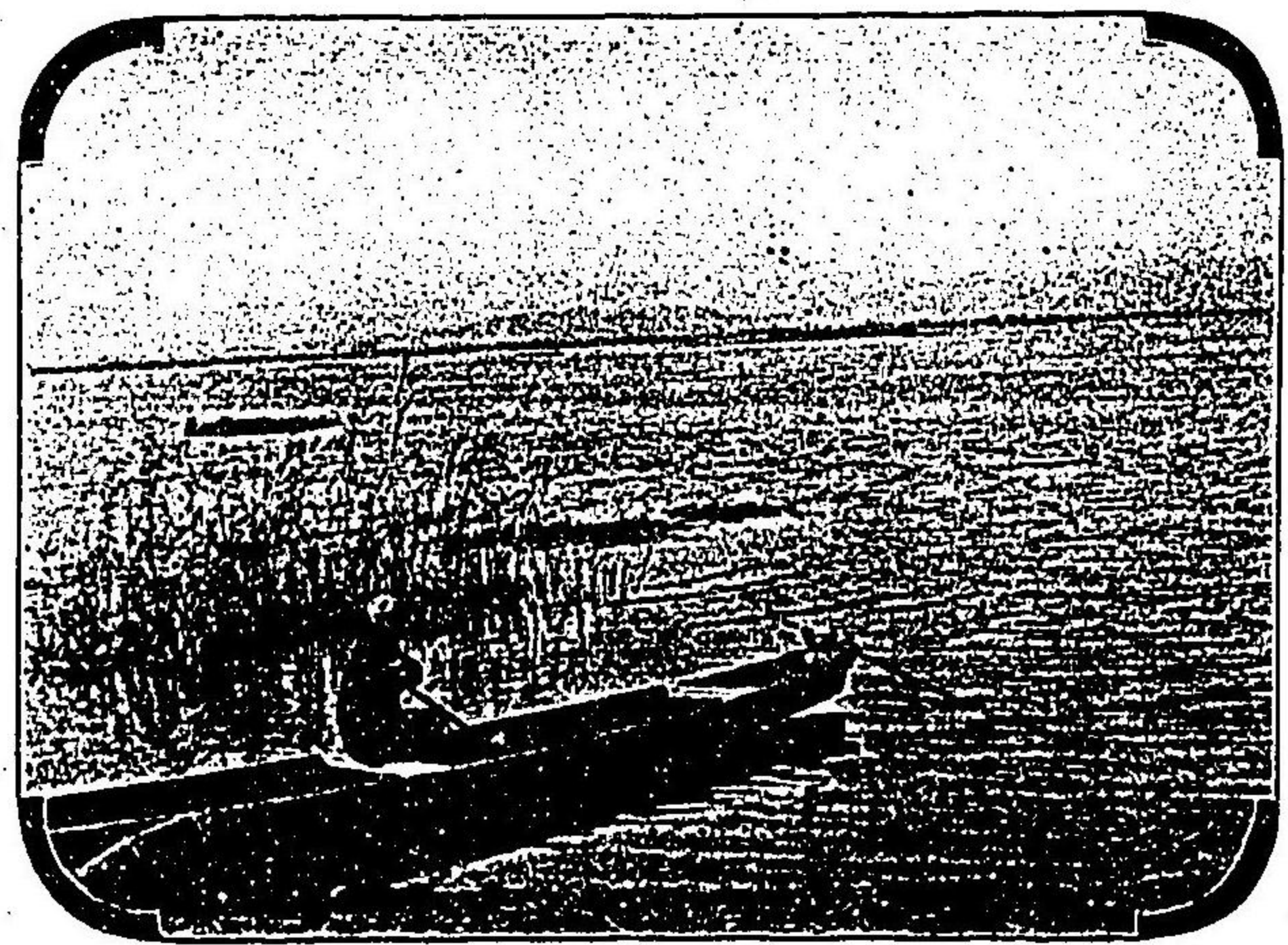
黄檗山 伏見町より宇治に達する街道、約十六町の北方林篁の開く所透迤たる粉壁樓閣を見る、これ有名ある黄檗山萬福寺あり、隱元禪師の開基にして堂塔伽藍は萬治三年の建立あり、寺域甚だ幽邃にして閑寂、長松垂蘿を纏ふて亭立し、鮮苔一塵を止めずして列布する所、真に一山の靈場たるを失はず、總門、山門、

本堂總てこれ唐朝の結構を學び、朱門碧閣相接し、白亞丹壁相列あり、ろの莊嚴燦として人目を射るものあり、總門の扁額『第一義』は高泉の筆、山門の『黄葉山』『萬福寺』はいづれも開祖禪師の眞筆にして、天王殿の『天王殿』『威德莊嚴』の二額は木庵、即非の筆蹟あり、ろの他天王殿の東に聳ゆる大雄寶殿には今上陛下御宸筆、『真空』の勅額あり、皆之れ當山の異彩たり、天王殿には韋馱天、布袋和尚、四天王の像を安んじ、大雄寶殿には釋迦佛、伽葉阿難、十六羅漢を奠め費隱禪師筆『獅子吼』の額を掲げたる法堂、鼓堂、祖師堂、選佛堂、開山堂、松陰堂等を有し所藏の什寶又甚だ多し、山内第一門の右に放生池あり、碧水滿々として明鏡を開きたる如く、樹林葉を茂らせて影を落す所、大小の鯉魚淨玻璃を亂して遊ぶ、池の畔松を挾んで數株の櫻樹あり、黄鳥春を囀れば梢頭盡く花を綴り、老幹水に臨むの楓樹、群禽一たび秋を渡れば、滿枝皆錦を織る、黄葉山は如何に自然の景致に富むかを知るべきあり。

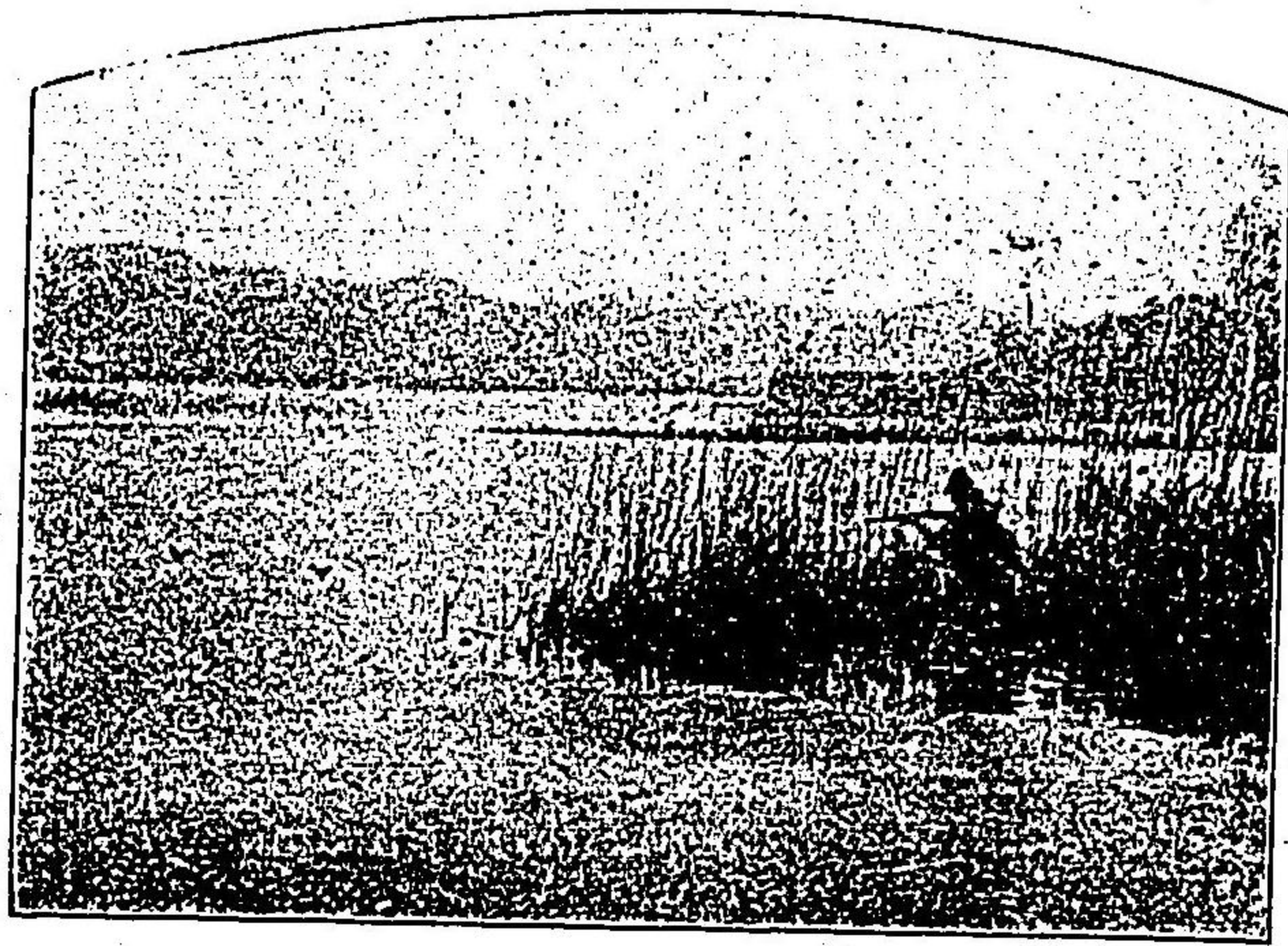
**隱元禪師墓** 黄葉山の境内舍利殿は開祖隱元禪師の遺骸を埋めたる所あり、禪師は明國福州清福の人、諱は隆琦、隱元はろの號あり、將軍家綱豫て禪刹を建立せむとの

志あり、長崎興福寺の僧逸然命を奉じて明國みんこくに入り隱元を招聘す、時に隱元齡既に六十三、はじめ興福寺に法を開き、次いで崇福寺、普門寺等に道場を置きしが、萬治元年江戸に上り將軍家綱に謁して禪を講じ、諸侯群臣の教を受くる者多し、將軍即ち地を宇治に賜ひ、寛文元年五月黄葉山萬福寺を草創し同十三年四月大光普照國師の號を贈られ、八十二歳の高齡をもつて入寂せり。

**巨棕池** 一に大池とも云ふ、東西凡三十二町南北二十七町、周圍三里餘、久世郡小倉村に在り、昔宇治川の流域ここに滙して巨浸とあり、南の方淀川に連りしが、豊公伏見築城



(一其) 池 棕 巨



巨 標 池 (貳其)

の時長堤を築きて湖河を區分し、また觀月橋より南小倉村に至り湖の東部を横斷し、新道を開きたるより湖面は劃して二とある、西部最も潤く、水烟渺茫として風光明媚あり、東部は稍小にして水稍淺く、七八月の候紅蓮白蓮水を抽いて清香を放ち、曉近く裂帛の響を傳へて聞く、小舟を泛べて此の雲錦萬丈の間を過ぐ、恍として別世界に遊ぶの感あるべし、魚鱖の發生頗る多く、鱖釣最も興あり。

### 伏見及深草附近

伏見町 伏見山かと田の霧は夜をこめて枕にちかき鶴の羽かきの國風一首、これ光嚴院

の御製にして當時の伏見を詠ませ給ひしものあり、されば桃山時代より以前の伏見は實に此の御製の如く、鶴の羽音に曉の夢を破られたる閑雅幽靜の一邑たるに過ずして、今の御香の宮附近より京橋のわたりは伏見殿の上御所及下御所に當り、當時の貴顯公卿は此處彼處に山莊を營み、山野水澤の美に憧憬れ給ひしあるべし、殊に船戸村のあたりは伏見津と稱し、水運の便ありたるが故に次第に繁華の地となりたるが如し、その後豊太閤、天下を平定し文祿二年此地に城を築いてより桃山の一廓は忽ち壯大ある城廓となりて鶴の羽音は管絃の聲と化し、諸侯の邸宅甍を列ね、商賈争ふて軒を接するに至り、昨日の寒村は變じて天下政令の中心となりて股脈を極むるに至る、不世出の英雄が一代の豪奢をもつて善盡し美を極めたる聚樂邸の結構は更あり、所謂桃山式の華美ある特色と武勳赫々たる諸侯の妻妾が花見衣裳の美を競ひたる光景を想像せば、當時の伏見は宛然繪巻物を展べたるが如き異觀を呈したるからん、豊公薨去の後慶長五年桃山の落城と、元和五年の廢城とによりさしもの榮華も果敢かき一場の夢物語とありたりたれど、淀川舟楫の要所に當りて有名なる三十石船の發着所として參勤

壞せる當時移したる遺物にして一見して桃山式の華麗にして雄大ある特種の美を發揮せるを知るべし秀吉志成つて後關白を秀次に譲り寵姫淀君及びその生む所の秀頼を此處に移し、又明使を引見して封冊を裂きたるも、慶長三年豊公の薨去せるも此の城あり、慶長五年鳥居元忠徳川氏の爲めに此の城を守り大坂兵と戦ふて討死せし後徳川氏はこれを毀ちて星霜爰に幾百年、舊趾空しく草に委して當時の殘塚僅かにその名殘を止め諸侯の邸宅は空しく田地の小字に呼ばれて古英雄の遺業を吊ふの料たらしむるのみ。

寄 豊 公 舊 宅

絶。海。樓。船。震。大。明。  
千。山。風。雨。晴。々。惡。

寧。知。此。地。長。柴。荆。  
只。作。當。年。叱。咤。聲。

桃山の梅溪

伏見停留所より八町城墟の畑地に梅溪あり、地勢陔陀高低して自ら溪山の趣あり、數千の梅樹槎枒としてその間に滿ち東風一たび枝頭を吹けば芳蕙滿山を歴し實に洛南觀梅の勝地たり。

龍雲寺

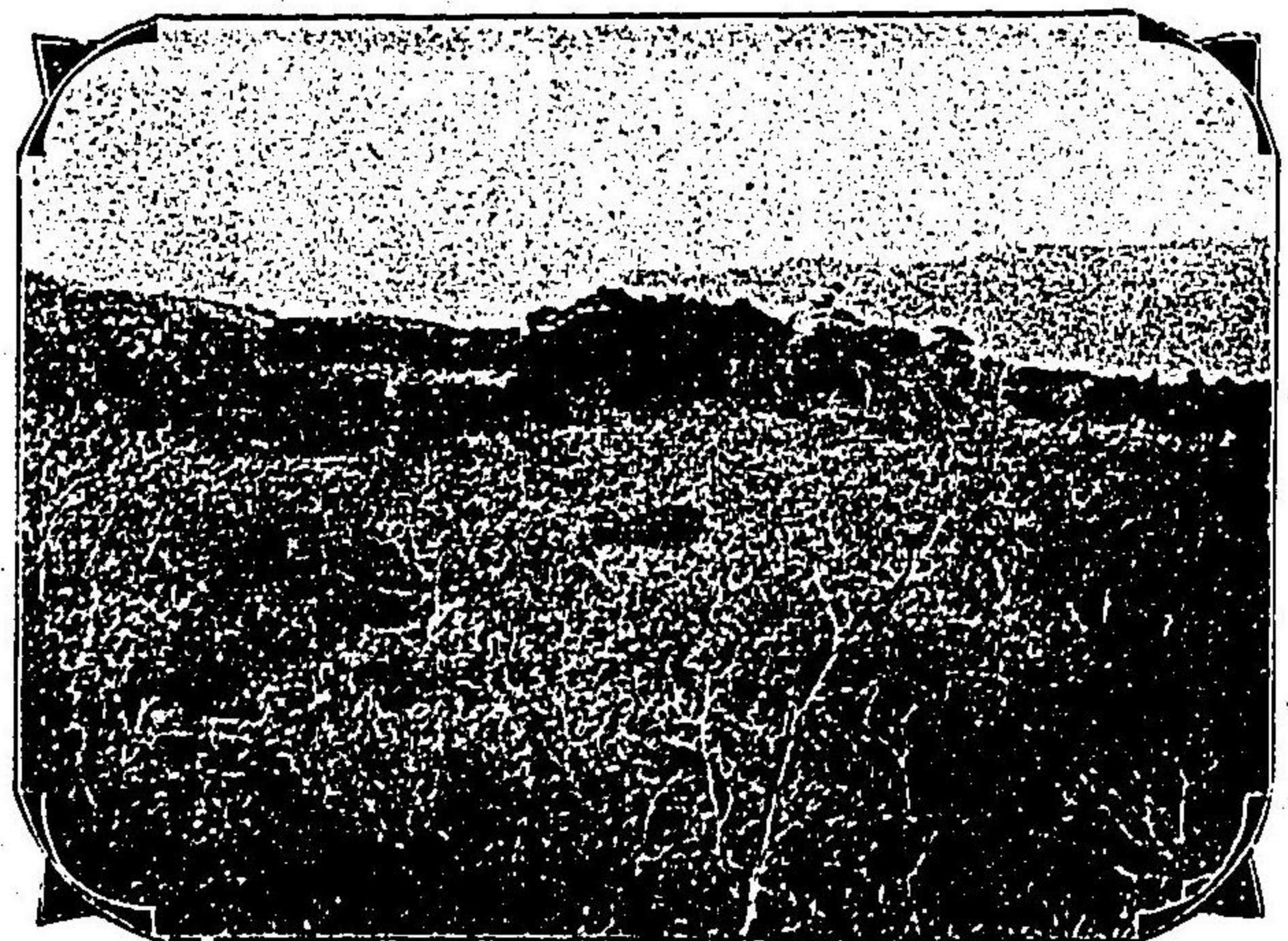
桃山字三河屋根に在り、天台宗にして宇治見山と號す、本尊觀世音は元常憲院殿の持佛ありしを石川備中守拜領して此處に安置す、境内高丘に位し、南は宇治川及び巨椋池の彩波を望み、西に淀、八幡、山崎の翠巒を見る。

桃山天満宮

龍雲寺の西に在り、渡唐天神の像を祭る、明徳年間沙門月溪靈夢を蒙り、應永元年神影を僧忠庵より授かり龍幡山藏光庵に鎮めたるを、文祿三年豊公築城の際藏光庵は嵯峨臨川寺の東に移され、本宮は此處に残されたるあり。

桓武天皇陵

桃山の丘陵、堀内村字堀内に在り、始め深草山柏原に在りしが大同元年水害の



桃山の梅溪

交代の諸侯をはじめ旅客の往來跡を絶たず、維新後交通機關の發達と共に三十石船の一名物を失ひたれども南は宇治の清流を隔て、巨椋の池の水を望み、西は八幡、山崎、淀方面を一陣の裡に收め、醍醐の晩鐘、三室戸の松籟、一として詩情を動かさざるおく、歴代天皇の御陵を拜し桃山城趾に豊公の偉業を忍ぶも優に一日の清遊に適するものあり、人口二十萬、戸數四千、第十九旅團、伏見工兵隊の所在地として亦一都市たるを失はず、旅亭には維新前薩藩浪士の争鬪にて有名なる寺田屋、觀月橋畔の澤文支店等あり。

**伏見殿趾** 軒近き松原山の秋風に夕暮清く月出にけり、斯は伏見院が殿中にての御風懷あり、殿趾は松原山のこなた、御香宮の東南に方り、大明光寺の陵及び月橋院等はうの一部分あり、初め藤原氏長者の領にして頼通の子橋俊綱傳領して山莊とし伏見寺を建立して此處に住めり、平治の戦乱後寺を北石藏に移し、後後白河院、後嵯峨上皇、後深草、龜山等の諸院に傳はり伏見、後伏見二院の御所とされり、花園天皇御即位の時此の地を擧げて寺院に賜ひたり、大光寺、光嚴院、般舟院、指月庵等は皆此の舊

伏見御所の趾かりと申す。

**伏見山** 今の堀内村にして、東は木幡を限り西は伏見に接す、舊桃山城及びうの西外廓の區域に當れり、南麓には宇治の清流虹の如く横はり、岸を隔て、白蓮水に開く巨椋の池あり、桃あり満山に開き、梅あり溪谷を埋めたるは昔の事かれども、うの眺望の秀麗ある今も尙變らず。

伏見山裙野をかけて見渡せば

春野に下す宇治の柴舟

とは永福門院の内侍が當時の伏見山を詠じたるあり、芭蕉又句あり。

我衣に伏見の桃の甲せよ

**伏見城趾** 伏見城一に桃山城とも稱へ、文祿三年豊臣秀吉の築く所あり、工役二十四萬人、塹溝を穿ち壘壁を設け、山を築き谷を拓き、其規模の大、結構の美、眞に宇内に冠絶し、現に西本願寺の飛雲閣、浪の間、客殿、豊國神社の唐門、江州竹生島の觀音堂、都久夫須麻神社拜殿、大福寺唐門、及び御香宮唐門等は徳川氏が伏見城を破



壊せる當時移したる遺物にして一見して桃山式の華麗にして雄大なる特種の美を發揮せるを知るべし秀吉志成つて後關白を秀次に譲り寵姫淀君及びその生む所の秀頼を此處に移し、又明使を引見して封冊を裂きたるも、慶長三年豊公の薨去せるも此の城あり、慶長五年鳥居元忠徳川氏の爲めに此の城を守り大阪兵と戦ふて討死せし後徳川氏はこれを毀ちて星霜爰に幾百年、舊趾空しく草に委して當時の殘穢僅かにその名殘を止め諸侯の邸宅は空しく田地の小字に呼ばれて古英雄の遺業を吊ふの料たらしむるのみ。

寄 豊 公 舊 宅

絶 海 樓 船 震 大 明

千 山 風 雨 晴 々 惡

物 徂 徠  
寧 知 此 地 長 柴 荆  
只 作 當 年 叱 咤 聲

桃山の梅溪

伏見停留所より八町城墟の畑地に梅溪あり、地勢陔陀高低して自ら溪山の趣あり、數千の梅樹槎枒としてその間に滿ち東風一たび枝頭を吹けば芳薰滿山を歴し實に洛南觀梅の勝地たり。

龍雲寺

桃山字三河屋根に在り、天台宗にして宇治見山と號す、本尊觀世音は元常憲院殿の持佛ありしを石川備中守拜領して此處に安置す、境内高丘に位し、南は宇治川及び巨椋池の彩波を望み、西に淀、八幡、山崎の翠巒を見る。

桃山天満宮

龍雲寺の西に在り、渡唐天神の像を祭る、明徳年間沙門月溪靈夢を蒙り、應永元年神影を僧忠庵より授かり龍幡山藏光庵に鎮めたるを、文祿三年豊公築城の際藏光庵は嵯峨臨川寺の東に移され、本宮は此處に残されたるあり。

桓武天皇陵

桃山の丘陵、堀内村字堀内に在り、始め深草山柏原に在りしが大同元年水害の



桃 山 の 梅 溪



御香宮

爲め伏見山松原に遷しまゐらせしを、その後明治十三年に至り古城を發見して地を此處に定め帝陵の標を建つ、御陵の地域は若松翠の色濃かに鮮苔風清ふして四邊甚だ静あり、天皇都を平安に奠め給ひてより爰に一千有餘年、今の京都市繁榮の基礎を開き給ふ、洵に畏き極みと申すべし。

御香宮 桃山の西南端、伏見停留場より二町、神功皇后外八柱の神を祭る、清和天皇貞觀四年境内より香水涌出せしより勅して御香宮と稱せられ、神領を賜ひ社殿の改築あり、後宇多天皇弘安三年元寇討平祈願の爲め天皇親しく行幸あり、康安元年大地震の爲め社殿

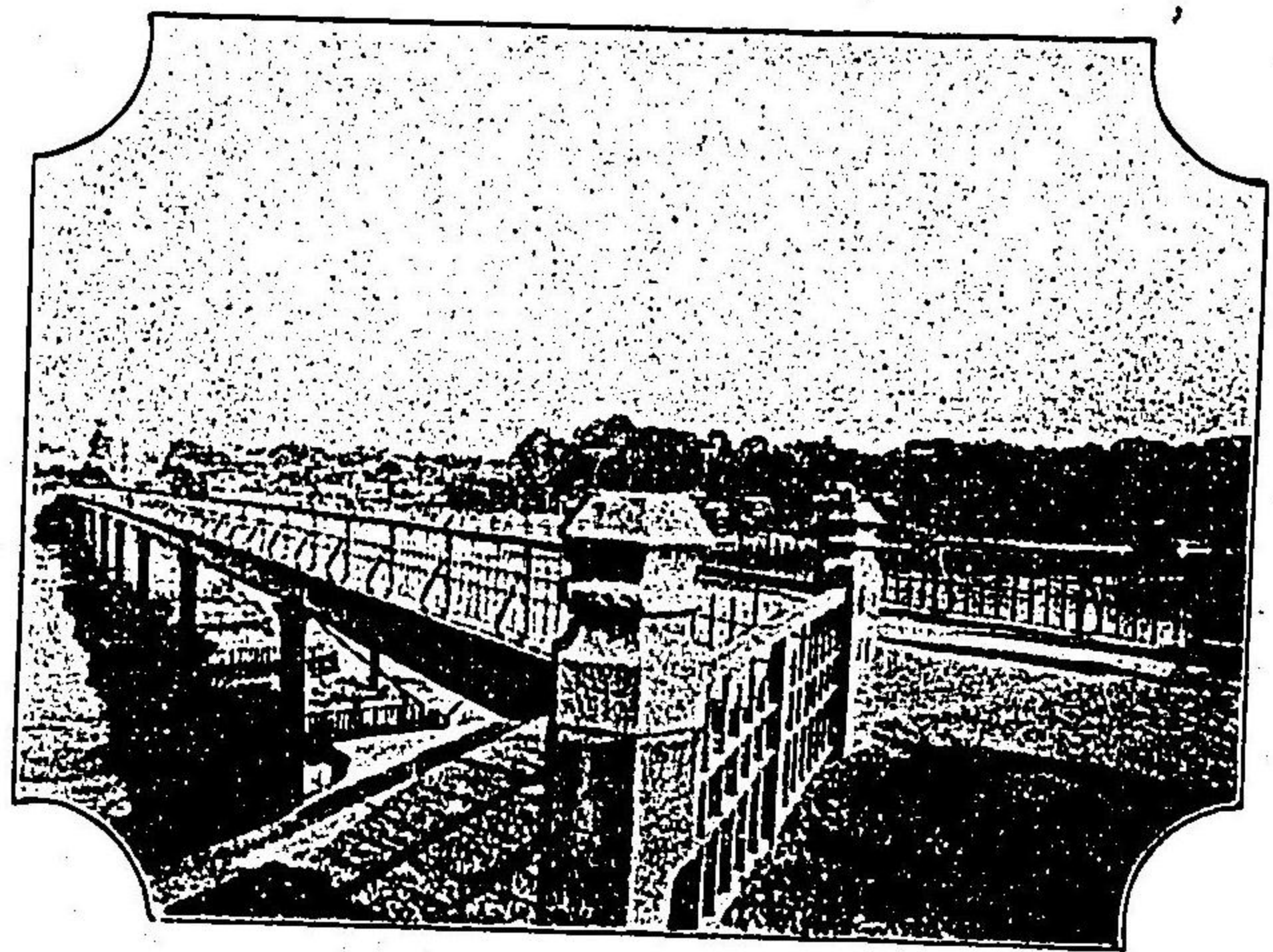
太く破壊せるを時の將軍足利義詮勅を奉じて修理を加へ、後應仁の乱兵燹に罹り殿樓盡く烏有に歸し里人僅かに小社を營みて奉祀し來りしが天正十八年秀吉社參し太刀を捧げて征韓軍の凱旋を祈り、桃山築城の際大龜谷に移して伏見鎮護の神と崇めたり、斯て慶長十年家康水戸、尾張、紀伊の三家に命じて舊跡に復し新に今の社殿を造營せしめたり、結構壯麗にして社頭の樓門は金碧燦然として人目を眩す、有名ある御香の水は華表の傍に在り、近年境内の一部を割きて公園地とし、櫻及び楓等を植へ四時遊覽の設備あり。

伏見義民碑 伏見の義民文珠九助の碑は御香宮境内にあり、伏見奉行小堀遠州の裔和泉守政方、放縱にして食戾治下の民之れに困憊す、天明五年伏見の商賈文珠九助之れを憂ふるの餘り一身を抛ちて萬民に代り、單身江戸に上りて政方の暴狀を幕府に訴ふ、時の執權松平定信訟を聽きて獄を起し、政方遂に罪に伏して職を罷らる、士民大に九助の義を徳とす、九助の半生は實に下總左倉の木内總五郎と好一對の義民傳あり。

觀月橋 宇治川の清流碧玉を溶いて伏見町に通ずる所一橋長く虹の如く横はる、こ

れが伏見の觀月橋あり、豊臣全盛の當時の  
袂に大友豊後守の邸宅を構へたるより豊後橋  
と稱せられ皎月宇治山の巔を照らして餘光を  
水の流れに亂す所の情景云ふべからずとて  
いつしか觀月橋と呼ばるゝに至りたるあり。

**三夜の莊** 西本願寺の別莊にして桃山東南  
の裾に在り、宇治川の下を流れて無絃の琴  
を弾じ、巨椋の池は明鏡を開くが如く眼底に  
映じ來るの風光を見るべし、若し夫れ月明の  
夜簾を捲いて杯を擧ぐれば一碧空中の月、落  
ちて杯中に影を宿し、更に一翠帶の如き宇治  
川の水に影の浮ぶを見る、三夜の莊の名蓋し  
依る所あるを知るべし。



橋 月 觀

**指月庵** 指月庵は元四月庵と書し、江戸町以西の丘上森の蔭に在り、三夜の莊の景  
と情とに併すに、實に彩波晃々たる巨椋の池の月を以つてし、一夜に四の月を觀るべ  
しとて四月庵と稱し、また豊公此の庵に茶を啜りて月を指したるより指月庵と名づけ  
たりとも傳へらる、昔は此のあたりに月見殿の在りし所とて總て月見ヶ岡の名あり、  
又宇治の民家より立昇る炊煙をも見ゆるが故に宇治見山とも云ふとかや。

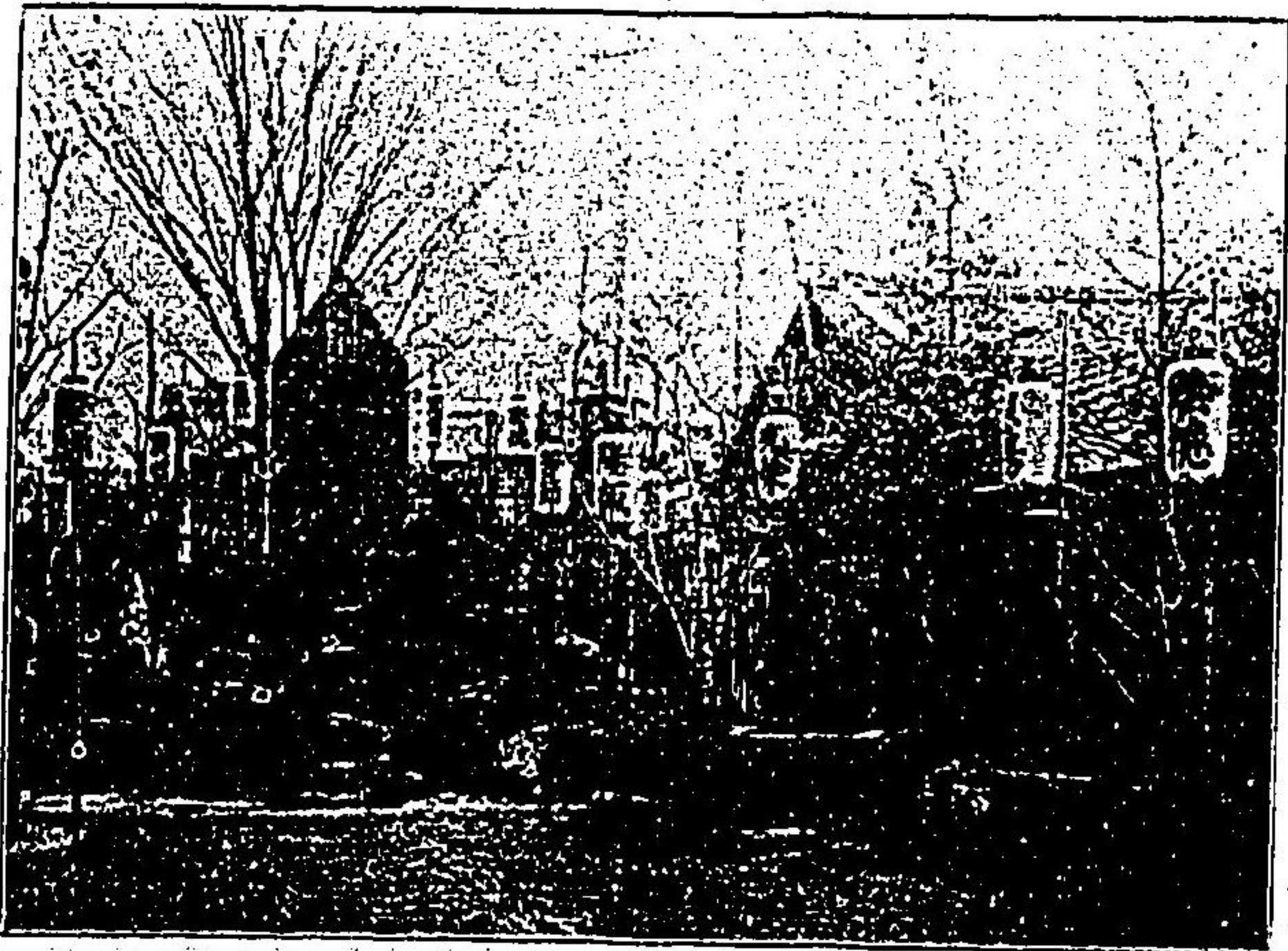
**船戸御所趾** 船戸は京橋附近の地を云ふ、船戸御所は伏見殿の一部にして下御所と  
申し、今の材木濱町松林寺の邊は舊趾あり、弘安元年後深草天皇秋山の景色を御  
覽あらせられんとて妃を伴はせて行幸あり、伏見津に出でさせ給ひて鵜船の御慰みあ  
り、白拍子どもを召されて歌おと謡はせ給ひたりと舊記に見ゆ、されば船戸は中世よ  
り泊舟の津として早くより發達し、その頃より白拍子遊女おと住みて廓の形を爲しつ  
ゝありしと思ゆ、『住吉物語』に遊び女ども舟に集ひてとか、『選集抄』に旅人の往來の  
舟を慕ふ遊女おと記されたるを見るべし。

**京 橋** 伏見町の南端、中書嶋停留所より二町の所に在り、高瀬川京都より流れ

て此處にて宇治川の本流に合し、流れくゝて大阪市に貫通せるをもつて淀川運漕の埠頭として世に知られ、特に維新以前までは三十石船の發着所として西國諸侯の江戸參勤交代の運送に、當時繁華の中心點たりしあり。

**中書島** 文祿年中向島に壘を築くところなるは此の中書島の事かれ今は遊廓地たり、伏見城の廢滅と共に久しく荒蕪の地たりしを徳川氏中世の頃此地に遊女を許し、後林豊後守伏見奉行とありて一旦停止せしも、内藤豊後守の職を襲ふて再び之れを許したり、紅燈影華やかに絃聲水に響く所又一種の情趣ありとせす。

**寺田屋** 寺田屋騒動とて有名なる寺田屋は京橋の畔ほとりに在り、文久二年四月薩摩藩の志士有馬新七外八名が藩侯の鎮撫使と議合はず白刃を交へて奮死せる所あり庭内志士殉難の碑あり先代伊助の妻とせ亦頗る義氣に富み土佐の藩士阪本龍馬夙に勤王の大義を唱へて密かに天下の志士と往來し屢々京都に出入し幕府の忌避に觸れて警吏の物色する所とあるやとせ身を以つて龍馬を庇護し常に此の奥座敷せきまに潛伏して事を計る、一日同志中岡慎太郎と共に捕吏の襲ふ所とあり龍馬身を以つて遁るゝを得たり、日露開



志士殉難の碑

戦に先つ一日龍馬の誠忠 皇后陛下の御夢に入り此の役皇軍の必捷を奏上するや 皇后特に龍馬の事蹟を御下問あらせ給ひ且つ香川皇后太夫に御内旨を傳へ給ひて龍馬と關係淺からざる寺田屋の現主伊助に金若干を下賜せらる、伊助感激措く能はず此の至深至大の光榮を長く子孫に記念せむため志士殉難の碑の傍に更に恩賜紀念の碑を樹つ、所藏の阪本龍馬及び有馬新七の遺墨、龍馬遺物の刀の鏢つば、新七殉難當時の遺物鎗の穂先等は史家の最も珍重する所あり。

**大黒寺** 字鷹匠町に在り、圓通山と號し眞言宗にして弘法大師の開基あり、元長福寺と

稱したるを元和元年伏見奉行山口駿河守薩藩島津侯の命を傳へ武運長久の祈願所と定め大黒寺と改稱す、王政維新の際西郷隆盛を初め薩藩の志士相集りて天下の大事を議するに多く此の寺を用ひ今も尙島津藩侯及び西郷等の會したる一室を有す、境内には寺田屋殉難の志士有馬新七以下八名の墓碑あり。

**墨染樓** 墨染停留所の傍に在り、此の地は清和天皇御降誕の初め大相國忠仁に御沙汰ありて草創せる貞觀寺の趾あり、その後久しく荒廢せるを權大僧都日秀、秀吉の知遇を受けろの命に依り中興し征韓役の當時祈願所とあり領一千石を受く、當時は堂宇輪奐の美を極めしも爾來年と共に荒廢し今は昔の名残をも止めず、纒かに寺院の形を存するのみ、境内の鬼子母神社は昔より參詣者絶ゆる時かし、又堀川太政大臣昭宣公の墓あり、公は寛永三年此處に薨去せらる、上野岑雄哀悼のあまり、

深草の野邊の櫻し心あらは

ことしはかりは墨染に咲け

と詠じたるより、境内の櫻盡く淡墨色の花を開きたりとして、後世墨染櫻と云ふ、され

ど今はりの老幹古木をも留めず。

**那須與一の塚** 壽永の昔屋島の戦ひに扇の的を射て弓矢の譽れを得たる一代の風流兒那須與一宗高の古墳は即成就院の境内に在り、宗高出陣に際し即成就院に祈願を凝め、武運目出度く凱旋の曉は堂宇を修營し、願望成就の奇特を庶人に知らしむべしとて出で、本尊阿彌陀如來、弓矢八幡の加護を受けて天晴れ武門の譽れを博したりとて凱陣の後堂宇を修營せりと傳へらる。

**久米仙人の舊趾** 女の脛はざの白きを見て通力を失ひ天上より墮落したりとの傳説を有する久米の仙人は元即成就院の僧侶ありしが、仙術の修業に志し御香の宮のほとりに仙居し、米麥火食を斷ちて白菊を常食とし、専ら修業の効を積み、遂に變通自在の術を得、天大寶を降す、これが白菊の石とて御香の宮の傍に在る物あり、近年地方の有志相議して一碑を建て、東久世通禧伯の國風一首を刻す。

仙人の昔のあさは白菊の

千代のかほりに残りけるかか

**撞木町** 伏見町大字撞木は昔の遊廓として名高き撞木町あり、元祿十四年播州赤穂城主淺野内匠守長矩殿中松の廊下にて吉良上野介義央に刃傷あり、長矩罪をもつて切腹仰付られ家名斷絶せるを、國老大石内藏助長雄等何卒して亡君長矩の遺恨を酬むんと日夜仇敵吉良家を窺ふと雖も、義央密かにうれと察し、俄かに牆門を固めて出入を嚴にし、多くの劍客浪士を集めて萬一の變に備ふ、長雄謀を運らせ、故らに身を放蕩に扮つし屢々遊里に出入し、夜々狂態痴狀を演じて復讐の念おきを示し、もつて敵に油断せしめむとす、撞木町は即ち當時長雄が山科の浪宅より屢々出入せる遊里にして、當時紅欄軒を列ねて粉黛を粧ひたる妓女が一笑の媚びに朝に吳客を送り、夕に越人を迎へしかるべし、今は著しく荒廢して、僅かに一二の娼家を存して當年の名残を留むるのみ。

**藤森神社** 伏見街道墨染の北に樹木鬱蒼せる神境あり、藤ヶ森と稱し藤森神社鎮座の處あり、本殿には鳴別雷命、神功皇后の二柱を祭り、東殿に舍人親王、天武天皇、西殿に井上親王、相殿に素盞盛命、日本武尊、應神天皇、仁德天皇、武内宿禰の五座



を祀る、創立の年代詳からざれど、古來軍の神として歴代天皇の御信仰あり、東殿に祀れる舍人親王は天武天皇の王子にして、天應元年蒙古來寇の風聞あり、天皇王子に詔して寇退治の宣旨を賜はる、親王出陣に臨み此の社に戦勝を祈願せるが、果して神威あらたかに暴風を起し蒙古の軍船盡く難破して自ら亡ぶ、親王の出陣の五月五日をもつて毎年祭禮を執行し、渡御の列は總て軍隊に象り、皆武裝して供奉するの例あり、世に藤森の軍裝祭といひ、古より傳へ來りしが近年に至りて祭典を六月五日に改めたり、境内東方の大樹の下神功皇后三韓征伐の後軍旗を埋めたりと云ふ旗塚及び蒙古軍襲來の時、その將帥の首

を埋めたりと稱する七個の蒙古塚あり、側に年古りたる藤樹あり、春光冷く此の神境を訪ぶるに及び紫房三尺垂々として濃艶の粧ひを凝らす、傍に一碑あり。

一一〇

○ 小侍 従  
むらさきの雲とよりよに見へつるは

木高き藤の森にありける

伏見街道

豊公伏見在城の時新に道を開きたるものにして昔は稍東方に在りたり、泉福寺の馬場前より東福寺を経て稻荷の樓門前、寶塔寺池の端、極樂寺村等に大和大路の舊趾を存す、現は東福寺の門前北の端に一の橋、その南方に二の橋あり。

むら時雨一二の橋の竹笠屋

荷

分

子規一二の橋の夜明かか

其

角

等は人の知る所あり。

稻荷神社

官幣大社稻荷神社は深草村稻荷山の麓に鎮座す、稻荷新道停留所より三町、和銅二年始めて三ヶ峰に現座し給ひしを永享十年正月足利義教祈願に依り遷座せ

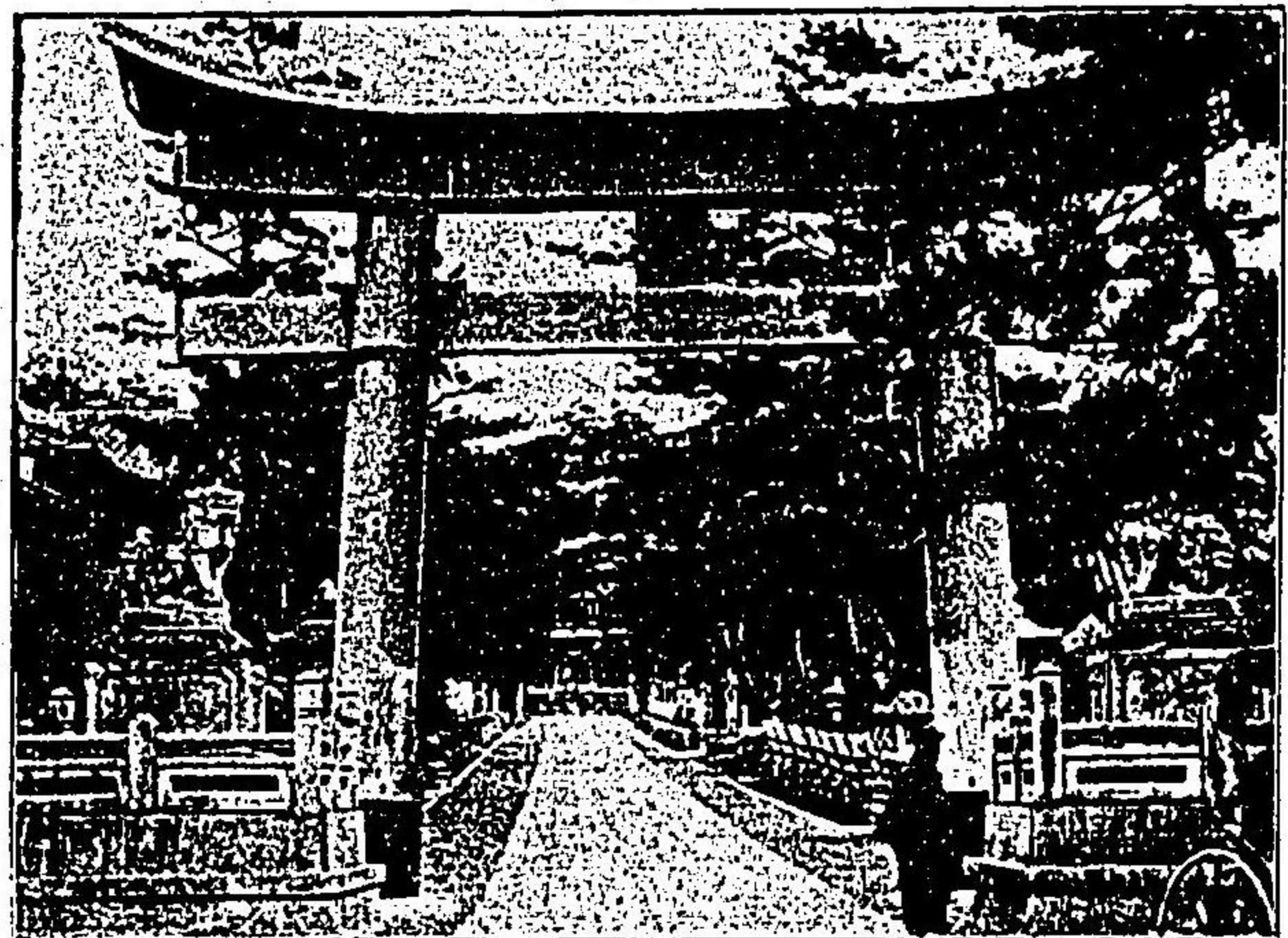


表 華 社 神 荷 稻

りと傳へ宇迦之御魂大神、佐田彦大神、能賣大神の三柱を祀きまつる、淳和天皇天長四年詔して従五位下の神階を授け給ひてより後代に至りて屢々位階昇叙の御沙汰あり、朱雀天皇天慶五年正一位に進められたり、文徳天皇仁壽二年の秋奉幣祈雨の御願ありてより、毎年五穀豊穰を祈られ、後三條天皇延久三年三月行幸の御事ありてより、白河、堀川、鳥羽、崇徳、近衛、二條、後鳥羽、土御門、順徳、後深草の天皇上皇等の行幸、參籠ありて歴代の御崇敬淺からず、明治九年十二月十九日には皇后陛下の行啓あり、社殿は延喜八年藤原時平の修造、文治八年將軍足利義教の造營等

一一一

より成りしが、應仁二年兵燹に罹りてより暫らく假殿を營みたるに過ぎざりしが、天正十七年豊太閣新にこれを造營し、殿堂、樓門、臺を列ね、朱欄碧瓦燦爛として壯麗を極めたり、今の本殿これあり、毎年二の午の日を期し、壯嚴なる神幸の式祭あり、昔は勅裁祭と稱し、綸旨を奉戴せるが應仁の兵亂以後久しく中絶せるを安永三年正月勅許を蒙りて再興し、神寶什器等新に調へ、鹵簿の壯觀初めて舊に復せしが明治六年に至りて勅裁を廢せられ、爾來稻荷祭又は氏子祭と稱し毎年四月二の午祭典を執行することよかれり、初午詣は元明天皇和銅四年二月五穀豊稷の靈驗著しとて都鄙



稻荷神社前

遠近の別なく參詣せるより初まり、毎年此の日を期して參詣者群をかし、今は農作の豊稷、商業の繁昌を祈るもの益々多きを加へ、當日験の杉と稱へて山上の杉の枝を折りて家に歸り、崇めまつること古歌に見へ今も尙此の事絶わす。

○ 二月やけふ初午のしるしとて

いかりの杉はもとつ葉もあし

光

俊

深草郷 深草郷は今の深草村大字深草あり、古來詩人の風懷に入りたる深草の里は今の稻荷町、稻荷村及び京都東福寺より大龜谷村一帶の地を總稱せるものあり。

○

後鳥羽天皇

深草やあかつき寒く吹く風に

いとと身にしむきりくすかゝ

○

源通具

深草の里の月影さひしさも



住こしまゝの野邊の秋風

鶉の床 深草村の古名所にして竹の葉山の邊あり、鶉の床とは深草の野の叢に鶉の多く群りて巢を營みしが特に竹の葉山のあたりに多かりけるより、自ら鶉の名所として知らるゝに至りしあり。

○

夕されは野邊の秋風身にしみて

俊

成

鶉鳴くあり深草の里

○

深草や鶉の床に跡たわて

後京極攝政

春の里とふ鶉の聲

深草十二陵 深草村大字深草法華堂に在り、世に深草法華堂陵と稱し、後深草、伏見、後伏見、後光嚴、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成の十二帝陵あり。

瑞光寺

深草村字極樂寺に在り、本尊は長六尺の釋迦佛あり、明暦元年日蓮宗の高僧元政上人の草創にして法華の道場たり、上人姓は菅原、俗稱石井吉兵衛と稱し、又通稱常右衛門と云へり、彦根藩主井伊直孝に仕へて江戸に勤む、當時嬌名一代を歴したる吉原三浦屋の遊女二代目高尾と情交あり、その艶福頗る高し、奥州仙臺の城主伊達綱宗高尾の嬌名を聞き、黄白を積んで枕席に侍せしめんとすれど、高尾情人を憚りて肯せず、自ら及に伏して死す、常右衛門即ち井伊家を辭し世を遁れて日豊上人に仕へて佛門に入り、元政と號す、博覽強記にして精力凡を超へ、最も詩歌に秀でたり、後居を深草に卜し瑞光寺を創いて持戒甚だ嚴あり、寛文八年二月『深草の元政坊主死ぬらうか、我身ながらも哀れありけり』の辭世を遺して入寂す、境内三本竹の墓は即ち上人の墳塋ありといふ。

寶塔寺

草深山寶塔寺は瑞光寺の北に在り、釋迦、多寶の二尊及び宗祖日蓮上人の像を安置す、境内の寶塔は日蓮上人の手蹟南無妙法蓮華經を刻したるものにて、その下には日蓮、日調両上人の遺骨を收めたりと傳ふ、有名なる日蓮說法石は釋迦千駄堂

の内在り、境外七面明神の社あり、華表の額は元政上人の筆ありと云ふ。

深草陵 仁明天皇の御陵あり、世に東車塚と稱し深草大字伊達町に在り、天皇御名は正良、世に深草帝と申し奉る、嵯峨天皇第三皇子にして御母は桓林皇后橘嘉智子、天長十年三月淳和天皇の禪を承け位を踐み給ふ、在位十七年嘉祥三年聖壽四十一にして崩御、天皇聰明にして諸藝に通じ、就中歴史に通じ給ひ文藻亦豊富によしくぬと。少將小町の塚 深草の百夜通ひにはかき戀の浮名を後世に遺したる深草少將、小野小町の塚は深草欣淨寺の堂後に在り、欣淨寺は元少將の邸宅ありしといふ、深草少將とは大納言義平の長子四位少將義宣の事あり、當時小野の庄に小町といふ佳人あり、容色絶倫にして最も歌道に長ず、義宣垣間見て太くも戀ひ慕ひ、窈かに想ひを國風に寄せて通ず、小町容易に靡くべき色もあし、義宣今はとて明らさまに搔口説きてこの願ひ叶はずば此の世に在るに甲斐あき身ごと切に青春の情を訴へぬ、心強くも情あき小町は尙も義宣の戀を退けつゝ左程妾を戀ひ給はご今より百夜の間妾か許に通ひて御身の眞情を見せ給へかしと、義宣悦んで小野の庄に通ふこと九十九夜、最後の一夜風

雪烈しくして歩むべからず遂に失戀の怨みを抱いてあはれ凍れて死にたり、少將の通路は草に埋もれし徑にして欣淨寺の東竹藪の間に通ず、昔は伏見に訴訟する者此の徑を通行せば必らず願ひ事敗るとてこの通行を避けたりといふ、此の哀れにも悼はしき物語の佳人と才人の塚は今相並んで春風秋雨果敢あき戀の末路をさやくものゝ如し。

### 京都市線路附近

東福寺 通天の紅葉と兆殿司の佛畫とによりて有名ある東福寺は惠日山と號し、城南の古刹あり、東福寺停留所の設あり、地は伏見街道九條の末より南方敷町に亘り、東山を後に六萬餘坪を占む、臨濟宗東福寺派の本山にして五山の一、本尊釋迦佛を安置し、嘉禎二年藤原道家の創立にかゝり、藤原頼經、頼嗣等之れを助け、建長七年工を竣へ聖一國師を開山とす、文永二年藤原實經四十一莊を寄附し、弘安二年北條時宗加賀國熊取莊を寄進せるを初め、藤原經通、足利義持、豊臣秀吉、徳川家光等堂宇佛

殿の再建、修營等あり、徳川幕府時代に於て寺領千八百五十四斗を有し、一山の隆盛を極めたるが明治十四年祝融氏の災に罹り、佛殿、法堂、方丈等を焼失せしも往時の大伽藍は尙依然として存し、その結構の壯麗あること洛陽の異彩たり、長松數幹亭々として瓦碧に迫る所、丹碧燦然たる山門あり、足利義持の筆「妙雲閣」の額を掲げ、閣上釋迦佛、月蓋長者、善哉童子の像を安んじ東西に十六羅漢を置く、覆捺の彩畫は兆殿司及びうの逸足寒殿司の合作あり、嘉禎二年の建築にして今は特別保護建造物あり、禪堂は今仮建築あれども宋の無準筆「選佛場」の額あり、中央に釋



通 天 橋

迦佛左右に迦葉、阿難及び四天王を配し、左檀に大梵天、右檀に達磨、臨濟、百丈及び開山聖一國師の像を安置す、開山堂は常樂庵と號し、持明院御宸翰の扁額を掲ぐ、藤原實經の建立にして開山國師をはじめ、達磨、臨濟、佛鑑禪師の像を列ね別に辨財天、毘沙門天、韋馱天及び藤原道家の像を置く、堂の上層を傳衣閣と號し客殿を普門院と云ふ、その他轉輪藏は宋版一切經を藏する所にして、法堂と開山堂との間に通天橋を架し、境内幽邃靜寂にして俗塵を斷ち、特に通天橋の横はれる幽溪、洗玉瀾の畔は巖石相迫りて一溪を開き、清冽の水玉を溶きたる如く流れて青苔を浸し、岩に激して玉碎し、石を繞りて銀屑を散らす所最も趣あり、加ふるに両崖總て楓樹をもつて埋め、秋霜一たび此の仙境に下れば溪澗忽ち錦繡を織出し、その風景言語に盡すべからず、世に名高き通天の紅葉はこれあり。

性 海 和 尚

揮却風斤支落霞。

虹霓千尺截奔流。

通宵一路脚跟下。

往來人從鳥道路。

橋底停車酒半醺。

仰見霜樹亂紛々。

豪來卻上玉龍背。

踏過一溪紅錦雲。

上方山暝宿離喧。

湖底楓樹照酒尊。

非有鐘聲相報道。

何緣知得是黃昏。

境内東南の山中に畫の具谷と稱するあり、兆殿司の繪の具を採收せる所、また摩迦阿彌ヶ森と稱し、古來不伐の深林あり、天狗の棲へる所と云ひ傳ふ、本山昔は五十二坊を有せしも今は二十五坊を敷へ、境内藤原兼實、道家、九條尚實及び藤原俊成兆殿司の墓あり。

藤原俊成墓

東福寺南明院に在り、俊成は中納言俊忠の子、聰慧にして和歌を善く

す、藤原基俊を師とし古今集の秘旨を授けられ、また獨創の見を有す、後鳥羽天皇俊成の才を愛し、仕へて皇太后宮太夫正三位に進み、後髪を剃つて釋阿と號す、千載和歌集は後白河天皇の勅を奉じて選したるもの、元久元年九十一の高齡をもつて薨去す、

『古來風體抄』家集『長秋詠草』等あり。

兆殿司墓

東福寺南明院に在り、吉山、破草鞋、赤脚子は皆りの別號あり、淡路物

部郷の人、東福寺大道禪師に師事す、應永年中南明院に住し、本寺の殿司とあり、人呼んで兆殿司と云ふ、最も繪畫に長じ、専ら李龍眠の畫風を學び、その作品には彩色の佛畫多し、永享三年八月二十日薨、生年八十、その畫大涅槃像、五百羅漢、十六羅漢、四十八祖、寒山拾得、白衣觀音等最も有名あり。

泉涌寺

伏見街道一の橋東に在り、朝家の御香華院にして四條天皇以降歷聖御陵の

在る所あり、開祖は弘法大師にして初め法輪寺と號し、が、文徳天皇の御宇左大臣山本緒嗣、神修上人の爲めに修理を加へ、宗旨を天台と改め仙遊寺と號す、後幾星霜を経て大に衰頽せしを建保年間俊仍國師之れを再興し、化疏を後鳥羽上皇に上り降施最も厚し、此時より眞言、天台、禪、律の四宗兼學とし清泉の涌出せるをもつて改めて泉涌寺と號し、貞觀年中官符を賜ふて勅願所とあり、仁治三年四條天皇を葬り奉り、その後又後光嚴院を茶毘し奉りてより後至尊の御葬所とあり、遂に全國に比類かき御

香華院とありぬ、佛殿、舍利殿、開山堂、観音堂、釋迦堂等あり、靈明殿は歴代天皇、后妃の尊牌を安んじ奉る所にして泉涌水は佛殿南面の崖下を流れ、仙遊石は全山上に在り、古仙人の遊びし所と傳へられ、將軍塚は方丈より六七町の山上に在り、靈城東山の南端伏見山の山腹に位し、東北南の三面は掛峰透迤として梵宮を環らせ、幽靜閑寂自ら別天地をなす、世に月の輪十二陵と申し四條、後水尾、明正、後光明、後西院、靈光、東山、中御門、櫻町、桃園、後桃園、仁孝の十二天皇の御陵墓は泉涌寺の泉山に在り。

**法性寺** 伏見街道三の橋南に在り、元の法性寺は法性寺入道前關白太政大臣藤原忠通の開創にかゝる有名なる巨刹にして、始め東福寺門前鴨河の東岸にありしが同寺廢壞の後三面千手觀音を此處に移して舊號を襲ひ法性寺と稱す。

**夢の浮橋** 大和大路東泉涌寺道に在り、水流は泉涌寺の後山より新熊野の南を繞り、一の橋の下を流れて西鴨川に入る、源氏物語の巻にも出でし名高き橋あり。

**今熊野觀音** 泉涌寺の東北に在り、昔は此地に左大臣山本緒嗣の第あり、後に佛刹

とあり僧房伽藍等を列ねしも應仁の兵燹に罹りて烏有に歸し、今纔かに一堂を存するのみ、弘法大師作十一面觀世音を安置す。

**劔神社** 今熊野町宮の前に在り、天明天保再度の火災にて記録灰燼に委し、創建の年代由緒共に詳からざれど、昔は泉涌寺に屬し、寛永元祿の頃幕府より社殿を修造せられたりと傳ふ、現今の祠は近時の造營にして伊邪那岐、伊邪那美の二尊を奉祀す。

**新熊野神社** 祭神は伊弉册尊にして永應元年後白河上皇の創立し給ふ所あり、上皇紀州熊野權現を崇敬し、勸請して新熊野と號し、社殿結構を極め領域又廣かりしも應仁の兵火に燒亡し、今は甚だしく衰頽して村社たるに過ぎず、今熊野町宇椰木の森に在り。

**大佛殿** 方廣寺と號し建仁寺町通馬町南に在り、大佛前停留所の設あり、天正十四年豊臣秀吉の創建する所あり、舊殿棟の高さ二十五間、桁行四十五間餘、梁間二十八間、中に六丈三尺の大盧舍那佛を安置し、堂宇巍々として丘岳の如く、高く霞綺の間に佛面を仰ぎしものあり、此の工役に與るもの二十一國、棟木は富士山より採りて一

木千両を投じ、巨石を累ねて石垣を築き、数年の後漸く竣成し、慶長元年に至り大地震の爲めに崩壊し、全七年秀頼再建を企て銅像を鑄るに當り誤つて焼亡し、同十五年又金銅の像を鑄造せしが梵鐘の銘に國家安康の文字ありしより家康の忌諱に觸れ、遂に大阪兩度の役を起したるは人の知る所あり、その後五十餘年を経寛文二年再び地震に際し回祿せしより更に木造に改造せしが寛政十年又雷火に罹り、大佛像、本殿、廻廊、二王門等悉く焼失し、爾來改造せんとするも成らず僅かに半體の木像を造りてその舊蹟を存するのみ、鐘樓は豊國社の門の北側に在り、近年此處に移したるものにて、洪鐘高さ一丈四尺、徑九尺二寸、厚さ九寸、慶長十九年の鑄造にして彼の國家安康云々の銘文は今磨滅せり、豊太閤塔は大佛殿舊趾の東南に在り、五輪の石塔にして高さ一尺に過ぎず、太閤法諱を國泰院雲山俊龍大居士と號し、彌陀峰上豊國廟の廢されし後此の塔を造營せるものあるべしと傳へらる、境内萩多く中秋の頃床机を排べて茗酒を賣り、觀賞の客甚だ多し。

稻妻の間や大佛のまごころ顔

許

六

#### 豊國神社

大佛殿の南に在り、豊臣秀吉の靈を祀る、慶長三年八月十八日秀吉の薨じて阿彌陀峰に葬むるや、其翌四年後陽成天皇勅して豊國大明神の神號を賜ひ、その遺骸を葬る所に就て初めて祀廟を建つ、規模宏壯、金碧燦爛として人目を眩し、その祭禮の華麗豪華あること實に一代の美觀たり、後徳川氏の世に至りて漸次荒廢に委し、寛文年間遂に破毀して遺趾は空しく藜葬一基の石に存するのみかりしが、今上陛下登極の初め公の遺勳を追録し、明治元年八月十八日神祇官をして阿彌陀峰の古鏡を祭らせ給ひ、祠宇再興の命あり、爾來毎年祭典を執行し同六年八月別格官幣社に列せられ、全年十二月方廣寺を他に移し今の地域に社殿を造營し十一年九月遷宮式を執行せり、本殿の結構壯麗にして四方に瑞垣を繞らし、拜殿あり繪馬堂あり、唐門は桃山城の城門を移ししものにて彫鏤の巧を極め、今は特別保護建造物たり、境内天竺花を培養し秋の半紫雲地に委するの觀あり。

耳塚 大佛門前に在り、文祿征韓の役、諸將敵の首級を獲る幾萬あるを知らず、即ち耳を切りて監軍の實檢に供し、後醜にして秀吉に献ず、秀吉命じてこれを葬り塚

を建て吊はしむ、今は二丈餘の大五輪石塔あり。

一三六

釋 元 政

授職歸來此築墳。

可憐萬里背親恩。

和歌不入殊方耳。

強唱唐詩慰旅魂。

養源院 三十三間堂の東にある天台宗の一字あり、豊公の室大虞院、其父淺野長政追善の爲め創立し、長政の法名養源院をとつて名く、その後久しからずして回祿し、大虞院の妹崇源院(徳川秀忠の室)これを再建せり開基は長政の子盛伯法師にて本尊恵心作阿彌陀佛を安んじ、本堂、元三大師堂、歡喜天堂、鐘樓等皆觀るべく、特に本堂は伏見桃山城の遺構を移したるものにて松の間には狩野山樂、同永徳、古法眼元信等の名畫あり、又天井は鳥居元忠自殺の板間を張りしものにて血痕斑々として凄氣人に迫り、血天井とて世に名高し。

三十三間堂 京都帝室博物館の東南に在り、蓮華王院と云ふ、此地もと法住寺殿の舊地にして後白河法皇の御所内ありしが、法皇深く佛教に歸依し、平忠盛を奉行とし

て此堂を建立し、千手千眼觀音菩薩の像一千一体及び二十八部衆を安置す、本堂は東面南北の長棟にして凡る六十六間あり、二間を隔て柱を建るが故に三十三間堂とも稱す、建長元年三月炎上せるも同三年再建し文永三年龜山天皇及び後嵯峨、後深草兩上皇行幸ありて供養式を行はれたり、現在の本堂は建長三年の建造にして年を経ること六百五十餘年、桁行十三間三尺四寸、梁行二間三尺八寸餘、四方に廻廊あり、本尊は後深草天皇の勅を奉じ、湛慶の作りたる者にてその餘の千体觀音の作も又同時の作あるべし、瓦屋圓柱にして朱丹を塗り内部は五彩をもつて繪きたり、今は概ね剝落したれど猶りの痕を見るを得べし、徳川氏の頃此處にて大矢數の式を行ひ、諸侯の家臣にして弓矢の譽れを擧げしもの多し、本堂の前に夜蹄水あり、その東に池ありて燕子さきつ花はな多く、花時紫白の瓣葩碧水に映じて情致甚だ掬すべし。

帝室博物館 豊國神社の南、三十三間堂の北に巍然として宏壯輪奐の美を呈するものは京都帝室博物館あり、明治三十年の開設にして面積一萬有餘坪を有し、總工費十六萬餘圓は悉く帝室より御支出あらせられたりと承る、本館を十七室に區分し、陳列

一三七

の區分を歴史、美術、工藝の三大部に分ち、更に之れを十數區に別ち、その陳列品は總て學術、技藝の參考資料たらざるはかし、地域高爽にして綠樹四方を繞らし、白砂草芳ばしく、清泉花麗かにして眞に樂園に遊ぶの想ひあり。

**佛光寺** 佛光寺通高倉に在り、汁谷山と號し眞宗一派の本山あり、見眞大師の開基にして建曆二年山科郷に一字を創建し興正寺と號す、元應年中七世了源寺を東山澁谷に移し中興の祖たり、嘉曆年間盜あり本尊阿彌陀如來を偷み去りしが走る能はずしてこれを藪林の中に捨つ、其夜數行の光明赫奕として帝闕を照らすを見る、後醍醐天皇の佛光の放つ處あるを知り給ひて赦感あり、勅して阿彌陀佛光寺と改め一向專修の棟梁たるべき繪旨を賜はる、自後寺門益々隆盛を極め、寛正年間後土御門天皇第十三世光教を門跡に補せられ爾來世襲せり、これ眞宗門跡の嚆矢あり、天正年中秀吉東山澁谷に蘆舎那殿を建るをもつて今の地に遷し、が元治元年兵火に罹り明治十五年再建せり、大師堂、阿彌陀堂、書院、學院、集會所等輪奐壯麗にして實に洛中有數の建築物たり。

### 紅梅殿神社

佛光寺通新町西に在り、菅原御所又は紅梅殿の稱あり、祭神は菅原道眞の子是善あり、此地舊道眞の邸宅にして、十訓集には菅家太宰府に思召立ける比、

こち吹かにはほひをこせよ梅の花

あるしかしとて春を忘れろ

と讀おきて都を出でつくしにうつり給ふて後、かの紅梅殿の梅のかたねとひ参り生付おひつきにけり云々とあり、往古社地廣大かりしが數次の回祿に罹りて記祿を焼失し奉祀の由緒、創營の年月共に詳ならず、南の方新町菅大臣町に菅大臣社在り、此處は道眞研學の所にして、紅梅殿に對して世人は中古天神御所又は白梅殿とも云ふ、維新の際までは曼珠院に屬せしが明治六年その所管を脱し、三十五年三月府社に列せらる。

**御影堂** 最初は嵯峨に在りしも後東洞院春日街に移り、再び東河原院に轉じ、天正年間遂に今の五條通寺町に移されたり、天長年中檀林皇后の創立にして弘法大師を開基とし、中興王阿上人眞言を改めて時宗とす、本尊阿彌陀佛は安阿彌の作、信濃國善光寺阿彌陀如來の模造かりしかば新善光寺と稱し、世人は御影堂と稱したるが、中世



大に衰頹し、元治甲子の兵燹に堂舎を焼失せるも明治二十七年漸く再建せり。

**長講堂** 下寺町通五條に在り、後白河上皇の創建し給ふ所にして、舊は西洞院六條ある仙院に在りしが後幾たびか轉じて今の地とある、元律宗ありしが今は淨土宗に改まり西山派に屬す、古來繪旨、院宣等を多く藏したるも屢々兵革に遭ひて散失せり。

**市比賣神社** 延暦十四年五月開院冬嗣の創建にして、市杵島姫命、瀛津島姫命、瑞津島姫命の三座を祭る、昔は堀川通北小路に在りしが天正十九年秀吉の命により今の下寺町東入本搦籠町に遷されたり、境内天の眞名井といふあり、清和天皇の御宇より後鳥羽天皇の時まで、皇子御降誕の時は此水を産湯に用ひ給ひしあり、又足利將軍義持の生れし時も産湯に用ひしより祠宇を修造せしよし舊社縁起に見ゆ。

**因幡薬師** 因幡堂平等寺と稱し松原通鳥丸東に在り、長徳三年因幡國賀露津の海面に夜々光あり、國司橋行平漁人に命じて網を下さしめ薬師の尊像を得たり、由つて一字を營みて安置せるが後七年を経て長保五年うの像飛來して洛陽ある行平の邸に入る、行平尊みて邸を佛閣に改め息光朝を禪師とす、承安元年高倉天皇勅額を賜ひ平等寺と

號し、永曆二年後白河天皇御幸あり、從來の堂宇は足利義教の再建にして爾來五百有餘年を経たる古刹ありしが元治の兵燹に罹りて堂宇盡く烏有に歸し、後これを再建せり。

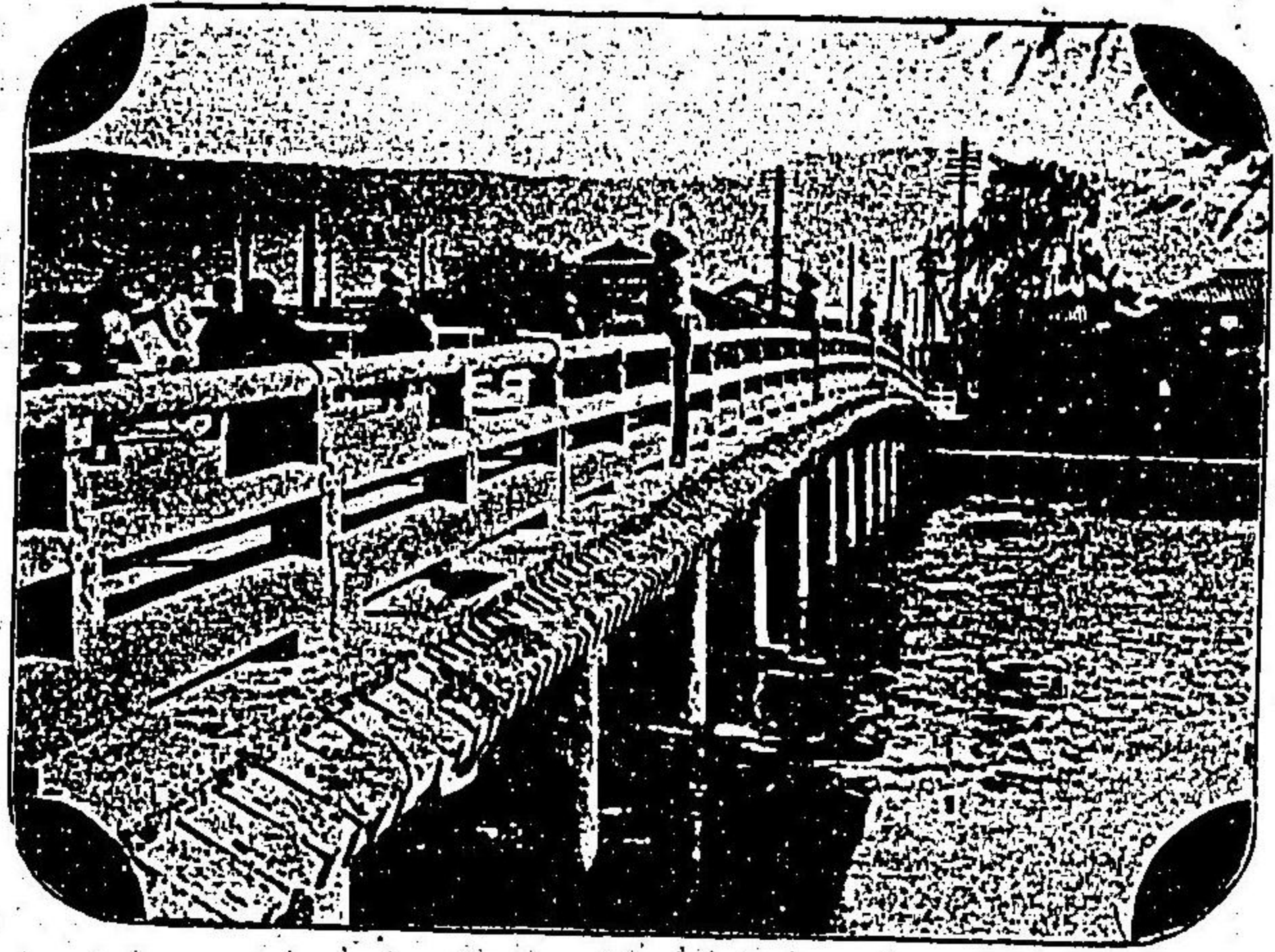
**玉津島神社** 同く松原通鳥丸西玉津島町に在り、本社は藤原俊成の邸地に紀州和歌の浦に鎮座し給ふ稚日女命、息帯長長日女命、衣通郎女の三神を勧請せし所あり、昔は境内廣く松樹繁茂せるより終に町の名を松原と云ふに至り、五條松原社の稱ありしあり、貞和二年再營、名歌所別當職を復興し歷朝の崇敬淺からず、歌道傳授の節は使を遣はし給ふ例ありしが、同く元治元年の兵革に遭ひ、近年漸く社殿を造營せり。

○ 前太政大臣

たのむかを我ふちはらの都より

跡はれりめし玉津島姫

**五條天神社** 松原通西洞院西入天神前町に在り、一に天使社と號す、祭神は天照皇大神、大己貴命、少名彦命あり、延暦奠都の初め奉祀する所ありと傳ふ、古は神殿巍



々として文覺上人配流の時、鳥居の下に黄金を埋めて水手を欺きしも此處あり、又古來節分の日玉串神札を朝廷に献じ、廩米下賜の例あり、此夜諸人群集して厄難消除を祈るといふ。

五 五條大橋 此橋古は今の松原通に架せり、これ元の五條通にて現時大橋の在る所は六條坊門通ありしが、天正年中豊臣秀吉五條橋を此處に移して五條大橋と呼びしかば、遂に六條坊門の名を云はずして五條通と稱するに至り、五條通はうの本稱を捨て、松原通と改まりぬ、この橋初めは嵯峨天皇の勅定により一百餘間の橋梁を用ゐ、東西の大路に續くと水月集に見えたり。

明治四十三年三月十日印刷  
 明治四十三年三月十五日發行

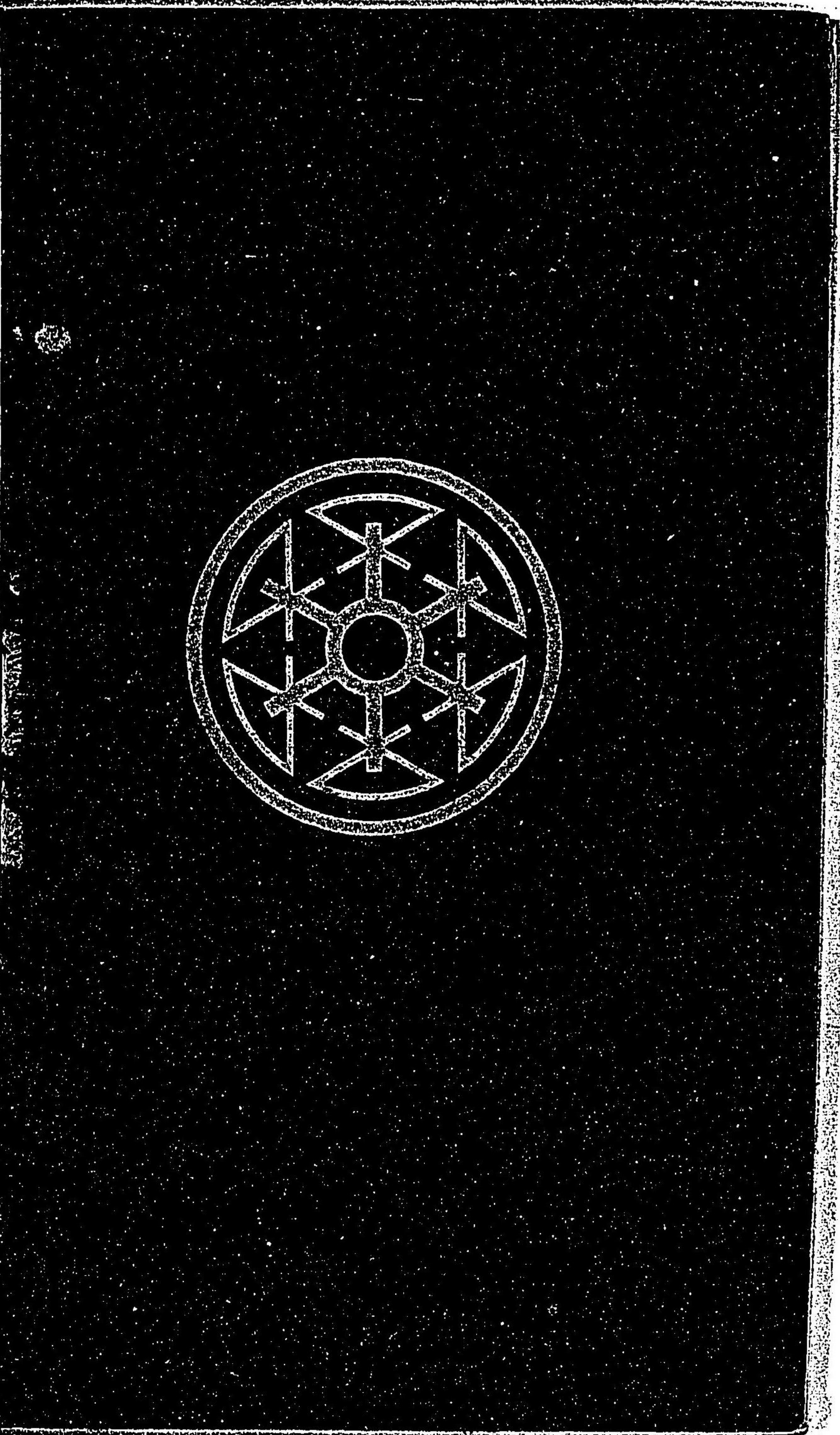
大阪市北區西野田玉川町三丁目  
 千二百四十一番地

編輯者 山本松三郎

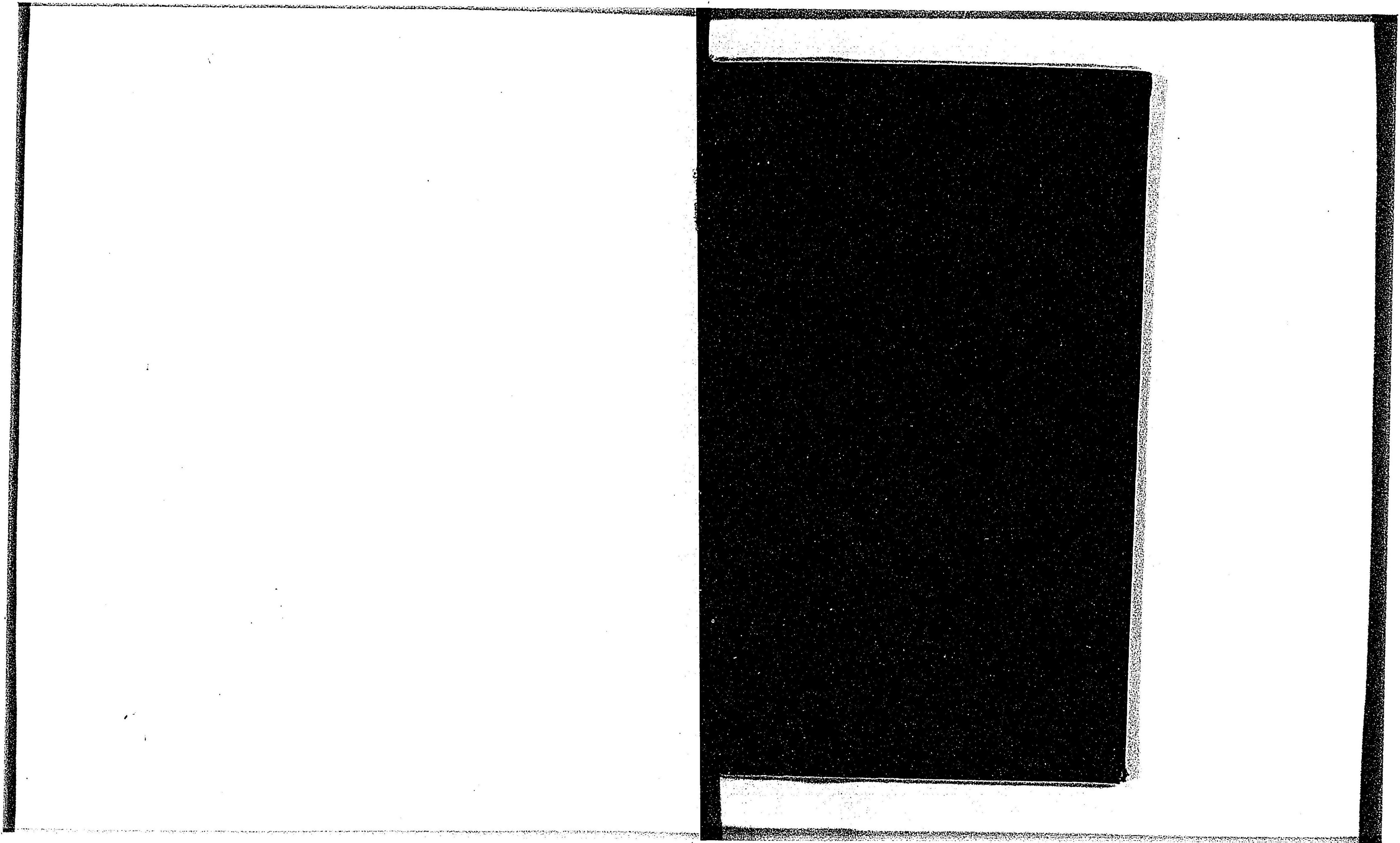
大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地

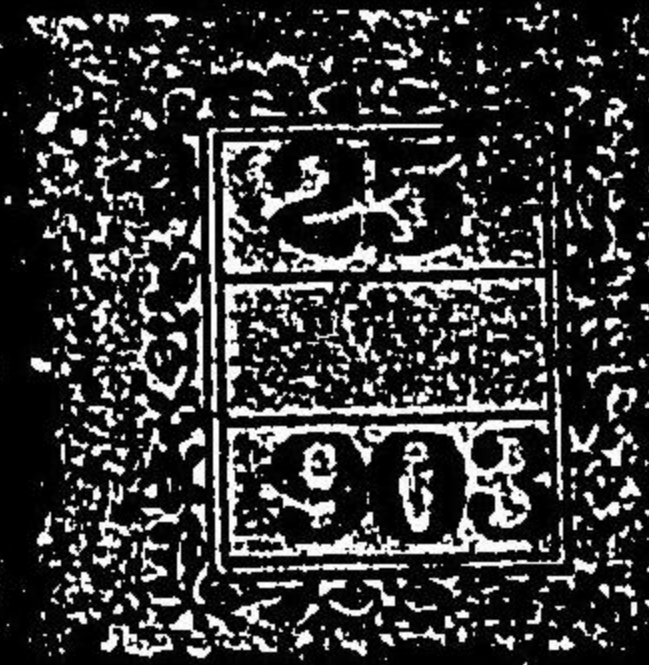
印刷者 濱田正夫

25  
908



35  
908





025412-000-9

25-903

京阪電気鉄道線路案内

山本 松三郎/編

M43

ADC-2861



